川柳塔

令和三年 五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一一二八号

日川協加盟

第9回 春の川柳塔まつり誌上大会

No.1128

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個　人　一口　1／9頁　二、〇〇〇円
　　1／6頁　三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団　体　次の四種といたします。

① 1／3頁　六、〇〇〇円
② 1／2頁　九、〇〇〇円
③ 2／3頁　一二、〇〇〇円
④ 1　頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　五月二〇日

川柳塔社

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

幸せでした

小島　蘭幸

ＮＨＫひるまえ川柳、令和３年３月11日のお題「幸せ」で私の担当は終了することになりました。12月、１月、２月は新型コロナウイルス拡大を考慮して電話出演でしたが、３月11日は、感染者が減っていましたので生出演することが出来ました。小島蘭幸選、最後のお題「幸せ」の特選句は

待つことの幸せサクラ植えました　森山　盛桜

台本が届いて作者が川柳塔社同人の森山盛桜氏と分かりとても嬉しかったのを覚えています。

「最後だから蘭幸さんも一句お願いします」ということでしたので私は

母が笑ったテレビの中に僕がいた　小島　蘭幸

と詠みました。母はいつも私が出演する、ひるまえ川柳を楽しみにしていましたが、２年前の３月19日、入院先の病室で婦長さんと一緒に見てくれたのが最後になりました。翌日婦長さんが「とても嬉しそうでしたよ」と言ってくださったのが今でも心に残っています。その時のお題は「母」でした。

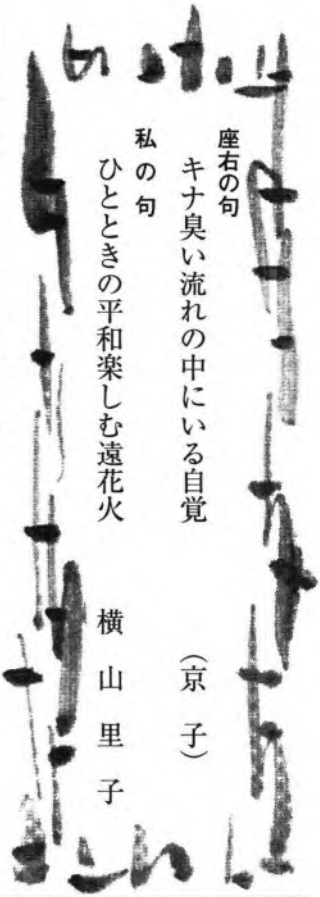
ひるまえ川柳は、平成27年３月11日、お題「春」でスタートしました。特選句は

婚活の環状線を抜けて春　藤井　智史

現在川柳塔社同人として活躍されている藤井智史氏でした。そうスタートもラストも特選句は川柳塔社同人だったのです。

ここまで書いてふっと初めて出演した時のことが鮮やかに浮かんできました。台本をいただいたのは当日の朝９時、放送時間は９分40秒、入選句は６句でした。10時ＭＣと打合せ。10時35分リハーサル、11時30分生放送というスケジュールでした。

川柳の楽しさをアピールするチャンスだとお引き受けした「ＮＨＫひるまえ川柳」、文芸としての川柳を多くの方に知っていただくために一生懸命選句いたしました。６年間、多くの柳友、川柳塔社同人、誌友の皆様にご応募、ご支援をいただきました。心から感謝しています。ありがとうございました。



座右の句

キナ臭い流れの中にいる自覚　（京子）

私の句

ひとときの平和楽しむ遠花火　横山里子

川柳塔　五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「輪島朝市」

■巻頭言　幸せでした……小島蘭幸…(1)
下山岐陽子の生年……棄原道夫…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑮⑤……木津川計…(38)
西尾栞句集『水鶏笛』……(39)
自選集……(40)
句集の森……宮口笛生…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……西出楓楽選…(44)
英語 de Senryu ⑫⑫……吉村侑久代…(61)
誹風柳多留一三篇研究 9……(62)
愛染帖……新家完司選…(64)

下山岐陽子の生年

棄原道夫

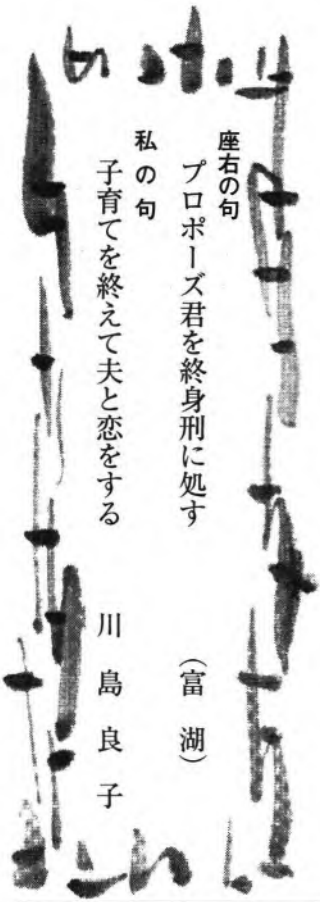
下山岐陽子（本名・京子）は、新川柳初期の女性柳人の第一人者であった。

前髪に積る紅葉をうれしがり
茜さす「ほらあのやうな服の色」
波の精散るよと見れば磯千鳥
バイブルに文と菫と忍ばせて
細い雨断頭台に鳴くからす
唄消えてみ堂に残る毬の跡
黒き血の毒蛇と為てまつはるゝ
金屏風エデンの夢のひそむらし

明治37年（一九〇四）、阪井久良伎（当時は久良岐）選の柳壇に投句。翌年、久良伎から「岐陽」の雅号を貰い、毎日電報柳壇の選者を務める。その後、大阪時事新報記者、東京時事記者を経て、大正元年（一九一二）、築地で一葉茶屋の女将となるが経営が立ちゆかず、翌年茶屋を閉じ、京都で大原女となる。大正3年女優となるが、その後の消息は不明。

さて、下山岐陽子は『川柳総合大事典』

檸檬抄「弾　く」……石橋芳山・古今堂蕉子共選…(68)
一路集（「まるい」……栗田忠士選…(72)
「　髪　」……松尾美智代選…(73)
初歩教室「　芸　」……髙瀬霜石…(74)
川柳塔鑑賞……木田比呂朗…(76)
水煙抄鑑賞……川﨑ひかり…(78)
せんりゅう飛行船㉕……新家完司…(79)
第九回　春の川柳塔まつり誌上大会……(80)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(102)
各地柳壇（佳句地十選／堀　正和・関本かつ子）……(104)
五月各地句会案内……(116)
柳界展望……(118)
■編集後記（ひとこと／板山まみ子）……朱夏・勝弘…(120)



座右の句
プロポーズ君を終身刑に処す　（富湖）

私の句
子育てを終えて夫と恋をする　川島良子

でも生没年不詳となっている。せめて、生年だけでもわからないかと思って、本名の下山京子で検索したところ、国会図書館で何件かヒットした。

X生著『新しき女』（大正2年1月16日）の「美人記者 下山京子の巻」に、〈始め(ママ)て記者となつたのは十八歳の時――大阪時事新報であつた〉とある。久良伎の「五月鯉」を調べると、岐陽子が大阪に行ったのは明治39年（一九〇六）であることがわかった。18歳は数え年だから明治22年（一八八九）生まれになる。

下山京子の自伝に『一葉草紙』がある。大正3年（一九一四）1月20日の発行である。その「はしがき」に、〈『一葉草紙』は二十五の女の半生の歴史として〉とあり、本文の「男の市場」でも〈二十五の今日まで〉とある。大正3年に数え年の25歳だとすると、1914－24＝1894で、明治23年生まれになってしまう。発行は大正3年1月20日だが、「はしがき」と本文を執筆したのは、大正2年だと考えられる。それで計算すると、1913－24＝1889となり、下山岐陽子の生年は明治22年で間違いないだろう。

川柳塔

小島蘭幸選

月光の雫に濡れている畳
家政婦のように覗きにくる猫よ
中庭でくすぶっている似非詩人
体育倉庫にずっと隠れているわらし
タンカーの向こうに消えてゆく蝶か
春がすぐそこに来ている紙袋

堺市　桒原道夫

夕べの雨の雫におはようございます
友達が来るので鍵は掛けてない
空気読めないおばあさんになり
今日はすき焼きやねんと一人暮らしの姉
気合いを入れるエンジンがかからない
お久し振り桜の前で一礼す

大阪市　谷口義

産み落としたのは愛しい分身だ
にんげんは我が子の為になら死ねて
肉球の愛しほっぺのまた愛し

枚方市　栃尾奏子

母娘とも未熟なのです反抗期
泣きながら探したすべり台に居た
幸せです死んでも良いと思うほど

今治市　永井松柏

コロナ禍に無縁の過疎の地に暮らす
何もない地だが一面の菜の花
血圧に一喜一憂する余白
一病という爆弾を抱いている
暇つぶしの竿が大魚を釣り上げる
五黄の寅の妻と暮らして半世紀

藤井寺市　太田扶美代

生きてゆく濁った音をさせながら
薄氷またわたくしの片想い
流されて生きる姿勢が好きだから
くよくよをまだ引き摺っている紅茶
かごめかごめ未来も君を選ぶだろ
神がまだわたしに隠してる未来

和歌山市　柏原夕胡

しあわせは春には春の音を聴く
葉桜になって私が病んでゆく
信じてたお方の口は軽かった
今ここに来てしあわせを噛み締める
猫と暮らして人間がよく解る
涙ひと粒　また川柳に救われる

西予市　西田美恵子

野辺送り今どの辺り妹よ
生きようねステージ4と言われても
帰れない気がする入院はしない
さくら咲いたよあんなに待った桜だよ
袖通す残り香を着る形見分け
未読のままのメール残っているスマホ

箕面市　酒井紀華

非常食少しは溜めるひとり者
亡き夫お願いばかり読経する
老いて尚ぎっしりうまる手帖もち
花曇り逢いたい人は星になり
「無の時間」二時間つくりリフレッシュ
白鳥になる夢もみるわたしです

米子市　吉田陽子

一段と躓きやすくなった春
お先にどうぞ喜寿には喜寿の車間距離
文鳥も栗鼠もあれから棲みつかず
やさしさの裏を臆測などしない
休肝日ならぬ私に休甘日
花の旅吉備津神社に締めくくる

鳥取市　岸本宏章

ステイホーム年金者にはありがたい
雑魚もよし自由気ままに生きられる
気持よい目覚めコーヒーまで旨い
着ていない服は捨てろという箪笥
大臣になりたいと言う子がいない
豊かさへの倍返しかも温暖化

羽曳野市　吉村久仁雄

目の保養四季の花咲く路地を行く
筋金入りの平和マニアと自負してる
夫婦喧嘩が笑い話になるあした
原発ゼロなんの支障も僕にない
生きてまた会おうと同窓会を閉め
この人の個性だ誰も責めはせず

尼崎市　山田耕治

仏壇へ今日三月になりました
冬のトマト独りの膳に手を合わす
肩揉みを亡妻は一番よろこんだ
披露宴土の匂のする叔父と
肩叩き券つくってくれた子も二十
ぎっくり腰です電話が鳴ってます

犬山市　金子　美千代

春は黄色から福寿草クロッカス
大根を煮よう一日雨模様
大量の広告欲しい物がない
家族葬すっかり根付かせたコロナ
どのポケットにもあめちゃんが入ってる
逃げるのは負けたからではありません

大阪市　田中　ゆみ子

春時雨隣町から来たようだ
桜満開きっと喜劇にしてみせる
笑いという薬五七五の仲間
悪友が集う故郷の縄暖簾
人生の履歴書祖母の顔の皺
春の窓紙飛行機を飛ばそうよ

米子市　成田　雨奇

おもしろい人生なんてありゃしない
日が暮れた犬の頭を撫でてたら
A型は背中にも目が付いている
美代ちゃんが笑った今日はいい日だな
婆さんが言わなくなった旅の夢
ご職業上皇とでも書いとくか

朝霞市　前田　洋子

お雛様私もおんな紅をさす
入院の猫の目うつろ私追う
猫が病む私こんなに弱かった
老猫はだてには歳をとってない
ポジティブに明日はひとつ歳をとる
3・11申し訳無い誕生日

藤井寺市　髙田　美代子

マスクして今日も我が身の置き所
オムライス食べたくなった今日の月
桜満開のこり時間をふと思う
税金使ってるんですね接待も
ぞろぞろと僕もわたしもおよばれに
春彼岸あなたと話す仏花買う

河内長野市　梶原　弘光

春が来た対面授業ゼロのまま
お地蔵が手作りマスクする峠
不精髭マスクなおさら手離せず
図書館に別冊付録置いてない
風呂でしか出来ぬ体操あえいうべえ
まだハードパンチ炸裂する自信

西宮市　緒方　美津子

高級なティッシュに限る花粉症
夫には時どきよいしょしています
こりゃうまい風と遊んだ一夜干し
任されて思う存分やれました
老木に蕾エールと思いたい
制服の店員さんだ値切れない

札幌市　小沢　淳

二キロ圏あの吉野家も王將も
裏目後手すかさず吠える評論家
フードロス処理にかかるは二兆円
文学に近づくミクロからマクロ
北海道特A米が3種あり

塩竈市　木田　比呂朗

錠剤をかぞえ五月の危機管理
連休は自粛自制と呪文めく
巣ごもりにテレビドラマは五月晴れ
出動は直ぐできますとスニーカー
旧いなあ我が家は疾うに女帝制

弘前市　稲見　則彦

振り向いて足跡探す影法師
ああ春よ津軽の春よわが春よ
スイッチオンすぐには無理というものよ
勇気ですかわたしに在庫ありませぬ
津軽西海岸夕陽無人駅

弘前市　今　愁女

高齢に前期後期が気に入らぬ
とにかくも健常なれば仕合わせだ
間もなくは近場公園花見でも
マスクでの団体旅行想像す
待つはただ終熄のみでございます

横浜市　川島　良子

覇気のない答弁瞳死んでます
受賞してそれから険し趣味の道
優勝か引退横綱の責務
無観客五輪へ足並みが揃う
ワクチン終了まで延々続きそう自粛

横浜市　菊地　政勝

ストレスが溜まらぬはずがない自粛
マスク越し目元が笑う花の下
収束の神を探して待っている
あらがってみても無駄です老い進む
思い出の母はいつでも割烹着

上尾市　中村　伸子

沈丁花春の匂いがあふれ出す
十年後誰も帰れぬ街ありて
コンサート配信で観るコロナの世
カロリーを確かめ思案する甘味
一日の終り流しを拭きあげる

越谷市　久保田　千代

たっぷりと時間ができて認知症
残るはずない飲み薬手に余り
散髪をしてまた家に帰るだけ
温もりを隣の他人からもらう
お互いに弱味持ってるから夫婦

東京都　川本　真理子

ゆっくりと考える人の幸せ
立て直しながら進んで行くことに
老いること姉が許さぬ墓参り
不満だけたまって今日は歯も痛む
チャンネル権ドラマぐらいハッピーエンド

八王子市　川名　洋子

春の陽を浴びて指折る五七五
風邪花粉あるいはコロナややこしい
ウオーキング心もとない初音聞く
生き下手でいいのんびりと呼吸する
コロナ禍も新芽花芽がすくすくと

富山市　島　ひかる

ついばまれたパンジー春の色で咲く
仲間から敬語でメール来る齢
他人と同じ我慢出来ない事はない
手術室バースデー声掛けられる
雑巾を縫える日を待つ快復期

可児市　板山　まみ子

腹が立つ時は一人で聴くバッハ
花粉症ですと胸につけるバッジ
お釈迦様コロナ御存知ないでしょう
ウイルスを追い出す小窓常に開け
不便さも空気の良さは替え難い

名古屋市　山本　三樹夫

災害に断捨離をして準備する
巣籠りに家計簿までが渋くなる
巡礼をしたい卯月の空青く
東北の災害恨がまだ癒えず
朝粥に戦後を想い感無量

犬山市　関本　かつ子

カサカサの世にしっとりと春の雨
大あくび出来る幸せ仕舞風品
忙しい内が華だと言いきかせ
若作りしてても席を譲られる
よく体壊さないなと吉田類

愛知県　早川　遡行

町中に住んでポツンと一軒家
窓ガラス磨き自粛の鬱が晴れ
自粛して増えた酒代高熱費
電話して少しは気持楽になり
二年目の今年も中止になる花見

鈴鹿市　小河　柳女

春だからからだが歌い歩き出す
やさしさを紫色で織っている
扉があってゆっくりと眠れます
難病に押され押したり負けるもんか
人生の横道ひとり行く淋しさ

京都市　清水英旺

日の丸がちらほらと咲くきよう旗日
老衰死それもよかろう迷惑か
看護師は眉根も寄せず身を尽くす
バラ一輪診察室があたたかい
ただいまと元気な声の妻を待つ

京都市　藤井文代

今日もまた脚本なしでステイホーム
ソーシャルディスタンス人の温もりより解る
雑な人から叱咤受けてる几張面
聞き上手忘れ上手に惚け上手
愚痴に噂マスクのお陰口に出ず

長岡京市　山田葉子

さあ再開からだはついてくるのかな
バスの客また便数が減りそうだ
エネルギー不足ですぐに怒れない
ポストまでに二度立ち話はずんでる
内助の功わきまえすぎもあるのかも

大阪市　石田孝純

一粒の涙に百のストーリー
泣くときは独りの時と決めている
あっけらかん泣いたカラスのパピプペポ
躓いた場所に花まる描いておく
新しい春にやる気を接ぎ木する

大阪市　磯島福貴子

カニ料理言われなくても黙食だ
誌上句会そろそろ幕を引きたいね
たらればと反省しきり今生きる
問い続ける生きてる意味とその意義を
体調不良熱りさます口実に

大阪市　井丸昌紀

乾杯はマスクしたまま音立てず
晴れる日がきっとくるという思い込み
コロナ禍に祈る形で手を洗う
ふるさとはいじめっ子さえ美化されて
どよめきの輪に入りたい出られない

大阪市　岩崎公誠

食べものに合掌するが拍手せず
バイトからたたき上げた新オーナー
手のひらにスマホ情報踊ってる
あの日から十年の日々フクシマよ
奉仕デー売上げあげる古い手だ

大阪市　岩﨑玲子

健脚で旅に出たいとストレッチ
コロナ禍でお墓掃除も遠ざかり
人ゴミの街が恋しくなるなんて
老い薬　散歩体操はずせない
この耳はいい事だけを聞きますね

憧れる玉三郎の緩い所作
アメリカが静かになった本を買う
卒園に少し塩っぱいにぎりめし
ローカルバスたった一人の客になる
居住まいを正す妻には敵わない

大阪市　内田志津子

変ですか私苺が苦手です
われもわれもと玄関の鉢植え
産直のちょっと安心虫食い菜
国際女性デー咲き誇るミモザ
少しずつ不自由少しずつ慣れる

大阪市　宇都満知子

折角のワクチン拒否なんかしない
休肝日に限ってお誘いがかかる
ほとんどは夢でよかったことばかり
マイデスク一週間で山積みに
何事にもポーカーフェイス特技です

大阪市　江島谷勝弘

お見事にピンピンコロリ逝きはった
今日という今日は許さぬみじん切り
せっかくのシーンがカットされたまま
初孫が軽く治めた家庭不和
補聴器を外して聞こう風の声

大阪市　榎本日の出

雛祭りコロナ撲滅願いつつ
母の年とっくに越えてまだ元気
頼まれて出来る間は喜んで
物忘れ言った言わない日が暮れる
スーパーに行くも近頃二人連れ

大阪市　榎本舞夢

頭フラフラもう自転車は返納か
怒らねば前に進めぬこともある
倒産と自主廃業にある違い
言い勝った母の淋しい顔を見た
惜しくても切らねばならぬ枝もある

大阪市　大川桃花

いきいきと細目輝く雛人形
花火終え月美しく白くみえ
端居してタバコを吸って父が居る
父と子の男どうしの約束だ
嘘ついていつもの如くめしを食い

大阪市　大治重信

立飲みでデッカイ話するマスク
聴診器あてにならぬとレントゲン
先見えぬコロナと株の値は危険
若蔵と言われた僕も高齢者
コロナ禍に地震のオマケついてくる

大阪市　奥村五月

大阪市　小野雅美

投げつけてみたい時さえあるスマホ
年齢を七掛け背筋伸ばそうか
不愉快にさせるスイッチまた増やす
大丈夫笑顔の仮面ある限り
幸せ芝居続け心は折れたまま

大阪市　笠嶋恵美

写真立てにっこり笑うだんな様
亡夫の着物作務衣に仕立て身にまとう
片付けを文書化にする時期が来た
言葉ってすごい力をかくし持つ
お茶たててふっと昔の晴れ姿

大阪市　金川宣子

春うらら生命線が伸びをする
梅サクラ一歩一景楽しんで
励ましの赤い服着て街に出る
エンディングノートに追記書き添える
巣立つ子の夢はでっかく果てしなく

大阪市　川端一歩

気がつけば愛しい人がそばにいた
難しいことよりさきにまずビール
八十五歳百にはまだまだ　いやすぐだ
どこに行くちょっとそこまでいい答え
震災10年原発ゼロはいつになる

大阪市　古今堂蕉子

プラゴミの手強さを知るテレビから
昔の海返せとクジラ魚たち
免許返上警察官と縁が切れ
断らぬ女が落ちた浅い溝
女で腹立て女だからと救われた

大阪市　近藤正

朝飯前二十五回のスクワット
トイレにも春の香が満つヒヤシンス
ＮＨＫ御用放送なら要らん
コロナ禍に安全ネット穴だらけ
失ったものは大きい原発禍

大阪市　坂裕之

強がって話しているが足下が
納得がいくまで話詰めていく
弱い児をみんなで守る子供たち
もう少し商売をする意欲湧く
精一杯働くことで気を高め

大阪市　高杉力

カタカナの店の名前が出て来ない
老老介護明日の自分を見てるよう
デジカメは付度なしの解像度
華々しい過去ではないが捨て切れず
にんげんでいたいたまには背伸びする

大阪市　高杉千歩

鉛筆ノートあっちこっちに置いてある
どれが本命かすべてに※印
戦いすんで日が暮れて睡眠薬コール
マスクマスク男性女性解り兼ね
コロナ旋風薫風に変え五月鯉

大阪市　田中廣子

梅便りテレビニュースで我慢する
菜の花の迷路楽しげみとれてる
ワクチンを打つのがこわい後遺症
動きたい動けば強い痛み出る
ガガさんのネットの見舞うれしいね

大阪市　津村志華子

世相どうあればっと桜が咲きました
朝の目覚めに今日も命をいただいた
大正生まれ時々唱歌口ずさむ
ひとり芝居の幕を下ろそう陽が沈む
おばあさんのヨイトマケだよ どっこいしょ

大阪市　寺本実

寒いのでマスク二重にして出かけ
夜の町議員バッジは平然と
どっこいしょまだ歩けるぞ梅見行く
でたらめを言うなと声が震えてる
いやいやをされて可愛さ増してくる

大阪市　中井崩

武器だった若さ脱ぎ捨て老い磨く
孫の恋電話口からこぼれてる
膝痛い昨日は左今日は右
もう荷物降ろして楽に生きようよ
団塊の世代あの世も密覚悟

大阪市　原田すみ子

点滴5回ポトンポトンと心にも
B品のお得 A品の安心
気に入った食器二 三で事足りる
夫また政治に怒り吠えている
お隣のたわわの柚子を今日も見る

大阪市　平井美智子

生き方を問うてファーブル昆虫記
鳥だったことが書かれている履歴
勘違いばかりしてきた足の裏
平等にいただいている春の風
春風が吹いたら蝶になる予定

大阪市　平賀国和

血圧が下がり体も春を知る
宣言解除ようやく孫と面会す
宣言解除たちまち街に人あふれ
十年後も里に帰れぬ原発禍
普通でいい衣食住ある有難さ

大阪市　宮崎　シマ子

この年は梅見もできぬ寂しさよ
歩道橋は渡れぬ遮断機の方を選る
鳥獣戯画蛙に恋をしてしまう
預金の残と私の寿命どちらが先
若く見られはっきり生年月日見せ

大阪市　山本　加お里

けんめいに独りで生きて夫恋う
親ゆずり傘寿すぎてもわたしの歯
愛してる今では好きと手を合わす
今日もまた朝日夕日に掌を合わす
介護する親を叱るなゆく道よ

大阪市　横山　里子

テレビ消す隣の子等のはしゃぐ声
ママが子に還って遊ぶシャボン玉
名も知らぬ草に諭され生きるべし
立ち消えたらしいな恋の導火線
とりあえず赤い服着て若く見せ

大阪市　若本　安代

記憶力あまり良くても疎まれる
頷いてくれるだけでもうれしい日
コロナ禍が人生観を変えました
春うららお地蔵さまも眠たそう
日脚延び花屋の前は賑やかに

堺市　今井　万紗子

厳しかった父にもあった優しい目
青空へ凹んだわたし干しておく
カラフルなマスクで近所闊歩する
雛飾り終えて春待つ日向ぼこ
若かった両手にあった夢の数

堺市　奥　時雄

この春はよそごとにする花だより
咲いたよと亡妻に見せたい庭の花
仏壇にほどよい庭の沈丁花
朝ドラに昔のミナミ甦る
良かったなあ米朝文枝春団治

堺市　柿花和夫

お参りは二の次まずは朱印帳
そこそこはクリーンに生きてきたつもり
立ち読みも予定に入れて万歩計
愛犬の名は球児ですトラのファン
小白鳥を見送る無事を祈りつつ

堺市　源田　八千代

オリンピックへ名誉挽回女性パワー
治まるまで入院でもとアドバイス
フリル付きドレス葉牡丹の踊り子
くしゃみ出ても懲りずに布団干している
唇に歌胸の痞えが消えて行く

堺市　齋藤　さくら

春が来たマスクはずして日向ぼこ
よく笑う人が輪の中一人居る
人生に一度ぐらいは種を蒔く
うっかりを女性差別と叱られる
男女同権うかつなことは言われない

堺市　坂上　淳司

想定外の災害多発国に住む
6強の余震も起きた十年目
大津波の画像見るたび息を呑む
嵩上げの街は出来たが人疎ら
原発のデブリ未だに取り出せず

堺市　澤井　敏治

新しい年には新しい課題
コロナさえ無けりゃあなあと青い空
俺んちの庭だとクマも自国主義
引き籠もりおよしよ春が来ているよ
ホーケキョとまだうぐいすの準備中

堺市　遠山　唯教

振り返ればこれまで生きた強い運
苦労して小さな沢が川になる
婚約にうれしい声の孫娘
議員辞職そんなに悪い人じゃない
多情多恨の哲学が裏にある

堺市　内藤　憲彦

テレワークばかりでココロ風邪を引く
五輪万博試す日本の底力
ジェンダーギャップこころ開けば済む話
ママチャリに歩きスマホを煽られる
有名になった途端に文春砲

池田市　太田　省三

コンビニは過疎の深夜の命綱
順守する制限速度あおられる
地に伏して紫雲英を狙うカメラマン
廃業を勧めたくなる占い師
病室の匂いに勝る桜餅

貝塚市　石田　ひろ子

川柳で心の海を泳いでる
必要とされてる内は頑張れる
根から葉まで聞いて孫から嫌われる
マスクして鋭くなった眼の動き
白木蓮たまゆらに聞く母の声

河内長野市　大島　ともこ

喜怒哀楽分かりやすくて憎めない
白魚のようだった手もメタボ気味
ブレーキの筈がアクセル踏む怖さ
お呼びでない客が一番呑み騒ぐ
悔しいが「好き」が止まらぬこれは恋

河内長野市　木見谷　孝代

若冲の絵の西陣織りに舌を巻く
日本の伝統芸の奥深さ
形見の車大事に乗ると車検する
十年を経ても哀しみふつふつと
さっきまで生きてた人が居ぬ恐さ

河内長野市　黒岩　靖博

バースデー頬が落ちそうデカ苺
メロンから苺に化けたバースデー
兄さんと呼ばれ気分は若返る
爺ちゃんや父さん言わず兄さんと
アイマスクしては気休め直ぐに取る

河内長野市　辻村　ヒロ

恋話掃き集めては膨らます
ひとつずつ出番忘れる昨日今日
コソコソと体重増加自粛中
孫の成長眩しく見上げ弾む春
残り火を細細燃やし句を作る

河内長野市　中島　一彌

前向きに生きて明日の風を待つ
百歳の母にワクチン打つ知らせ
玄関の取っ手マスクを掛けてある
日脚伸びもぞもぞ動き出すいのち
自粛解け桜の下で騒ぎたい

河内長野市　藤塚　克三

春なのに溜め息ばかり何故なんだ
コロナ禍におまけ凄いと客を呼ぶ
顔の皺に肖りたいね脳の皺
じんわりと堪える妻の里帰り
お隣外車指をくわえて軽に乗る

河内長野市　村上　直樹

愚直そのもの仕事一途に生きて今
遍歴を語れば尽きぬカーマニア
曽孫にも抱っこしながら反戦歌
日記帳我が人生の漫遊記
庭の木をばっさり迷い消えました

河内長野市　森田　旅人

花だより二人で行った日を想う
水かえて春の陽メダカ嬉しそう
祈りつつ透明になるこころもち
走り書き母の手紙はお守りに
下校時にあわせて散歩子等の声

河内長野市　山岡　冨美子

それなりの予防をせよというコロナ
受話器まで自粛モードになっている
歳の欄見ると目眩いをしてしまう
トラウマが疼くピアノを見る度に
陽光が腰を伸ばせとささやいた

岸和田市　岩佐　ダン吉

世渡りの上手さ弱点にもなろう
都合よく記憶にないと言えますね
プライドを捨てたら何が残るだろ
ディスタンスなんだ私はハグをする
握手まであかんおかしな国になる

吹田市　太田　昭

雑踏に紛れ己の影を消す
恥ずかしいものが無くなる怖い歳
真相を追って古傷深くする
生きてゆく修正液を持たされる
雑草のままでしぶとく生きてやる

高槻市　片山　かずお

ただいまの声を土産に旅終える
元気です五欲を握りしめてます
身嗜みですとヒゲ剃りしてマスク
恰好いいねといつも耳だけ誉められる
グータッチだんだんサマになってきた

高槻市　島田　千鶴子

穏やかな目だ笑ってる泣いている
水仙が並ぶ辺りで日向ぼこ
すぐ側で不安を聞いてくれる耳
小さい恋とろり溶かしたチロルチョコ
春色のドラマ始まる新学期

高槻市　初代　正彦

ポイ棄てのマスクに鴉後ずさり
収束へいけずしそうな変異株
久しぶりの出逢いに篤い肘タッチ
殊の外電チャリという優れもの
B面にまだたっぷりとある余白

高槻市　富田　保子

ふる里をつなぐ絆は納税で
お日様に甘える様に梅開く
気ぜわしいケイタイ何故か手離せず
リフォームに憧れている台所
老い二人甘える技も生きる道

高槻市　原　洋志

AIとの付き合い方がわからない
懐かしい郷の訛に負けて買う
あちこちを補強し生きるがまん坂
ストレスを発散させる百均屋
芋焼酎波長合わせる縄のれん

高槻市　松岡　篤

新コロナ恐れることで身を守る
孫二歳にうがい手洗いチェックされ
食べ出すと黙食なんて忘れてる
誰も居ぬ散歩道でもマスクして
家族愛支えた家もいま更地

高槻市　安田忠子

青信号渡れそうだが次を待つ
バレンタイン二十歳の孫がバッグくれ
涙出るひばりを歌う島津亜矢
黒髪をばっさり切って憂さ晴らす
プレバトにヒントをもらい句を作る

豊中市　池田純子

さりげなくお雛さまかてディスタンス
生きたいともがいた友の一周忌
父は梅　母は桜の香を残す
かけっこは負けてもオセロまだ負けぬ
遠い日の絵日記からは笑い声

豊中市　きとうこみつ

桜のつぼみほめられるのをじっと待つ
チューリップきれいに咲いて歌になる
ほめられて怒る人などまずいない
離婚未婚に聴き耳立てる同期会
シンデレラも慌てるコロナ禍の時短

豊中市　藤井則彦

孫に甘く子には厳しくする我が家
お迎えが来たら困るとスマホ切る
プラスマイナスゼロのほんわかいい余生
テレワークに妻の机を借りる日日
今日までの僕も明日には変えてやる

豊中市　松尾美智代

覚悟を決めて小さな溝を飛び越える
神に祈る叶わなくても叶っても
想定外頑張ってますスニーカー
平均寿命までは頑張りたい二人
歩き疲れた私を癒す春紫苑

豊中市　水野黒兎

流行は追うもの年は逃げるもの
若者の自爆テロめくいっき飲み
沈丁花今年も咲いてまだコロナ
三代が使い机のまるい角
ミソスープなどと呼ばれる国際化

富田林市　片岡智恵子

半歩だけ踏みこむ老いの土踏まず
ある予感こわれる壺に見た魅力
日がな一日テレビと本の巣ごもりぞ
雲流れる想いびとみな天国へ
生きているあかし見なれている景色

富田林市　中村惠

古稀過ぎてやっと私も独り立ち
誰にでもたやすく手の内を見せる
明鏡止水石を投げてはいけません
哀しみはわたし一人の軽いもの
約束の語尾が小さくなる明日

富田林市　山野寿之

蝸牛角引っ込めて自粛中
鬘鑠もよちよちになりケアハウス
鮭のあら粕汁になる外は雪
コロナ禍のおでん恋しい縄のれん
お神籤の凶は転ばぬ先の杖

寝屋川市　伊達郁夫

タンポポに乗って童話の旅に出る
精一杯着飾っている淋しい日
昨日よりいい日と思う目玉焼き
人生をパッチワークに織り上げる
抜け毛一本ご苦労さんとする辞儀

寝屋川市　冨山ルイ子

手縫いのマスク百五十枚以上
腕痛く注射たのむとレントゲン
右と左指と手のひら痛む日日
考えるとマスクあげたい人はまだ
楽しみのマスク作りは中休み

寝屋川市　平松かすみ

ありがとうご近所からの散らし鮨
二メーター離れタッチもままならず
その昔カゴメカゴメの真ん中に
蕎麦殻の枕の好きなおばあちゃん
兄姉の見舞いコロナが終ったら

寝屋川市　森茜

ひもとけば古書を疾走する小蜘蛛
すこやかに薫るおだやかなる寝息
10センチの隙間にころぶ光の輪
ひさびさの遠出に確と老いる足
友ら老い桜梅桃李咲いている

羽曳野市　磯本洋一

昨日今日明日明後日ながらえて
ピザを切る七等分と頼まれて
野の案山子フェイスシールド鳥笑う
妻小言オクラ納豆ねばねばと
恐い順コロナ地震に雪と妻

羽曳野市　宇都宮ちづる

三・一一画面から知る恐い海
官女のひとり眉がないのに気付く孫
鉢植えの水仙二年葉だけです
五輪チケット祈りを込めて権利もつ
春の風母の手作り餅届く

羽曳野市　徳山みつこ

大震災不明者はまだ波の下
復興へ私は何をしただろう
二万余の命へ想いあれこれと
入社式万里の波涛越えてゆけ
道の駅母の味する草団子

羽曳野市　藤原大子

一つではないと答えが惑わせる
突き詰めて袋小路に迷い込む
心ころころ今日のイエスが明日はノー
心配はやめよう子には子の暮らし
おしゃべりに助けられていたストレス

羽曳野市　三好専平

ワクチンもアメリカ頼みのコロナの世
安倍は嫁菅は息子で味噌をつけ
抱きしめてみたら枯木もあたたかい
嘘のゴミ溜まったままの永田町
わたくしも欲しい素敵な二枚舌

東大阪市　北村賢子

上京する子無事に過ごせと願うのみ
さみしさと希望交錯春四月
十年を経て記憶鮮明大津波
復興の兆しへ惨い新コロナ
時折は外出こころリフレッシュ

東大阪市　佐々木満作

缶ビール半々にして鍋つつく
温暖化人類の危機懸念する
コロナ禍も年金貰う有難さ
どうなるか巨額投じたパラ五輪
入浴中互いにノックして安堵

東大阪市　西村哲夫

吟行無きも鮮やかに鮮やかに
超常識常に菩薩と居る暮し
父さんと子どもの声で母は舞う
一緒ならどうあろうとも目的地
好々爺昔も今もボクはボク

枚方市　谷英也

ワクチンの指折り数え待ち焦がれ
コロナ禍の恋も芽生えぬ暗い春
孫スマホ爺はガラケイ格差あり
新年もコロナ満開霧の中
孫の守り息が切れます八十路です

枚方市　丹後屋肇

コロナ騒動株価の上がる摩訶不思議
非常事態声が掠れる第四波
聖火リレー夢食べているボランティア
爪引けば彼女の影が踊り出す
黒髪の遺影へ今朝も数珠が鳴る

枚方市　藤田武人

百点を取れば許すと母の声
ハチ公を撫でると友がよみがえる
還暦の手習い若人にまじる
号外に足止め涙する庶民
十八の夢捨てないで目指すボク

枚方市　藤村亜成

ひと皮剝けて元気になった指
気難し人やとどちらも避けている
聴衆の欠伸マスクで気付かない
心配するとその通りになってくる
便利は不都合不便は好都合

枚方市　山口弘委智

かろやかに箸の上げ下げ春料理
入学の一人を祝う過疎の村
行き先の未だ決まらぬ八十路坂
手を洗いあらい洗うてうつ手なし
花鋏ちょきんちょきんとコロナ切る

藤井寺市　鴨谷瑠美子

ひなあられポリポリ何も考えぬ
犬の目と合って暫く犬になる
春の雨ひとも野菜もやわらかし
いまさらを話したくなる星月夜
お静かにまだ冬ごもり続けます

藤井寺市　鈴木いさお

幸運をお持ち帰りに出来ますか
二択ならやっぱり名誉よりお金
夫婦喧嘩なさるやろうか両陛下
気の利いたことは言えぬが幸祈る
足の爪自分で切ることも出来ず

藤井寺市　吉田喜代子

朝早くコロナも寝てる墓まいり
畠仕事背を押している春の風
土作り腰の機嫌が悪くなる
ほっとするコーヒーの香に胸広げ
病院の梯子もほんに疲れます

箕面市　大浦初音

開かれた門は出るのがむつかしい
ひとり言ステイホームで多くなり
悔いないよう今出来ることしておこう
独り居の窓に明かりでまず安堵
主婦という自由ありそでない立場

箕面市　出口セツ子

虚弱児が古稀まで生きた神の愛
古稀過ぎて神にゆだねている命
アガペーを教えてくれた恩師居る
恩師の生き方無償の愛を見る
恩師より今年も手作りジャム届く

箕面市　中山春代

故郷の「また来んさい」が聞こえない
大あくびマスクの中があたたかい
ステイホームの制服になるチャンチャンコ
手書きのカルテ大先生は木曜日
噴水の虹くっきりと新学期

雛人形三密避けて澄まし顔
ワクチンの開始にまずは安堵する
コロナコロナ変異しないで消えなさい
あいたいな里のはずれの地蔵様
いかなごが口いっぱいに春運ぶ

箕面市　広島巴子

あの失言まさか辞任を呼ぶ怖さ
出任せに言うたひと言長い夜
新入りのトラです牙は未熟です
抵抗止めてここは流れに身を任す
謝罪会見開けば開くほど他人事

八尾市　寺川はじむ

近くの桜今年は少し遅い
冬眠から覚めた熊にもマスクさせ
啓蟄へ虫にもマスクいりますか
夫逝き最早二十年になるが
カタカナ語に躓き前に進めない

八尾市　村上ミツ子

さあ自由朝のルーティン終わったぞ
今日もまたご安全にと鏡見る
嘘言わぬこれが一番難しい
夜は明けよたとえ地球が異変でも
今日もコツコツ明日もコツコツ生きてゆく

神戸市　上田和宏

三月の声暖かい気持する
肩の力抜いた句ふにゃふにゃになっている
退職後行ったことない散髪屋
常識という化物が後ろ楯
済まんなあちゃらんぽらんで終るから

神戸市　奥澤洋次郎

キャンパスの楽しさ知らずオンライン
テレワーク運動不足知った膝
東京五輪コロナと人の知恵比べ
モナリザもマスクをかけて微笑んだ
句を捻り妻が選してポストイン

神戸市　斎藤隆浩

ネット飲み会時に顔出すポチとタマ
ワクチンが届けてくれる春を待つ
甲子園今年は見れる熱と汗
赤鬼が青鬼になる二日酔い
人生の余白にあったステイホーム

神戸市　敏森廣光

親戚も兄の伊予柑待つ二月
新品種リンゴと届く雪便り
クリスマスローズ恥じらう春の庭
コロナ禍に子を案じつつだいこ漬け
かき餅が届いて里の冬景色

神戸市　冨永恭子

神戸市　能勢利子

トランポリン洋服かけになっている
バランスボールに座って一句考える
娘が嫁ぎ眠ったままの家ピアノ
震災の街を訪ねるのがエール
ジパングの会費払って使えない

神戸市　松倉正美

ステイホーム虎の尾踏んで自爆する
老害と言われぬように口に鍵
雛飾り終えて白酒お相伴
逆縁の娘のテーブルに桃の花
ホワイトデー返礼品が高くつく

神戸市　山口光久

逃げ道があると思えば身が入らぬ
あちこちの地酒が僕を呼んでいる
身の丈を知っているから押し黙る
向きになり退く潮時を見逃した
あっさりと諦められず寝つかれず

神戸市　山口美穂

雛飾る亡母さん笑顔で見てるはず
旧暦のお雛様には桃も咲く
二十四時間わたしの時間なのですが
いかなごの不漁神戸の春さみし
まだまだと思わないけど頑張るわ

神戸市　山﨑武彦

飲み込んでひっそり溜めているマグマ
残業の電話はすでに酔っている
ひこばえにわたしの余命ふと想う
百の鍵束ねる男にある孤独
二浪の子爺は黙って絵馬吊るす

明石市　糀谷和郎

君に会うたびに沸点高くなる
痛いのはお互いさまね紙つぶて
いい訳をするたび穴が深くなる
楽な方へ流れる水がうらやまし
雪しんしん音無き音を聞き分ける

芦屋市　竹山千賀子

雨の日は気をとり直すジャズソング
スマホの世バーちゃんの知恵葬られ
ガン保険もうやめました八十歳
うっかりが続いて孫に看視され
友達の顔して猫がやって来た

尼崎市　近兼敦子

幸せのものさし同じ長さだね
結び目に少し油を差してみる
幸せのハードル下げて目が覚める
反感を買っても口は止まらない
じっと聞く少し大人になれたかな

尼崎市　永田紀恵

山ガールまずはファッション決めてから
山男ファッションになる無精髭
引き返す勇気を杖に登山道
山掛けて当たった事の無い馬券
山盛りのごはん夢みた昭和の子

尼崎市　藤井宏造

まだ少し水の冷たい春彼岸
ガラガラポンと生まれたような新コロナ
ステイホーム暇はあっても金がない
地下鉄の窓を鏡のように見る
百態の風に叩かれ生きている

尼崎市　藤岡りこ

近頃ふっと煙草のけむり懐かしい
留守中は電化ロボットフル稼動
居間の壁どんどん増える孫らの絵
失言は戻ることなく非難され
観梅には早すぎたけど密ならず

尼崎市　藤田雪菜

日本の春は梅・桃・桜みんな好し
独り居は気楽であるが空っ風
毎朝の天気予報で靴決める
バースデー孫のお花は誇らしく
認知予防指が覚えるキーボード

加西市　山端なつみ

小額の寄付しか出来ぬ情けなさ
混乱は現場を知らぬ者の指示
大震災鎮魂の祈り日本中
ハード復興被災者のケア後回し
東日本行きを妨害コロナ禍め

川西市　山口不動

震度6初恋の人そこに住む
己が唾誤嚥している情け無さ
白も黒も憚りもなし猫の恋
笹鳴きの影は見えずに笹ゆれる
コロナ禍は飲食店をいじめ過ぎ

三田市　足立つな子

ついにきた自信のゆらぐ物忘れ
保険証は肌身離さず持ち歩く
妻は五時起きおお手を振ってすぐ寝つく
話し込むおひさしぶりの友の声
新コロナもうこの辺でお静かに

三田市　上田ひとみ

私の中にたっぷりある子供
少しだけ優しいひとになれたかな
いい絵ですベンチに座る老夫婦
あなたの一生けん命分かるけど
ふうっと息吐いてさあ落ち着いて

三田市　大西重男

父賢人私凡人居場所ない
長老を大事にせよと自分指す
もう一杯飲んでほろ酔いこれ丁度
恋心だけは消えないパラダイス
コロナ禍に洗脳されて引き籠る

三田市　尾﨑一子

床の間に飾るわたしのお雛様
おもい出を巡るわたしの童歌
雛飾り畳八畳娘の宴
村の娘をもてなす祖母の祭り寿司
やさしいなれ何でもほめた祖母と寝る

三田市　九村義徳

現役を去って重たい兜脱ぐ
しがらみと言う名の重い鎧脱ぐ
プライドと見栄が中々脱げません
仮面脱ぎ人間らしく生きていく
孫脱皮広い空へと飛び立った

三田市　多田雅尚

アイディアで削減出来るプラのゴミ
あの日から10年経てど帰還ゼロ
脱原発に舵を取れないもどかしさ
宣言解除吉か凶かは一年後
マスクした五輪開催見たくない

三田市　谷口修平

脱輪で今さら気付く人の情
サラサラの粥で命を確かめる
満足に喋れぬ子らの英会話
善人の仮面気を抜く場所が無い
新調の首輪ちっとも喜ばぬ

三田市　野口真桜子

断捨離の処理金残しよしとする
五千歩とリハビリ室で声をあげ
お馴染みの店のママは素顔にもどり
巣ごもりで夫は料理の腕をあげ
嫉妬でも妻の座守る吠えながら

三田市　福田好文

蟹出して妻のお客を黙らせる
ランドセルお守り下げて鍵下げて
巣籠もり中諍い絶えぬ老い二人
言い勝って寂しい刻を持て余す
ホスピス棟嘘と笑顔を置いてくる

三田市　堀正和

コロナなど知らぬ振りして四季巡る
三脚を並べてツルの帰省待つ
寝てる間もラジオを鳴らす淋しがり
愚痴吐かぬようにと三度深呼吸
自転車で行ける範囲で生きている

三田市　松本ゆかり

花咲くのに雨は幾度か要るのです
元気すぎ老人会には疎まれる
菜の花の煮付けの苦味春やどる
いかなごも炊かぬ不精な母ごめん
享保びな細いつり目でお見通し

三田市　村田博

和服とマスク意外と粋な取り合わせ
久し振りイカナゴ炊いて美味い酒
ディスタンス取れば縁まで遠ざける
退屈で二重マスクでプチ旅行
お花見もオリンピックも無観客

高砂市　松尾柳右子

食欲も進むデイケア雛まつり
コロナ数減っても自粛守る日々
使い捨てマスクが性に合っている
八十路なりワクチン接種あるがまま
コロナ消えオリンピックを待ちわびる

宝塚市　丸山孔一

首相かてなんぼのもんじゃという世相
河太郎(がたろ)かて溺れることもあるんやて
帽子取れマスクはずせと温度計
湯の有馬往く人も無く空っ風
泉源の湯気も虚しく空に消え

丹波篠山市　北澤稠民

コロナ禍を我が家忘れず燕来る
幸せを掴み取ろうと今も生き
春近し心に花を植えかえる
ふいに来る順番にない恐れあり
幸せは自分で作ると決めました

丹波篠山市　酒井健二

大吟醸コップで呑めばコップ酒
移ろいを追うのが趣味で気が軽い
気まぐれに神もたまには現れる
再生はやる気が有れば金いらぬ
かたくなによろけながらも意志通す

丹波篠山市　長谷川善輔

目覚めれば昨日と同じでほっとする年齢(とし)
去年よりもっと寂しい春が来た
図書館で一六五〇冊は僕の勲章
借りた本机に積んで腕まくり
もう言うまい思えど腹立つコロナ奴よ

西宮市　亀岡哲子

コロナ越え高く羽ばたく末の孫
巣立つ日のスーツを父とデパートへ
東京バナナ下げてちょこっと顔出しに
晩年運当たっていたのかも知れぬ
若いねと言われほんとにありがとう

西宮市　福島弘子

蕾のまま逝った数多の震災忌
ゴミ出しの手際手慣れた老父の朝
海に出て戸惑うばかり花筏
「春の海」到達出来ぬままの琴
お花見は出来ぬせめての桜餅

西宮市　福田正彦

残照が沈む心に喝入れる
人生を瞬間勝負で渡り切る
巣ごもりも川柳道で花咲かす
宥めても怒りは隅で出番待つ
清め水注ぎ叶わぬ初詣

南あわじ市　萩原狸月

永らえて言葉の裏を探るくせ
常識は一つでないと知る格差
絢爛を見る人もなく散るさくら
讃美するほどで無かった僕の親
たられば を悔いて詮無い老いの愚痴

奈良市　宇賀史郎

旧友と鰭酒の酔いふぐの味
饒舌と寡黙が向かいあう自粛
咳二つ周囲の人は皆離れ
自分史の遺物を整理前を向く
話とは違うイメージ好い予感

奈良市　大久保眞澄

7万のディナーワンコインのランチ
ゴミ出し日町内巡視するカラス
思い出せたよ単なる物忘れだよね
落とし物ですよとポイ捨てのタバコ
大笑いしたらマスクはスキだらけ

奈良市　加藤江里子

自粛解除ホールに響く弦の音
マエストロの後ろ姿がじんとくる
亡き母の立ち雛飾る独りの夜
ワクチンは神ではないと認知する
お水取り途切れることのなき祈り

奈良市　高橋敬子

テレワーク子の空いていた部屋が生き
テレワーク会議に上着おしゃれする
大きくよいしょし合い励ます同期会
小さい嘘言うも大法螺まだ吹けぬ
大物はメール参加のクラス会

奈良市　山本昌代

食べて寝てテレビに散歩日々暮れる
笑ったわスッキリしたわ長電話
散歩道空家の隣また空家
銀行が撤退町が淋しそう
幸せが走る親子の笑い声

奈良市　米田恭昌

三浪の子の明るさに救われる
ライバル同士どこかウマ合う俺お前
不気味さはマスクの中のうす笑い
単身赴任休みひと日をもてあます
会えも出来ぬ柳友の復帰を祈る日日

生駒市　飛永ふりこ

花柄の切手に君のまろやかさ
あちこちの新芽にもらうリズミカル
ジャンケンが出来る会話に春匂う
春一番冴えぬ私が縮こまる
うだうだが消化しきれぬあかんたれ

香芝市　大内朝子

何事もなかったように咲く桜
夢に見たワクチン出来たけど微妙
世の移り火星の風を聞く時代
頼られる母でいたいと言う気概
コロナ禍の収束を待つ青い鳥

香芝市　山下純子

本箱で化石となった広辞苑
ケンカするエネルギーあり仲が良い
少しだけ秘密ありそうあの背中
ビルマの竪琴流れた街で抗議デモ
ペアーマフラー巻いて青春してた頃

桜井市　安土理恵

一日一個ワレモノがでるおてつだい
夫のおつかいまた入ってる芋ケンピ
優しさもありがたいけどいらつくの
呼ぶ声にとんで行ったら「風呂入ろ」
ああ神よ　これは天罰なのですか

奈良県　安福和夫

在宅で今日も終活孫むすめ
一張羅で画面直視の面接日
説明会面接ですらオンライン
パソコンと人間だけで世が動く
温故知新忘れてならぬ新時代

奈良県　谷川憲

早や十年苦労尽きない被災の地
ひとり暮らし出来るようにと妻の檄
白内障ぱっと明るくした手術
アクリル越しマスクの会話もどかしい
怖いなあワクチン未だ変異株

奈良県　中原比呂志

飲み込んでカード返さぬＡＴＭ
便利さが思考回路に傷をつけ
慾望を満たすカードは家に置き
公園のさぼり寝起こす電子音
位牌まで番号ですかご住職

奈良県　中堀　優

生きてたら色々あるさ耐えるんだ
閉じた心開けてくれたのは貴女
やっぱりな大海原の母である
怒った分二倍は褒めて人育て
君の声ぼくの声とがコラボする

奈良県　長谷川　崇明

6B一本いまは詩人になれる春
山の辺の道地図などいらぬ好奇心
山盛りの旬をいただく道の駅
運命線どうあれ今を走り切る
人脈をつくり宝にして老後

奈良県　渡辺　富子

藤色のかすみにぬれて歩く古都
少しずつ身辺整理してこもる
ウォーキングこころ晴朗羽がはえ
君の名を呼んでもこだま返らない
待合室みんな黙って見るスマホ

和歌山市　上田　紀子

頷けば見るみる仕事増えてくる
ルンバでもジルバでもない演歌好き
種蒔いてカラスに脅しかけておく
奥方の男らしさが頼りです
破調のまま人生歩むロスタイム

和歌山市　土屋　起世子

明日もまた感染ゼロに祈ります
病んでから少しやさしい色になる
だんだんと歩幅縮んで老いを知る
出来ぬ事止めて気楽に日向ぼこ
欠点もほどよくカバーお人柄

和歌山市　松原　寿子

のんびりと春を掬ってみませんか
脳回路まずは磨いて春を呼ぶ
精霊のごとひとしきり風花よ
少しずつ彩ぬり替えて生きる地図
ここに来て趣味を支えに生きている

岩出市　藤原　ほのか

開かれたドアの向こうに希望の日
健康の為に階段上り下り
病むことで知った健康ありがたさ
健康の為だとサプリありすぎる
いろいろな色で私を描いてる

紀の川市　山東　日出男

梅干しがコロナに効くといいのにな
倒産が増えて株価がなぜ上がる
嵩高なハンバーガーは食べづらい
鬼コーチ辞して選手がよく育つ
絵に描いたような虚言を押し通す

海南市　小谷小雪

冗談をジョークでかわす春の宵
ウイルスは五輪マークに配慮なし
屋根直せ床を直せと子の電話
マッサージからなめらかな皮膚呼吸
ほこほこへ優しい言葉選っている

岩国市　上村夢香

十年前の一本松に託す春
東日本の真の再生ただ祈る
こぼれそう絵手紙に咲く福寿草
ラジオ聴き読書三昧まだ続く
沈黙が真実語ることもある

宇部市　平田実男

ひい孫の育ち嬉しいひな祭り
客扱いされた実家が遠くなる
ハグするとセクハラになる世を嘆く
賞味期限へプラスアルファーしてる僕
介護2の妻へようやく恩返し

防府市　坂本加代

GoToと行く気になれぬこの時世
家族葬増えてご縁が切れてゆく
苦労の日九月六日に母は逝き
底見える楽しみがある未処理箱
ワクチンも自給自足になるように

鳥取市　池澤大鯰

ダイヤ組むローカル線は間のびして
ゲームは嫌い負けるのが嫌だから
はじめればのめりこみそう外に居る
将棋も囲碁もルールだけは知っている
ロシアンルーレット命をもてあそぶ

鳥取市　奥田由美

減量を医者と約束誕生日
内定の辞退で挑むプロの道
コロナほど恐いワクチン副作用
特殊詐欺の話が来ない低預金
近所中が赤字収支の米農家

鳥取市　加藤茶人

その日から潮目が変わる運不運
紙一重嘘と誠の口達者
腹が立つ六つ数えてここ我慢
手助けと思えば少し無理も出来
好きと言うオーラは倍にして喋り

鳥取市　岸本孝子

乱雑な部屋も気にせぬおばあさん
腹時計ゆっくり回る老いふたり
格付けをされると私規格外
ハミガキにとても便利な砂時計
手帳ほどの役目をさせているスマホ

鳥取市　倉益一瑤

不覚でしたチョコの甘さを信じ過ぎ
咳きこんで返事をさけているらしい
いつからか私の椅子を見失う
春雷に優柔不断叱られる
ひと呼吸おけばやさしい風になる

鳥取市　田賀八千代

桃の花絵手紙にして春届く
鍵持たす代わり玄関犬二匹
平穏な波だ血圧正常値
ホッとして眠くなったか孫帰る
自転車も免許持てよとポチ吠える

鳥取市　棚田大

雪道も思い出残し消えて行く
嫌なこと倍返しされくらくらに
マスクして語る相手は誰だっけ
もの忘れ増えるもマスク忘れぬぞ
毎日を知るにこだわり疲れはて

鳥取市　谷口回春子

悪口は次から次と無尽蔵
聴く耳を持って初めて人になる
もったいないがもったいないを呼ぶ倉庫
晴れた日は布団を干して川の字だ
ビニ傘が並ぶ玄関老いの家

鳥取市　永原昌鼓

いつかいい事が起こるとストレッチ
恥かいて知るは自分の腑甲斐なさ
手づくりのマスクが並ぶ交差点
倍にして恩返したい人がいる
ドア叩く音で誰だか分かる客

鳥取市　中村金祥

接待を受けて自分を見失い
数知れぬ恩神棚に供えてる
いっときの極楽気分ホールインワン
感触は良いが回答今ひとつ
賢いとずるいことまで考える

鳥取市　夏目一粋

きっかけが欲しくてお世辞言ってみる
情熱がひらひらと舞い鳥となる
武器なんか捨てて楽器に変えなさい
夫婦とは寂しき縁かもしれぬ
強がりを言ってもお金欲しくなる

鳥取市　副井ゆたか

締切りへ佳句が浮かんだバスルーム
老いた脳二つ同時は受け付けぬ
明日のため多少の秘密持っておく
喋り好きマスクが抑えやや静か
初夏の宵ワイングラスで飲む冷酒

鳥取市　福西茶子

相合傘好きな人とはやってない
湯上がりの母皇后よりも幸せと
ウグイスの音痴さざんかがポトリ
生命線伸びて縮んでまた伸びた
慌てるな何とかなるは母譲り

鳥取市　前田楓花

一杯の酒で程よく寝てしまう
ちゃんと見ているよあなたのいいところ
やさしくなろう春のはじめの日本海
奥様は大丸旦那はユニクロ
かわいくて猫派犬派で割れている

鳥取市　山下凱柳

自粛続き出るはため息ばかりです
前のめりなるもワクチン入荷せぬ
免許更新何とか乗れる後三年
積ん読の書籍ばかりがやたら増え
下駄箱に昭和のレトロ垣間見る

鳥取市　吉田弘子

電話口元気そうだと声美人
GoToのカニの約束宙に浮く
笑わない一日だった今日は雨
脳トレは計算よりも漢字好き
うしろ姿見たらがっかりするだろう

倉吉市　猪川由美子

日を追ってボロが出る出る菅総理
自粛にも飽きた疲れた人出増え
ワクチンは希望の光番を待つ
アスリート五輪開催落ち着けぬ
眞子さまの恋波乱含みで実るかな

倉吉市　岡崎美知江

リハビリの指やっと広げてジャンケンポン
災難を忘れず誓う十の指
ときめきを下さいじっと待ってます
流行に染まらぬ白がよく似合う
卵割る音から朝が動き出す

倉吉市　田中紀美恵

察するに貴方毎日同じ服
味くどいいずれ糖尿うすくして
懐があったかくなれば子寄ってくる
八十路では背よ伸びよと望んでも
指折りて川柳句詠み脳に活

倉吉市　牧野芳光

宇宙葬宇宙のゴミになっただけ
幻の橋で待ってる赤い靴
黒い手と黒い手すぐに握手する
老人と自覚せぬ間に老人に
遠吠えをしても届かぬ位置にいる

米子市　池田美穂

四月バカコロナ終息宣言す
斎場に紅白の梅咲きほこる
トリセツを書くのはきっと宇宙人
懸命に五輪に空気入れている
ワクチンを打ったらすぐに旅に出る

米子市　伊塚美枝子

春一番我が心にも吹き荒れる
出たがりの私の心風に乗る
サギ一羽群れる鴨見て何思う
お人好しと解っているが断れぬ
七十路に孫のお下がりマイデスク

米子市　後藤宏之

手作りのマフラーこの冬のエース
鉄が空を飛ぶ人間ってすごい
説教はちょっと休んで般若湯
孫帰るやれやれ障子張り替える
柔らかい顔だいいことあったかな

米子市　後藤美恵子

エール送るコロナに勝てよ受験生
老い集う空き家利用の笑い声
子の帰省叶わず野菜薹が立つ
棚ぼたの遺産は無いと書き残す
廃業の貼り紙哀れバーのドア

米子市　竹村紀の治

嬉しい日神経痛も気を利かす
冬物を仕舞うと冬が舞いもどる
ワクチンの代わり焼酎飲んでます
焼酎の副反応は馴れている
病院の日はシャンプーとヒゲを剃る

米子市　中原章子

長生きをするほど地震覚悟する
震災の十年語る人辛い
自我すべて削ることなく生きている
長生きにいよいよ資金不足する
幾山河越えて令和にコロナ来る

米子市　野川宣子

元彼もいい爺ちゃんになったろう
食べながらマスク付けたり忙しない
棒グラフ知事のシナリオ裏切った
ワクチンの争奪戦に負けたらしい
老人は丸の中からはみ出さぬ

鳥取県　門村幸子

無病息災全うしたいカレンダー
コロナウイルス命があれば挽回す
情に触れ心しみじみ晴れマーク
歯に配慮しつつキャラメルそっと噛む
気を替える時々外の草を抜く

鳥取県　斉尾くにこ

最初はグージャんけんぽんは何処いった
お化粧もギャグもあららら乗りの良さ
おはようと水切り籠の食器たち
勇気出る言葉もらった帰り道
句も詠まず本も読まずに今日終える

鳥取県　竹信照彦

歯磨きをしてから顔を洗う癖
歯並びの悪さ下の歯なので謎
グリンピース風に吹かれて手を探す
詩吟唸るこれもあったと喉が鳴る
投薬が二種類増えて春日和

鳥取県　細田裕花

お祝いの波がどどんと春財布
引き出しに内緒話が二つ三つ
秘密など持つから舌がもつれるの
見たはずの夢をどこかに置き忘れ
世の中の為にワクチン打つつもり

鳥取県　山下節子

本心を知って素直になれました
日本のマスク世界中からほめられた
何故だろう鬼のパンツはとら模様
スキャンダルの取材するどい目が光る
あの時の咳が気になるクラスター

松江市　石橋芳山

逃げ道を塞がれ穴を掘っている
楽しみはこれから今はその準備
グチ小言並べて波浪注意報
泡立ちが悪い鈍感なのか俺
散らばった俺を集めて僕にする

松江市　藤井寿代

福島のシミ ニッポンの黒いシミ
十字架を背負って笑顔ふりまいて
ありがとう言えず逝ってしまった母
法要の朝だと知って紋白蝶
尻尾だけしまい忘れて紅をひく

松江市　松本知恵子

やわらかい春の陽じゃが芋を植える
春の野にふきのとう摘むみどり色
集団免疫ワクチン打つか思案時
年明けて空白のまま春になる
面会の小さくなった母が笑む

出雲市　伊藤玲峰

二つ三つネジが緩んで名を忘れ
コロナ禍も力合わせて店守る
いい趣味を教授いただき師は旅に
元気が一番食べて唄って本買いに
「転ぶなよ」亡夫に護られまだこの世

雲南市　菅田　かつ子

コロナコロナだーれもしゃべりに来てくれず
下駄箱の隅でひっそりローヒール
自由とはこんなものかナただ一人
あれやこれ写真広げて小半日
じいちゃんへ近況話しに墓に来る

島根県　伊藤　寿美

着崩しお洒落亡夫のスーツで決める孫娘
ラストシーン駆け抜けて行く麒麟の背
人生は長い　もうとまだとが鬩ぎ合う
ウイルスも人も変異をして生きる
昭和の頑張り老害などと言う勿れ

岡山市　大石　洋子

自粛中すこし離して内裏雛
内裏雛肩にしょってる深い闇
御雛様敬語を使う祖母がいた
その黒髪ドネーションには上物よ
雛あられとりあう子らの声あらず

岡山市　工藤　千代子

路地裏の小窓聞こえてくる笑い
アルコール抜けると婆ちゃんに戻る
子育ては終わり夫を飼育中
置き去りの帽子夕陽に向いている
帰りたい会いたい里の姉と山

岡山市　丹下　凱夫

裏口に回ると沈丁花がにおう
春の野やボクとカラスとトンビとが
月一度かかりつけ医にベロを出す
早起きをするため早寝しています
菜の花の星にしたいなこの地球

岡山市　前田　恵美子

コツコツと続ける事は天下一
才能はないがあるのは度胸だけ
マスクまでファッションになり町をゆく
コロナワクチンするもしないも悩みどこ
今日もまたやきもきさせる孫門出

笠岡市　藤井　智史

貯金箱チャリン妻の句の掲載
玉葱の匂いのする新妻の手
灯台のように心を照らす妻
我が家にも太陽さんがやって来た
絆創膏だらけの新妻の指

岡山県　大杉　敏夫

二杯目は注いではくれぬコップ酒
地下鉄の階段で寝る術を知る
地下足袋が片方買える事を知る
望郷の想い通天閣知るや
仕舞風呂してる間の盗み酒

岡山県　高岡茂子

旅プランベッドで練って待機する
ランチが旨いアクリル越しに友が見え
目覚しを止めたおぼえの無い寝坊
ノンアルでひとり満足の晩餐
「生きているよ」友に蕗味噌ゆうパック

岡山県　田中恵

ダムの底咲いた夢見る紅椿
かくれんぼ一人で出来ぬ影法師
不器用で顔に台詞が描いてある
呼び声で今日の体調キャッチする
幸せは近くにあった食べて寝る

岡山県　藤澤照代

ライバルの角度変えれば良さが見え
表札の裏に夫婦の修羅隠れ
家建ててあげると孫の貯金箱
いつからか一色となる老い二人
前向きに暮らせば今日も忙しい

広島市　岸本清

好きなことしてると疲れ感じない
自粛せぬ春の草花生き生きと
ムキになる総理の心透けて見え
おっとりとしている君がなぜか好き
無職でも日々雑用で忙しい

竹原市　岩本笑子

鐘が鳴るきっと明日は晴れだろう
夫と二人お墓まいりの鐘の下
春を迎えに新しい靴を買う
一人ぼっちになったらメールするよ
リハビリをしっかりします午後三時

三原市　鴨田昭紀

ふらり来てふらり帰っていく絆
爽やかに日々スマイルを持ち歩く
秘め事を記した落丁の日記
百年の人生サドンデスゲーム
顔を出すだけで影響力がある

三原市　笹重耕三

病院の待合室で読む社説
理屈ひとつ足して帳尻を合わす
男ならなんとかしろと瓶の蓋
物忘れの予防へ脳のスクワット
鈍感に生きよう七十路の途中

東かがわ市　川﨑ひかり

始球式紆余曲折の舞台裏
毎朝が今日を旅する始発駅
朝一に生きる始動の水を飲む
野良猫の今日を生きてく目に出会う
生きる意味我に投げかけ友が逝く

松山市　栗田忠士

一期一会昨日の僕はもういない
日当たりのここが私の指定席
コロナ禍の消えた話をしませんか
色も匂いも風も紛れのない春だ
二人だけマスクフリーの野良仕事

松山市　古手川光

コロナ感染ヒト科を動物が噛う
日本の人口越えるコロナの感染者
行きません値引き始まる時間帯
巣籠りで書く事も無い予定表
童謡を唄って子供返りする

松山市　宮尾みのり

この服はあの大会へ着て行った
よく咲いた咲いたと花をほめてやる
料理下手と言わさぬプロのタレの素
やはり歳きりきり舞になるスマホ
令和平成私の昭和飛んでった

松山市　柳田かおる

ウオーキング今日は逆から行ってみる
高台にケアーハウスが見えている
ノーという勇気は君を君らしく
一呼吸おいても答え出てこない
古傷がわすれないでと疼きだす

西予市　黒田茂代

木枯しが攫って行った好奇心
窓へ来てた蜥蜴冬眠してるのか
早春の挨拶に来た沈丁花
春一番が早速連れてきた花粉
あっという間の二月アクセル踏み過ぎた

土佐清水市　辻内次根

南国の日差し照葉樹が光る
せせらぎを光らせている春の使者
もう過去は帰らぬ渚に手を浸す
眠れない夜に聴いてる脈の音
選択肢楽しいことが多すぎる

熊本市　杉野羅天

寒満月阿蘇高原にわれもあり
藪椿ポツンと咲いて気品あり
アナログで憩う終身の特権
お忍びの宿に変わって猟地消ゆ
コロナ禍を憂う飲み薬は非ず

北九州市　小松紀子

リメイクの母の遺品が宝もの
食べるよりながめていたい庭ミカン
塔誌から生き方学ぶこともある
仔犬に感謝歩くこと楽しくて
少〜しだけ生長したと思う八十

唐津市　坂本蜂朗

よくぞまあ生きているぞと思う日々
ぼつぼつでいいのに月日駆けてくる
体操をすればぎくしゃく笑う骨
すぐそこの春を指差し励まされ
香典を出しそうな友減ってくる

唐津市　山口高明

我が家にも神と仏が合祀され
逆様に切手貼っても着く封書
悪運の強さ訴訟もされず済み
街の灯に溶けて歩いた失意の日
一万札に成れる遺徳はつんでない

令和３年度帆傘川柳大会誌上大会

宿　題　「写　す」　辻内　次根　共選
中岡志津子　共選
「笑　う」　野口きよみ　選
「ゆっくり」　薬師神ひろみ　選
「過ぎる」　清水かおり　選
「踏ん張る」　窪田　和弘　選
「そっと」　谷本　清雲　選
「生きる」　小笠原　望　選

贈　賞　各題　秀吟３句に呈賞
投句料　１０００円（発表誌呈）
投句締切　**５月３１日（月）消印有効**
投句受付　用紙自由・事務所で清記します。
投句料を添えて下記あてお送りください。
〒787－0665
四万十市森沢　２７０３
遠近　哲代宛
主　催　**帆傘川柳社**

雲海抄

（つづき）

出雲市　黒目ひでお

ステイホームコロナ後思いファイト湧く
いく度の試練乗り越え分岐点
民主化の不服従デモ続いてる
ジェンダーを無視時代は進み辞任劇

広島市　松尾信彦

クスリ指あなたを待って星になる
夕食にたかいサンマと念押され
良い知らせ遠回りする万歩計
根回しが効いて輪の外四面楚歌

竹原市　土井輝恵

パワハラになるから口をつむいどく
告白状小説書けと友は言う
躓いて嗚呼我が歳を自覚する
按配が良くなったのか句が浮かぶ

三次市　伊藤寿子

若いってまあ川柳があるからね
恐れずに貴女も川柳してみたら
客の声ドリンクよりも良いみたい
投句する気力を友は誉めてくれ

川柳塔の川柳讃歌 ⑲⑤

上方芸能評論家　木津川　計

コーヒーはブラック酎はストレート

早川　遡行

そうか、遡行さんはこういう方だったのか。だからカレーは超辛、刺身はわさびをいっぱい利かせ、かば焼きはたれをたっぷり…、要するに中途半端であいまいな味は口に合わないのだ。だから煮えたやら沸いたやらなにやら分らん人間が苦手で断固として秋霜烈日、一歩も引かない不退転の気性。遡行さんに関わる人に申し上げたい。曖昧な態度で接したら相手にしてもらえませんよ。遡行さん、今日日珍しい直情径行なお人柄をお大切に。

病む人を励ます言葉むつかしい

片岡　智恵子

むつかしいことはありません。どなたの句だったか、病人の励まし方に感心した。「見舞い客治った話ばかりする」。智恵子さん、この手です。治った話ばかりをするのです。それに医学は日進月歩です。今やガンで亡くなる人はいませんよ、とこんな言葉で励ますのです。実際あと十年もすれば病死する人は激減し老衰死が増えるばかりの世の中になります。すると辺りは私も含めよぼよぼだらけ。智恵子さん、どう励ますか私たちの難題です。

風呂さえも体力がいる老いの坂

岸本　清

異議なし、その通り、の気持ちでこの句に頷く。それというのも、ごく最近、わが家の風呂場に何本もの取っ手をつけてもらった。それらを握って風呂に入るのはまだしも、湯舟を出るとき体力が要るのだ。両腕で取っ手を掴み、うーんっと声を出して上がる、そのとき体力を使う。清さんの詠む通りで「風呂さえも体力がいる老いの坂」のただ中を私ものぼっている。清さん、失礼ながら同病相憐む境涯です。がんばるしかありません。

転けなやと言った家内が杖を曳く

佐々木　満作

そう言った私の家内が先月、階段から転落し、鎖骨を折って入院、手術して戻った。リクライニングベッドをリースで借り、寝込んだが「痛い、痛い」と悲鳴をあげる。夜中に私を起してもどうしようもない。「だから落ちんように手すりを階段につけてあるではないか」と私はぼやく。年寄りの転倒や誤嚥性肺炎の知らせがこのところ多い。もうすぐ団塊の世代が後期高齢者になる。老人の悲報が塊になる時代、満作さんも転けませんように。

十五歳もう髪の毛も撫でられぬ

山田　耕治

私が大学の教員だった頃、男のゼミ生は肩を叩いて励ました。女子学生は誤解されると困るから手の甲で叩いていた。ある日、女子学生から「掌で叩いてください」と異議申し立てされ、ええんかいなの思いで、ときに掌で励ました。私には四人の孫娘がいるが、小学生までは抱きしめて別れた。中学生になって「髪の毛も撫でられぬ」ようになった。女の子の扱いはむつかしい。だから耕治さんのとまどいがわかる。温かく見守るのがいい。

感謝するこころに宿る福の神

岸本　宏章

節分の日、妻と二人して「鬼は外、福は内」と唱えながら豆をまいた。階段から転落した妻だが、首の骨を折っていたら寝たっきり、私のこれからは難儀をかかえることになった。そうならなかったのは福の神を呼びこんだお蔭だったと思おう。「おちょやん」のモデル浪花千栄子は竹生島の弁財天に信心を捧げた。このひとの役者人生は弁天さんのお蔭だった。宏章さん、あなたの所へも福の神が来ますよ。

西尾栞句集『水鶏笛（くいなぶえ）』

首巻をとる真似だけの家主なり
吸物の冷えたを板場くやしがり
船頭の小便に渡舟待たされる
そんな絵かきとは宿屋露知らず
干竿の落っこちた鶏のあわてよう
家族主義という怖い二階借る
本心を世間話のように云い
ターミナル再会という名の喫茶店
灯取虫客も扇子でうちそこね
展望台陛下も同じ方を指し給い
うりざね顔質素な家に生れて来
横町のその横町の握りずし
骸骨の講義骸骨横をむき
帰郷してやたら名刺をくれたがり
カメラもう人間撮すことに飽き
雀の涙ほどとは貰う方
室二間ぶちぬく今日の金屏風
差し押さえの金庫の上の鏡餅
一人漕ぐボートはやけに速いなり
飽き性を叱るに写真機にもふれ
役者の子芸者の中でませている
雨傘の雫をきれば時代めき
測候所今日は尻がくるなと思い
大体どこで落したとは無理な訊ねよう
悪趣味と言われながらのコレクション
君づけで社長を訪えば秘書あわて
郊外のここ目印となるポスト
押しと金さと先輩こともなげ
木薬屋きざみながらの水加減
お通夜にごめんごめんと箪笥あけ
バックさす笛を環視の中でふき
地獄の方がバラエティにとむという話

自選集

母の忌はいつもやさしい雨になる
墓参からはじまる一日抱いている
ダイヤモンド婚いい目標が出来ました
そうか僕は老人だったのかコロナ
幸せですと言った泣いてるようだった

小島蘭幸

首筋の寒さ上意討ちではないのだが
この世とも終りのように施設入り
フクシマに比べりゃ施設入りなんて
高齢者上には上の高齢者
いろんなところに入ったがおしまいは施設

都倉求芽

ダーウィンは知らない少子高齢化
足元がぐらぐら少子高齢化
宗教はいろいろ少子高齢化
ぜいたくを探して少子高齢化
ロボットで戦争少子高齢化

仁部四郎

春風に元気を貰う津軽凧
杉花粉ぼくの目鼻を攻めにくる
目が覚めて今日の命を慈しむ
しっかりと生きると決めている余白
傘寿には傘寿の景色見えてくる

福士慕情

夕焼けが見守っている我が旅路
薬飲むことが仕事の冬ごもり
自分流に生きてる草花見習って
弾いてみたい一寸思った駅ピアノ
波の様に寄せては返す我が命

松本文子

コロナ奴と怒る通天閣真っ赤
籠城に兵糧だけはたっぷりと
毎日が新聞テレビ缶ビール
うやむやに一日終るコロナの日
コロナ奴がわが遊行期の邪魔をする

三浦強一

息継ぎが下手で出世に遠く居る
冷蔵庫に詰める野性の習性か
老人になればあなたもわかります
ローン完済不意に力が抜けました
私も車検に合わせドック入り

三宅保州

充実感ないまま日々が過ぎて行く
コロナ禍に大事な余生無駄にされ
緊急事態済めばやろうと食事会
ワクチンまで他国頼りの我が日本
結局はコロナ次第の五輪だな

村上玄也

悪あがきしたくないので「歎異抄」
然然も云云も遺える余生
知恵の輪を敗北感で見る答
裏切った甍を探すのは至難
答弁はこれかスクランブルエッグ

森山盛桜

月光

真四角な窓に夜空がしのび寄る
金星はトップの位置を譲らない
控えめにうす闇連れて二番星
月の出よ星したがえて出る月夜
月光を枕に眠る夜明けまで

八木千代

生と死の一本道に桜咲く
昭和平成生きて令和の桜見る
感染者数減る兆しあり空の青
ペンならば伝えられそう我がこころ
とり戻せない時間を生きる尉と姥

山本希久子

鈍臭い男に猫もよりつかず
男みな水に流して生きのびよう
父の日に父と歩いていた中仙道
五月晴れ女と歩いていた峠道
非常食持って黄泉へと行きなはれ

板尾岳人

踊ろうよあなたをもっと知りたいの
淡雪の言葉冷たさだけ残し
立ち位置は田舎芝居の準主役
流行に乗らない筆圧の強さ
妥協点ここぞとばかり紙吹雪

居谷真理子

北風の向こうで跳ねている音符
肩の凝り疚しい事は無いのだが
毛繕いだけはしておく誕生日
大海も砂漠も母の懐に
旅立ちへ母の最後の一呼吸

川上大輪

図書館で豆秋さんと逢うて来た
図書館とパソコンあって買わぬ本
四季報に咲き誇ってる売った株
震災忌非常袋を詰め替える
雨垂れの方が正確不整脈

北野哲男

コロナ禍の春　空色のマスクして
雑記帖の余白に春の四分音符
再起動しましょ桜も満開だ
生きてさえいれば　今年の花吹雪
こんなとき飲めたらいいな花の下

木本朱夏

新聞に毒づいている自粛鬱
股関節の痛みが歩数計に出る
蛸飯の壺に小銭を貯めている
シメサバと相性が良い芋焼酎
ディスタンス頷き合って酌み交わす

新家完司

どの道を通ってもある落とし穴
ステテコはわたしの守り神である
負け組の目線の先の地蔵さま
信号は無視　人生はいちどきり
どちらかのお通夜で会おうこの次は

高瀬霜石

無機質な音に急かされ生きている
復興という名で街の匂い消え
生命線長くなるたび細くなる
正義とは何か漫画で問う治虫
ＳＤＧｓ地球の祈りかも知れぬ

竹治ちかし

滑歩するおしゃれマスクのアラカルト
もやもやが晴れず梅林への散歩
テレビからスノームーンの夢心地
雑用は山程あって重い腰
友からの切干し大根三杯酢

津守柳伸

惜しまない孤独を埋める電話代
アマビエに神通力はなさそうだ
通り抜け大阪場所のない春よ
誤嚥せぬよう転ばぬよう八十路
煩悩が支えてくれる空元気

西出楓楽

麻生路郎語録

私は日日が勉強であり、一生が勉強であると思っている。そこで想像力や推理力をフルに働かすことに努力して創作の世界への飛躍を今なお夢みている。思想が凍結したり、詩句の迫真力が希薄になったりしては、おしまいである。詩人の化石は売物にならない。

（「川柳雑誌」ＮＯ・376より）

句集の森

『でごいち』

宮口笛生

機関士の顔がするどい発車ベル
転車台機関車廻れ右をする
シグナルの青さ深夜の通過駅
機関車に俺の指紋が残る車庫
盆栽の松のびたかろ伸びたかろ
墓場とは知らずコスモス美しい
粟おこしやあ大阪のおじさんだ
鯉のぼり今日直角の風があり
六十のおしゃれズボンを寝押しする
のむ事の多き男の十二月
なんやかや言うて贅沢しています
遠くまで来たなと思う国なまり
冬苺長靴似合う妻である
情熱で解ける方程式もある
きっと良い答えが還るブーメラン

（一九九六年八月　発行）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

定年になっても埋まるカレンダー
万国旗　嫌いな国と好きな国
胸張ろうわれら年金生活者
網膜に残る私のマリア像
てれくさい今さら妻に努力賞
先頭が狙われている落とし穴
エリートが逆さに落ちる乱気流
また一人　大正琴の弦が切れ
起承転転という人生もあって良し
鯉口を切ったが僕に妥協癖
雑草という名の草はないんだよ
憲法にひときわ光る愛の文字
信じよう出発する子の肩の幅
八月になると一億平和主義
労働歌　軍歌と同じ曲だった
新兵器ある日使ってみたくなる
真へ行きある日使ってみたくなる

西出楓楽選

引き出しは多いがあけたことはない
豆苗の伸びる早さやいさぎよし
ゆり根むく下ごしらえの面白き
じっと手を見ることさえも忘れていた
菜の花れんげ咲いて気がつくこの一年
一円を惜しみスーパーはしごする

大阪市　近藤風羅

ひんやりの電子本より紙の本
認知でも母は母なり世に一人
生き方の違うがままに共白髪
山椒の新芽ほのかに木の芽和え
雑談に止めた自転車あくびする
行間へあふれる程の母の愛

宮崎市　黒木栄子

亡き人が恋し見上げる冬銀河
ポケットに丸めて入れた恋心
何のため生きているのか胸に聞く

神戸市　田本古鈴

埃では死なぬ掃除の手を休め
故郷の水仙今は満開か
日々新た今日は何して遊びましょ

大阪市　中村民子

春風に乗ってペダルは遠回り
美しさ心だけでも本物で
連れ添うて迷いもあった五十年
幸せが滲み出ているウェディング
出不精の夫を誘う外は春
縛られず程良いゆるみ心地よい

池田市　倉本一弥

父の享年越えて感謝を祈る朝
要介護四　笑む母今日も二重丸
一万歩ウォークマンと二人連れ
謝罪撤回言葉の軽さまだ続く
森さんの逆ギレ今日の風刺画に
昭和生れ一人遊びは苦手です

安楽地あった野花の咲く小径
三日見ぬ花はほころび様変わり
潮騒に揉まれて島の母になる
夕暮れのカラス古木でミーティング
沈丁花ここも香ると身の証し
シャンプーの後はすがすがしい五感

津山市　高橋由紀女

マスクから食み出している団子鼻
同い年白髪頭も禿頭も
何の鍵わからないけどまた仕舞う
淡雪が一人と二匹の跡つける
蓬餅を儀式の如く作る癖
固結びする一週間のゴミ袋

大阪府　高木道子

今年また中止ですかと春まつり
蕾つけサクラも人も解除待つ
ため息も出さなきゃ溜まる春のうつ
能面の魂入れる目を描く
靴下の布あて母を思いつつ
手間かけた料理も負ける旬の味

豊橋市　小松くみ子

幸せを思う大事な人想う
亡き妻へ感謝の念が常備薬
一日を悔いなく生きるだけでマル

美作市　岡本余光

薫風に浮かれ緊張緩みがち
我儘のブレーキフリー七回忌
馬鹿なこと本気ですると笑い出る

鳥取市　吾郷天遊

にんげんの喜怒哀楽を知るお酒
人間のずるさ愚かさ嘆く天
コロナ禍で明日が影絵になってゆく
真っ直ぐな視線に本音見抜かれる
人と人の継ぎ目まあるくするお酒
頑張った私とハグをする夕陽

堺市　楠井輝子

春うらら日溜まり探しゆるゆると
薬より酒が浄化五臓六腑
一度でも過去の浮気は時効なく
大食いのテレビ平和という驕り
あどけない顔してドライなお人や
診断結果加齢は無責任でっせ

静岡市　渡辺芳子

十八歳の一人っ子赤紙が来て戦争に
玉砕の意味も知らない若い人
焼け落ちる母校目の中十六歳
松並木全部切られて戦争に
同期の人訃報が続き気力落ち
東京のオリンピック見て天国へ

雪解けが加速していく雨の音
しばらくは雨と小雪のシンフォニー
ブーツからスニーカーへと軽快に
なごり雪やっと解放されました
そわそわと動き出したくなる日差し

黒石市　北山　まみどり

本気度が毎度毎夜に降りてくる
情張りは津軽の雪が育てる
乾燥機今日も布団で待っている
三月上旬で周りの雪が消え
生命線たしかめながら酒を呑む

弘前市　高森　一呑

風向きはどうあれ進む孤高の帆
犬かきを覚えた川もU字溝
横座には胡坐の父が居た昭和
階段で煮崩れ起こしそうな膝
遮断機の退屈そうなローカル線

白河市　鈴木　たけし

太陽の香りが好きで布団干す
ドローンが教えてくれる裏の裏
ディズニーの花火も少し寂しそう
パン一つ頬張り急ぎ家を出る
愛犬が僕のストレス食べている

宇都宮市　廣瀬　良磨

詐欺犯が歓迎してるデジタル化
勧誘の電話は墓地と生前葬
我が子には見返りの無い恩を売る
歯車の歯車なりにある誇り
閉ざされた校門に散る花しきり

富士見市　中島　通則

コロナでもしっかり飛んでるスギ花粉
終わるのか苦悩深める飲食店
心配がやがて安心寂しさに
骨密度測ってからはスクワット
化粧品子に使われて減り早く

東京都　高岡　弥生

ギャラリーが朝の散歩を止めさせぬ
また一つ老人会が姿消す
役員の成り手がいない高齢化
御返しの松坂牛が旨すぎる
すき焼きで亡き人忍ぶ老いの春

横浜市　加藤　佳子

煽てられルンルンそれもいいんじゃない
煽てられ鏡をながめウフフフフ
イケメンがオムツのCMする令和
情報公開そこまではパンダの交尾
療法士イケメン行く日待ちどおし

横浜市　長島　亜希子

名古屋市　冨田末男

不思議さが時にロマンにしてくれる
沢山の答えを貰う好奇心
前を向く力になった師の言葉
味わった挫折で自負を強く持つ
数多あるドラマ人生弾ませる

八幡市　武田悦寛

傘立てに寄り添い合って杖2本
ほめられも叱られもせず老いてゆく
敬老会偉い順番大あくび
しっかりと掴んだ運が家出する
肩の荷を下ろすことなく生きてきた

大阪市　東敏郎

日常が日常でない去年今年
このところ笑ってないが増える皺
テレワーク日毎にノルマ増える家事
体重はベルトの穴が知っている
出会い系サイト気になるデートの日

大阪市　尾﨑文子

ホームワーク会社に家庭占拠され
コロナ禍も元気出さなきゃ明日のため
年金のようにならぬかデジタル省
マスク下ゴニャゴニャばかり菅総理
気になっているが断捨離進まない

大阪市　阪本秀子

変異種のコロナ紛れる闇の中
啓蟄をむかえ長閑な春をゆく
冬こえて一途にのびる清しい芽
昨日より進んだわたし見てほしい
亡き父母に桜並木の下で会う

大阪市　樋口眞

笑み浮かべ語り合ってる叔父と甥
この春も寂しい思いする予感
睡眠が自粛続きで狂いがち
いつまでもマスクの日々に馴染めない
戦時よりましとコロナ禍我慢する

大阪市　降幡弘美

相談をしにくい薬さがしてる
寝たい日に限って早く目覚める子
川柳に我が家の歴史刻みこむ
やせたいし努力するのは苦手やし
丸文字を書いてた時期もあったなあ

大阪市　森廣子

十年過ぎてやっと見つかる骨もある
曲がりなりにも衣食住足る震災忌
生きる道これしかないと坂登る
こけても立って老いの生き方身に馴染む
風が刻んだ砂浜の道しるべ

池田市　上山堅坊

新鮮な風を吸い込む趣味の会
今更にチョンボの数は数えない
サプリの数だんだん増やし無事米寿
老いの恋愉快であればそれでいい
ポケットの夢をまだまだ膨らます

門真市　坂本星雨

独り居にボタンの取れたシャツばかり
断捨離をしたのに増えている柳誌
コロナ自粛ただ爪だけが伸びてゆく
神様はいるのか仏様に聞く
花吹雪へいのちの行方聞いてみる

豊中市　荒木郁子

籠る日々相手変らず気が滅入る
コロナ禍で夜遊び出来ぬ初デート
被災地はコロナ以上に生活苦
意地張って杖に頼らず歩く日々
何やかや検査勧める若い医師

豊中市　貝塚正子

北極星だけは私もすぐ分かる
会社では偉い人ですうちのパパ
貴重品たった一つの命です
帰るコール忘れて一人カップ麺
添い寝するパパは無邪気に高いびき

豊中市　齋藤奈津子

横断歩道寄り添い渡す白い杖
リハビリの私を犬が連れ歩く
治療中筆談したい歯医者さん
加湿器を湯気と思って手を翳す
駅ピアノいつか弾きたいまだ傘寿

寝屋川市　岡本勲

夕立ちのような女房のお説教
ぬぎ捨てた女房の靴おこってる
老梅の気負うことなく風を待つ
真直ぐに生きて斜めにトゲ刺さる
こってりと飾り立てても年の皺

寝屋川市　廣田和織

上書きの機能なくした記憶力
神様が持ってる僕の削除キー
壊れたもの集めて夢を組み立てる
家籠り自問自答の日が増える
かさぶたの下に残ってる火種

羽曳野市　黒木ひとみ

野辺芽ぶき土筆たんぽぽ春霞
やみくもにわか庭師が枝を切り
世の平和願う僧らのお水取り
葉ぼたんが薹立ち始め春を知る
うららかな日差しを浴びて遠まわり

肩の荷もすこしおろせた遍路宿
休場続きでも横綱は安泰
さざ波のうちはかわいい嫉妬心
嫌なことさっと忘れる保身術
老い二人コントじこみで今日も暮れ

大阪府　奥野　健一郎

ゴミ出しの袋に透ける銘菓の字
大トロを食べた余韻の二十秒
今少しクラブ振りたく竹を踏む
浪費癖いいえ義理買い過ぎただけ
近道の標示勾配書いてない

神戸市　青山　ひろし

相合い傘誤解されたい夜なのに
保存食四五日分を確かめる
要不要いつも問うてる靴を履く
三寒四温指が一番先に知る
夫婦別姓親は驚くことばかり

神戸市　米田　利恵子

姉の絵がある義理堅い喫茶店
昔日を昨日のように話し合う
手作りのおかずを姉へクール便
阿波弁を忘れ私を取り戻す
リバウンドしても食べたい苺パフェ

尼崎市　清水　久美子

いい人になれる懐ホカホカで
正直に言えば許すと恐い眼で
ジグゾーのピースが一つ欠けている
知能犯別に活かせよその頭
根に持っているが表に出しません

尼崎市　羽奈　和子

祖母も母も我慢我慢で生き抜いた
恋も野球も変化球より直球じゃ
トンチンカントンチンカンと水落ちる
ウチの猫鼠を捕って来るのです
ウチの鍋いつも萌やしが入ります

尼崎市　山田　厚江

エアタッチ優しい風が抜けて行き
真心に触れると気持和み出し
蒼天を突き抜けて行く百舌の声
托卵へ巣立ち見守るホトトギス
雲悠々明日のことは風まかせ

伊丹市　岡村　風琴

コロナ禍で出会える人はマスク顔
孫からのラインでバァバ元気かな
雑草に交じったユリが春を告げ
申告によく働いた我褒める
シルバーで稼いだ金は孫に消え

丹波篠山市　澤　良子

山茶花の花びら乗せた蕗の薹
仏壇に金婚だねと独り言
飾らない常着の妻の笑顔好き
独楽老誤嚥防止のあいうえお
親子でも借用証は取っておく

三田市　幸田厚子

笑顔良し脱フレイルの米寿です
デジタルは辞書を片手の米寿です
アナログは心落ち着く良い居場所
米寿でも子にはバーバと呼ばせない
時短解けトラベル準備先ず地図を

三田市　馬場貴美江

ひょっとしてコロナは神のお灸かも
明日がある明日を信じて高鼾
一日が二十時間になってきた
子や孫が元気に育つありがたさ
日本にはほんまに欲しい政治力

宝塚市　太田としお

加齢には貧富の格差ない平和
乗り換え駅歩かす距離が長すぎる
ゴタゴタを一本締めがけりをつけ
団欒に口出しをする食洗器
雨風の日々懐かしむ楽隠居

宝塚市　岸田万彩

朝日射す恙なきよう掌を合わす
花は咲くいのち愛しむ風の中
この先も陽気に行こうぶれないで
ウイルスに負けまい五感研ぎ澄ます
マスク取り駆け巡りたい里の野辺

三木市　山口ヨシヱ

奈良公園若芽に競う鹿の群れ
許可下りて恐る恐るに酒を飲む
出かけにはスペアーマスク忍ばせる
就職決まる孫に祝いの金嵩む
虎の新人可成やりそうたのしみだ

奈良市　仲西賛郎

雑念の居場所さがしている散歩
ぞわぞわと皮膚が騒ぐと春がくる
砂時計裏返す度メリとハリ
蛇と虹似て非なるもの虫がいる
雑念に居場所与える五七五

生駒市　饗庭風鈴

茶柱に二人住いの大拍手
貧しくも長屋にあった助け合い
非正規に労基法など夢の夢
真心に貧富年齢性差ない
ワクチンも命も創る試験管

奈良県　室田行久

借りて来た猫が秘めてる起爆剤
吊橋で求婚なんて騙し討ち
自粛して我慢を詰めた頭陀袋
青過ぎる隣の芝がほくそ笑む
クラス会焼け棒杭が疼き出す

和歌山市　西川千鶴

コロナ禍で期限が切れたパスポート
GoTo中止エジプトの旅地球儀で
来し方を振り返り見る走馬灯
賑やかに暮した春も遠くなり
正直に生きて貧乏味わって

倉吉市　宮田風露

世に揉まれ一歩引く知恵学び取る
心友に悩み打ち明け気が晴れる
シャット立つ膝を鍛えるウォーキング
足音で妻の機嫌が直ぐ分かる
はっきりと明暗分ける合否線

境港市　藤原久直

小銭では届かぬ祈り胸に抱く
大金をシワ改善につぎこんだ
梅一輪愛でる暮らしでありたいな
これからだ後期高齢青春だ
あてにする薬と医者と仏さま

米子市　妹能令位子

外は雪独りぼっちで夕仕度
春を待つ牡丹がりんと抱く蕾
散る花も咲く花もある春の庭
呆け防止根気よくおる千羽鶴
九十四歳寝てもさめても五七五

鳥取県　田中重忠

ドキドキしてワクワクもして八十路坂
クラス会先生よりも老けた子ら
ユニークな意見無視する多数決
高くても旨い豆腐を買いに行く
飲み友が元気かどうか分らない

松江市　中筋弘充

久しぶり帰省の孫にうで振う
相手より上を目ざした頃ほしい
弱音はく自分に激をとばした日
向こう岸とんでみようかやめようか
病んでみて普通と言う字のむずかしさ

雲南市　永見安子

たっぷりの愛を零さぬ猪口ふたつ
真っ白な朝を汚した群れ鴉
東北の復興願う島根から
渦潮の吸い込む手向けの花束
家計簿の頭の痛い春が来た

安来市　原徳利

瀬戸内市　宮宅比佐恵

わがこととなって来ました家族葬
もう卒寿メダル一つもないけれど
産直の旨さつたわる魚野菜
マスクして遠耳同士会話無理
マスクとり話もしたい笑いたい

広島市　田桑恵子

列島になおみの快挙駆けめぐる
ほくそ笑むコロナが見てる人の波
ワクチンの速やか接種待ちわびる
春の服出してはみたがまだ寒い
息子のメール要件のみで素っ気ない

広島市　常國喜好

幸せはふっと出会ったその日から
人生はいつでもきっと初舞台
日がのびて土の中にも春の声
ぼけてきた頭に春の陽を当てる
まっ直ぐな道ばかりでは眠くなる

尾道市　小川道子

笑みひとつ春のドラマは陽気なり
真面目さが邪魔することもあるんだね
人間がいちばん恐い気がします
諦めた時点で一つ歳をとる
生き抜いた頑張り抜いた気の根っこ

府中市　岸田武

わきまえております僕の土ふまず
責任転嫁議員の椅子はよく回る
もう少し座っていたいさくら餅
春ですね上着を畑に置いて来た
啓蟄より先にとびだす作業服

松山市　郷田みや

合鍵はこんなに重たかったのね
花びらの残り数えてクルコナイ
反論はしないただ受け止めるだけ
プリズムが春の光を待っている
寄り添っていたのは直ぐに消える影

唐津市　前田廣幸

野党への土産の如く週刊誌
洗車機に休み与えぬ黄砂かな
手に汗を免許取立て握らせる
居眠りでなく熟睡の永田町
春眠へ寝過ごす因の「あと五分」

佐賀県　真島久美子

片足を掴む誰かも連れてゆく
エントリーシート鱗を引っ剥がす
春うらら有料記事の終わり方
ときめいているワタクシの頭蓋骨
塗り潰すときは天使の顔をする

なるほどな別人格のご長男
老人の自虐のギャグは許されよ
いい人の肩書つけてボクは逝く
老春を覗いただろう春の虹

阿南市　小畑定弘

歯車のズレは決して許さない
救急車の音に消されたポロネーズ
いびつでも許そう相似形だから
ほんの涙が大きな渦になるなんて

松山市　大内せつ子

四面楚歌冬は一人の色になる
単純な人をほめ過ぎてはならぬ
いさぎよく引いてプライドだけ守る
延命拒否夫のカルテ白いまま

大洲市　花岡順子

ペットです人間なみです　ぼけてます
釣れずとも流れと風がクスリです
通りゃんせ過去におさらば花吹雪
ノンフィクション時にフィクション陶冶の詩

高知市　三谷松太郎

先生に抱いたままの淡い恋
なるようになるさ私は楽天家
お帰りと言ってほしいが無人駅
金のなる木ゴメン寒い夜出したまま

福岡県　本田さくら

華の重三段なれば食べきれず
太陽の渋沢栄一買ってくる
三年後新札一万この顔で
何時からか隣りの猫が夜巡り

唐津市　岩崎實

満開の約束をした初桜
マドンナの妊婦姿もマドンナね
黙トレはジム自転車の五七五
かすれ声コロナ疑い風邪薬

沖縄県　禱モモト

ほこり取り並びかえよう好きな本
庭の木に枯れ木つみつみ目白の巣
憎い猫内のインコになにをする
マスク顔たまにたっぷり手入れする

沖縄県　宮すみれ

雪国の祭囃子さ猛吹雪
三つ目の角曲ったらエスケープ
お疲れさん電池抜き取る午後八時
そうだった忘れるふりも得意技

黒石市　石澤はる子

眠れない夫の布団羊柄
息子の名一字を娘等に与えてる
震災とコロナ乗り越え笑う日も
花粉症くしゃみの飛沫どこへ行く

横浜市　巌田かず枝

平和だと言っていいのか桜咲く
幸せは里の思い出からチャージ
どちらからともなくつなぐ手の温み
どこまでが芸かピエロの泣き笑い

岐阜県　喜多村　正　儀

肩書きですぐにベッドが空くらしい
五十歳さあ後半を楽しもう
五十歳すごい大人になりきれず
五十歳ビタミン剤を追加する

浜松市　中　田　　尚

夫婦茶わんご飯をもって五十年
ワンコインで買った雨傘つい忘れ
病院通い医師はもう歳ですと言う
八十も過ぎたら後に道ゆずる

江南市　脇　田　雅　美

謎めいた曇り硝子のシルエット
叔父叔母の昔ばなしが懐かしい
とりあえず路銀だけ持ちプチ家出
雑草が勢い付いて落着かぬ

豊橋市　西　郷　紀美代

接待を受け過ぎ官が麻痺をする
節分に太巻きガブリ厄落す
コロナ禍で人の暮しが大変化
梅見酒コロナ飛ばしに飲んでいる

京都府　北　野　クニオ

駅ピアノ恥ずかしそうに誇らしげ
リモコンで背中掻いてる長い夜
枕元に紙とペンあり熟睡す
右大臣女官にそっと声を掛け

大阪市　今　村　和　男

春一番吹いて左遷地ボクも飛ぶ
花筏春が川面を滑りゆく
新緑に負けてなるかと奮い立つ
酸い甘い知って人生今が春

大阪府　大　浦　福　子

あの時は本気だったの割れ茶碗
恋なんてなんぼのもんとコップ酒
喉元でつっかえているラブソング
ママママと泣いて縋った子に縋る

大阪市　岡　田　恵　子

一と言ですむのにいつもあれやこれ
洗いざらしの翼羽ばたき親離れ
大あくびマスクのおかげ堂々と
脆いとこ知っているから頑張らぬ

大阪市　柴　本　ばっは

ケチケチと集めたものがあふれてる
オンライン外れてうまく生きてます
春がくる　まずはわが身のお手入れに
心澄む坐禅しながら日向ぼこ

大阪市　中　村　峰　子

店先で私呼んでる若牛蒡　　大阪市　宮本千恵子
顔よりも脳にたくさん皺欲しい
小銭すぐ出せる財布を探してる
朝の五時ミケの鼾で目が覚める

この世では名誉はいらぬ金ほしい　　大阪市　前川善之
春が来た桜見物一人酒
政治家は与野党共に税で食う
雑草の小花の様に強くなれ

コロナ禍を風に流せよ鯉のぼり　　大阪市　松田聡
ワクチンの効果を祈りつつ自粛
満開をディスタンスとり見る二人
広報官の病気ごちそう食べ過ぎか

コンビニで選ぶ夕食春寒し　　泉大津市　助川和美
キッチンに立つ母背中丸くなり
開けてすぐメルカリに出す福袋
幸せ感違う夫と金婚譜

負けないぞ老いが私を追いかける　　泉大津市　樫葉良子
年賀クジ切手で嬉し庶民です
セピア色ミニスカートの私居る
平凡が当たり前だと勘違い

屋根の猫思い思いに日向ぼこ　　交野市　山野双葉
パンジーの切手で投句春ポスト
発つ母にうすむらさきの小紋着せ
痛いほどただ拍手して子等送る

のっけから波瀾怒濤の令和の世　　河内長野市　穂口正子
収束を待ってすること箇条書
零一つ見落し焦る試着室
小出しする幸せ貯金春の鬱

酒時計五時になったら唸り出す　　堺市　古川光雄
今日もまた薬飲むよに晩酌す
マスクすりゃ顔も隠すが心まで
カレーの匂い家中漂い夕餉待つ

難聴の耳を掠めるニュースネタ　　吹田市　西沢司郎
異変種も交え迎える五輪祭
なに議論してるか知らぬままエンド
青春の夢を叶えた散歩道

梅ぽつり目白のペアー今日は　　高槻市　鳥居宏
散歩道マスクの下は無精髭
火焔土器見方で岩に散る波に
チョコくれてくれた人等が食べていく

断捨離は己も捨てる気持です
神経痛死ぬまでそっとしていてね
頭いいだけでは上に立てませぬ
忖度が出世条件お役人

高槻市　三谷白黒

ダイバーのライトに魚は眠た気に
春は来る梅観る人はまばらでも
グランドにそよぐ浜風はずむ声
中流と呼ぶぬるま湯の心地好さ

豊中市　松田蟻日路

色取りと栄養混ぜて朝御飯
気が付けば追ってた夢が消えている
みてみてと百均グッズ自慢する
孫の手を借りて勤しむメカ音痴

寝屋川市　川本信子

人の話ぬすみ聞きしておひれつけ
自慢の手芸ほめてほしいが知らぬ顔
白寿です残り人生倖せに
3姉妹おたやんおかめ丸えびす

寝屋川市　坂本ミヨノ

名刺入れ今や診察カード入れ
職業病治してみるぞ定年後
人立てるコツを覚えてはや余生
勘当も離婚もしないわがトップ

東大阪市　秀爷

神様も仏様も居る我が大和
つくづくと一人手を見る占い師
生きましょうコロナ孤独は川柳で
買ってきたチョコをなめなめ宅勤す

八尾市　田邊浩三

孤独とは思わないのに気が沈む
まだまだね油断大敵変異株
怖いです消えぬ山火事日本でも
数独の難問解いて自分ほめ

神戸市　石川克美

波濤越え静かな入り江亀の背な
止まり木で傘寿の軌跡確かめる
しゃべりよく食べ元気な友が逝った嗚呼
あじさい雨滴嬉し涙が映ってる

神戸市　興水弘

株主じゃないが気遣う空のバス
雑草も自粛じゃないのか伸び放題
梅の香もマスク越しでは届かない
ハラスメントいくつあるのか知らぬまま

神戸市　近藤勝正

久々の友の便りはスマホから
心ない人のうわさにまどわされ
ゆっくりと牛の歩みの散歩道
ぼやいたら逃げてしまった福の神

神戸市　山根弘華

亭主面何処へ吊り橋渡る顔
救いの手何処の句会もない没句
門構え溜息が出る貧富の差
無茶なこと平気浪速の値切り術

明石市　瀬島流れ星

来客だ大掃除へのホイッスル
保釈金出所どこか気になるな
100均も付けて欲しいなポイントを
語らずも親父の歳か噛み締める

芦屋市　新阜義明

世の中がどうであろうと日は昇る
千手観音指図はせずにひそと聞き
分水嶺水一滴が川になる
心眼を開く警策飛んで来る

伊丹市　延寿庵野鶴

人と会うマスク手袋帽子まで
ぶり返す冬の寒さは気まぐれだ
マイナンバー暗証番号直ぐ忘れ
世話をする知らず自分も世話になり

伊丹市　平井富夫

弾む声サクラ咲いたと孫が来た
気がせいて隠す尻尾もひょいと出る
綺麗かな孫に教わるメイク術
睨み鯛3日にらんでお吸い物

三田市　生田えい子

生きること切なかったね母を抱く
夕凪のかすかな谺波便り
鳥の唄花に教わる詩ごころ
無人駅迎える桜さと訛り

三田市　稲角優子

気を遣うコロナの中の花粉症
春嵐病葉までも踊らされ
散策で四季のアルバム出来上がる
被災地の傷あと今も消えぬまま

三田市　木村マユミ

よい天気洗濯物も踊ってる
喜寿迎えサプリのチラシ気にかかる
はずかしい高級官僚たかり癖
エンマさま霞ヶ関に舌抜きに

三田市　住吉美和子

雨戸音睡眠不足二度寝さす
ノルマまで後千歩だと欲出して
亡母年越えて一人だ頑張ろう
コロナ中筋力つけよと畦散歩

三田市　辻開子

ウグイスもステイホームかまだ鳴けず
日変りでマスクを変えてショッピング
亡き母のおはぎの味は忘られぬ
スマホに変え夫婦で今日も四苦八苦

三田市　森玲子

合言葉大変ですね新コロナ
長引いてマスクファッション派手になり
いい笑顔元気な証見えている
ライバルへさすがお見事負け認め

丹波篠山市　藤井美智子

ウソでしょうオレと言う名の孫おらん
ほい来たとサギの電話にウソならべ
同級会本音出すのは二次会で
春一番私の心ざわついて

丹波篠山市　横溝安子

受けた恩少しばかりのお裾分け
難局も見えない愛で支えられ
持っている我が体力に運を足す
庭の花春に春にと準備中

西宮市　高瀬照枝

指先に魔法をかけたピアニスト
ワクチンがやっと始まる春もくる
セーフですコロナフレイル一歩前
ウイルスが形を変えて攻めてくる

西宮市　高橋千賀子

もぞもぞと這い出しそうな旅の虫
リモートで俺の熱意は伝わらぬ
孫帰りやれやれするも寂しさも
負け犬は聞こえぬように遠吠える

奈良市　東定生

忘却の彼方と言えぬ過去のキズ
いつもの子角をまっすぐ通りすぎ
知ったのは恋と酒とが同じ頃
点と線交わる所へソクリを

奈良市　尾畑なを江

指を折るリハビリ代わり五七五
ママチャリは電動ばかり坂の街
三月三日おひな様にもマスク掛け
出かけ前マスク選びが一仕事

生駒市　児玉規雄

春眠の心地よい朝窓の風
春雨に指を折ってる五七五
ほろ苦さまだ覚えてる恋の味
七転び八起き転んだ数のあと

和歌山市　北原昭枝

またひとり旧友が逝く早い春
マスク越しどうもどうもと暮れる日々
もういいとみんな捨てたい時もある
長期戦予防注射で解放か

和歌山市　倉橋悦子

すっきりと部屋も心も整理する
シンプルに生きて人生楽になる
コロナ禍でますます遠くなる実家
モットーは一つ増えたら一つ捨て

和歌山市　定松宏枝

和歌山市　佐藤まき

責任を言って詮ない見えぬ敵
空襲時は避難毎日幼い日
街の声聞いて焦れます戦中派
平和に慣れ予期せぬ敵に耐えられず

和歌山市　鍋嶋澄子

パタンキュー寝る児にそっとブランケット
三線がデイゴの花がめんそーれ
コロッケはキャベツトマトで卓の花
あやとりを覚えてた指遠い空

和歌山市　まつもと　もとこ

大声を出してコロナ禍のり越える
考える人から進化ツイッター
鏡見るわたしをもっと見てあげる
右向けば左の闇は消えている

和歌山市　福島一雄

餌づけした皿にこのごろひよ鳥も
観光地あと半年のご辛抱
ラーメン屋聞こえる音はすする音
ワクチンを早く打ってと腕まくり

岩出市　村中悦男

さあ起きよう窓の隙間に春の風
よく生きた過去を称える今日の幸
自粛の今日も日記代りの五七五
一円玉光を放つ消費税

和歌山県　三枝眞智子

国訛りが恋しく通う縄暖簾
いい夢見た朝の一服レモンティー
売り言葉に買い言葉では済まぬ事
リーダーが波風立てて揺れる船

和歌山県　森下よりこ

コロナでも季節巡って梅さくら
コロナ禍のあとは税金追ってくる
行ったり来たり目に見えて来た春だ
雑巾を新しくしてやる気出す

鳥取市　大前安子

春の陽へコロナ忘れて笑顔でる
さざ波とたわむれ帰り立つ厨
里の景のどかを保ち帰省待つ
地蔵様今日も同じの笑み浮かべ

鳥取市　山野すみれ

のり代が剥がれぬように傘の中
ぶくぶくと沈まぬように舟を漕ぐ
都合良くあの日あの時忘れられ
メモ書きの手帳あの頃語り出す

倉吉市　伊藤嘉昭

あの笑顔本当に僕だけ夢だった
忖度は権力のもつ闇社会
縄のれん満点サービス今だけよ
嫌になる話題はいつもコロナさま

倉吉市　大羽雄大

親指を立てて頑張れ子へエール
明日は明日今日をしっかり使い切る
目姿をせめて大事にマスク顔
油断した隙にヘルペス顔出した

倉吉市　堀かずこ

コロナ禍で何を信じて生きようか
青空をながめて気持晴れてきた
結果良い医師のひと言神の声
年をとり過ぎる今日の日早いなあ

倉吉市　若松由紀子

大波小波いろいろあった夫が逝く
いつまでも安心出来ぬ親心
はっきりと言ってはならぬ事多し
いつか吹く上昇気流待つ八十路

境港市　中井虎尾

沖を見りゃ薄く浮かんだ隠岐の島
菜の花見昭和のむかし思い出す
落ち椿花そのままに集合す
入試ミス化学の答え生物に

米子市　川本美津子

顔の皺マスクで隠す若作り
南南東に干支の置き物福を呼ぶ
占いの良い事だけを信じてる
お雛様やさしい顔に安堵する

鳥取県　下田茂登子

過疎捨てて出たは出たけど友がない
懐も寒いが大雪まだ寒い
マスクして自分の顔も見失う
用事はある出来ぬ体力情けない

鳥取県　橋谷静江

あれこれと心配事で老けてゆく
周波数合わず困っている夫婦
宝物さがしていたが家族愛
姑と言う立場があって今いえぬ

鳥取県　本庄汪

重い腰やっと上げるも気乗りせず
太鼓腹打てば響くとちと違う
黙とうで開く節目の同期会
待ち合わせ動かないでと念を押し

松江市　相見柳歩

覚悟するそしてこころも広くする
つながったラジオの電話リクエスト
プレゼント君とならんで歩くこと
はっきりとしてよどっちが好きなのよ

松江市　山根邦代

外は春あなたの笑顔ホットする
防災は人事でなし知恵を持ち
一口で十年と言うせつなさよ
足腰が弱っていても五七五

（黒目ひでおさん、松尾信彦さん、土井輝恵さん、伊藤寿子さんは37頁にあります）

英語 de Senryu⑬

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

名人は　顔をあげずに　返事する

the expert answers
without lifting
his head

古着屋は　ちょいとつまんで　ちょいと放り

old clothes dealer
lightly picks through the clothes
and throws them away

---

the expert 名人　*answer* 返事する　*lifting* 挙げる　*old clothes* 古着　*dealer* 商人
lightly 軽やかに　*pick through* 目当てのものをつまみ出す　*throw~away* 放り投げる

～リバーウィローのため息～世界の詩歌㊸：永山杢郎の詩歌活動②

前号に続き、永山杢郎先生の詩歌活動の紹介です。詩歌への卓越した英語表現力は旧制高校時代の英語学習、同志社大学英文科時代の英米文学書の読破、神戸税関時代の英語文書作成業務と会話、故郷倉敷での教員としての英語指導によって培われたとともに、詩歌に対する秀でた感性によるものです。わたしは先輩を仰ぎ見る後輩の気分で、今も先生と交流出来ることに感謝しています。先生は詩集 *SNOW BRIDGE* 『雪の橋』(北星堂書店 1976) の出版以来、英詩集８冊、４冊を上梓。わたしは常にそれらの著書を座右に置いて、自分の英詩創作のお手本にしています。かつて先生は友人の英文学者から英詩を和訳して発表したらと示唆され、生まれたのが *SELECTED POEMS-Fifty Pieces in Fifty Years* (1965-2014) です。まえがきで「言葉の壁は私にとって障害ではなく、むしろ保護してくれるものである。その盾に身を隠し、いままで50年間、英語で詩らしきものを書いてきた」とあります。そして英詩の和訳の作業は至難の業で、妙なことに恥ずかしい気分にもなると記していられます。

A word/ takes off/ its robes/ one/ by/ one/ to cover/ its frozen/ meaning
言葉は / 衣を / いち / まい / ずつ / 脱ぎ / 凍った / 意味に / 掛けてやる
"Word and Its Meaning"（言葉とその意味）より

誹風柳多留一三篇研究 9

山田昭夫・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
高野範雄
清　博美

わびぬればいまはたおなじ難波なる
　身をつくしてもあはんとぞ思ふ

元良親王のこの歌は、『後撰和歌集』（巻第十三恋五）に収められているが、「事出で来て後に、京極御息所につかはしける」という詞書がある。つまり京極御息所との関係が露見して、逢瀬が出来なくなった時に、「京極御息所につかはしける」歌なのだ。京極御息所は藤原時平の女で、宇多天皇が上皇となられた後に后となられた方である。宇多天皇は、元良親王の父・陽成天皇の叔父に当たる。元良親王は大変な発展家であったようだが、あろう事か、父の叔父に当たる宇田上皇の后と関係を持っていたわけだ。主題句はこの事情を詠んだものであろう。

なお、『太平記』（巻三十七）に出てくる志賀の上人が恋焦がれた京極御息所とはこのお方である。

　侘びぬれバ以後たしなめと親父折　一四〇5

清　賛。

69　**わるいくせのむとハつかへ手をかける**

山田　「飲むと刀の柄へ手を掛ける」のは「悪い癖」だ、というのだろうが、危なくって仕方ない。なお「飲むとは」の「は」は、係助詞。

　くせの有酒でくじらの太刀をはき　拾一〇9

清　賛。

70　**御寺のハ大根や酒ですまぬ也**

山田　七福神で知られる大黒天の祭日は甲子（きのえね）の日で、当日は神棚に御神酒を上げ、二股大根を供える。一方御寺の大黒（梵妻）は、生身の大黒だけに色々と物いりで、とても「大根や酒ではすまぬなり」。

　大黒がないと御寺ハ富貴也　四〇16

清　賛。

67　**薮いしやのはいつた家にさつき立チ**

山田　屋根の上に紫雲がたなびくのは瑞兆だと言われるが、藪医者の入った家（原句の安四松4は「やね」）には紫雲ならぬ殺気が立ったというのだ。病人の運命や如何に。

　やぶいしやハ一人リ生かすと二人しに　一八20

伊吹　賛。藁にもすがりたい心境なのだろう。

清　賛。

68　**おはさまをくどいたもある百人一首**

山田　百人一首の二〇番。

71　**つくしぬきおれとハわるいしかりよふ**

山田　吉原通いに夢中の息子に業を煮やした親父、そんなに思っているのなら、とことん「尽くし抜きおれ」と叱った。しかしそれは「悪い叱りよう」だというのだ。そんな事言ったら、これ幸いと「尽くし抜き」するのは分かり切ったものだから。

とてもうせるならよし原へうせおれ　二〇17

小栗　賛。尽す＝「たわけを尽す」「ぎかを尽す」の略。愚かな事をする（「江」）。

伊吹　賛。現代の「尽す」とは、また意味が違ってたんですね。

清　賛。

72　**若とのに道をおしへる大どしま**

山田　大名の嗣子である若殿は、年頃になると「お相伴」と呼ばれる「大年増」によって「色の道」の教育を受けたと言われる。主題句はこの事をズバリ詠んだもの。色事の裏表を知る大年増の指導は行き届いたものだろうし、大年増は若者が好きだから、一挙両得だったであろう。

若殿の十番切りに局が出　菊・明四9 25

清　賛。

73　**ちりめんをとり縄にするやりてばゝ**

山田　縮緬を捕縄にして遊女を折檻する遣手婆。遣手の折檻はすさまじいものだったらしい。

ちりめんをしごいて遣リ手立チかゝり　安三七3

ちりめんハ遣リ手の遣ふさるくつわ　二14

清　賛。

74　**定家の門にうくひすないて居る**

山田　百人一首の選者の藤原定家。その小倉山にある山荘の門に鶯が「ないて居る」というのだが、「ないて居る」が問題。「鳴いて」と「泣いて」とが掛けられていて、二様に解することが出来る。この句は、百人一首には鶯を詠んだ句が無いところから、「ないて居る」のだが、

①折角鶯が門の所で「鳴いている」のに、

百人なから鶯に気かつかず　三八32

という次第で漏れた。

②もう一つは、選に漏れたので、

鶯ハ時雨のちんをもれて啼き　三三12

恨み辛みで門の所で「泣いている」。

小栗　賛。二様に解せるところが技巧。どちらと決めなくてよい。

清　賛。

75　**白石でせんをしているまつの内**

山田　碁石の白石を「こま」代わりにして、松の内の遊びに家庭内でかるた賭博に興じている風景。当時も賭博は厳禁だったが、正月の遊び程度は見逃されていた。

句は、「白石で銭をしている」というのだから、「低額」の賭金ということになり、その程度なら、家庭内で行っているかるた賭博ということが分かる仕組みになっている。

鳥の目にごいしを遣ふまつの内　安八松2

碁で無イ時には黒石かくがいゝ　一九6

小栗　碁では、黒石が「先」であるが、松の内の場合は、白石で「せん」をしているという技巧。ただ、「せん」がわからない。礎説の「銭（せん）をする」という用語があるだろうか。「戦をする」？

清　句意は礎稿のようなことかと思うが、「せん」にどんな漢字を当てるべきか？

山田（再説）　銭＝コマと思っています。

愛染帖

新家　完司　選

（投句２６４名）

本当に命が惜しい花の下　横浜市　加藤　佳子

（評）満開の花の下、穏やかな春の光に包まれていると、「もう少し生きていたいな…」としみじみと思う。若者には解らない感慨。

どっしりとそれが一番むつかしい　米子市　後藤　宏之

（評）何事が起こっても慌てず「どっしり」と思っているが、いざとなればアタフタ。まだまだハートはピチピチ新鮮なのだ。

「イケメンさ～ん」一度で孫が起きてきた　朝霞市　前田　洋子

（評）何度呼んでもグズグズしている孫。「イケメンさ～ん」には敏感に反応してガバと起きてきた。おばあちゃんの作戦勝ち！

ひとりでもさみしくはない立ち飲み屋　弘前市　髙瀬　霜石

（評）誰に遠慮もないオトナの心地良い自由な時間と軽い孤独感。このような体験を重ねて「仲間の有り難さ」も分かってくる。

努力目標背を丸めずに歩くこと　米子市　吉田　陽子

（評）寒がりになった所為もあるのだろうが、気がつけば背中を丸めて俯き加減に歩いている。しっかり前を向いて心も広々と！

孫が描く似顔絵どれもやつれ気味　豊中市　藤井　則彦

（評）似顔絵を描いてくれるのは嬉しいが、どれも皺くちゃの老いぼれ。観察眼の鋭い孫にはそのように見えているのだろう。

免許更新時計の針がまだ描けた　岡山市　髙岡　茂子

（評）後期高齢の運転免許更新には「認知機能検査」が必要。その一つが指示された時間の時計の針を描くこと。描けて良かった。

「できます」と言えばその気になる頭脳　横浜市　川島　良子

（評）できるかな～？　と迷っていてはダメ。思い切って「できます！」と言ってしまえば、脳味噌もその気になって動きだす。

庭手入れ梯子禁止と内輪揉め　河内長野市　黒岩　靖博

（評）家族からの「危ないからやめて！」というブーイングと「大丈夫！」との押し問答。大怪我をする前に止めるべきだろう。

よろけるとコントのようと娘が笑う　尾道市　小川　道子

（評）コントの「おっとっと！」は、間一髪でセーフになって笑わせるが、こちらは冷や汗。だんだんそのような事が増えてきた。

大阪市　髙杉　千歩

まだ生きるつもりファッション見て廻る　鳥取市　副井ゆたか

難聴を理由に不利な場を凌ぐ　羽曳野市　宇都宮ちづる

四十年持ってた株も終活に　堺　市　坂上　淳司

ホームランをファウルボールにしたビデオ　長岡京市　山田　葉子

バッグの出番ないまま春がまた巡る　笠岡市　藤井　智史

口パクの歌手　口だけの政治家　津山市　髙橋由紀女

さぶちゃんの生き方学ぶ祭り唄　唐津市　山口　高明

闘鶏の運命負けると鍋が待つ　西宮市　福島　弘子

ドラマより国会中継面白い　大阪市　樋口　眞

正直にしんどいと言い気が楽に　鳥取市　大前　安子

つまみ食いゆるむ口だね春だもの　丹波篠山市　長谷川善輔

春だよと庭のムスカリ声かける　交野市　山野　双葉

大まかな人と暮らして幸せで

奈良市　米田　恭昌
床暖もいいがやっぱり股火鉢

豊中市　松尾美智代
デパートもスーパーも行くスニーカー

米子市　竹村紀の治
零さずに食べたことないメロンパン

沖縄県　宮　すみれ
通学路朝弱い児の大あくび

尼崎市　山田　耕治
病室の眺めをほめている見舞い

大阪市　宮﨑シマ子
でもねでもね百歳だって腹が立つ

美作市　岡本　余光
読みかけの本探してる二月尽

大阪市　平井美智子
飢え死にが大きな記事になる日本

明石市　瀬島流れ星
震災後我が十年を省みる

和歌山市　まつもともとこ
二人分作りひとりで食べている

岡山市　丹下　凱夫
死んだふりしてるキャベツの中の虫

倉吉市　牧野　芳光
だんだんと腑抜けになって美味い酒

河内長野市　山岡冨美子
目配せで妻の不機嫌子が知らす

箕面市　中山　春代
護身符になったドライブレコーダー

伊丹市　延寿庵野鶴
魂に鎮痛剤を飲ませよう

奈良県　渡辺　富子
挨拶は「お元気ですか」「どうもです」

松山市　栗田　忠士
令和三年三月三日九千歩

鳥取県　斉尾くにこ
掃除機をかけたら春がやってきた

佐賀県　真島久美子
みじん切りされて役立つ春キャベツ

豊中市　水野　黒兎
ほほえみを使い果たして病む夫

三田市　上田ひとみ
涙ぐましい育毛剤のコマーシャル

神戸市　敏森　廣光
レギュラーは四五枚だけの食器棚

香南市　桑名　孝雄
アレクサもsiriも言わせんと言わん

熊本市　杉野　羅天
持ち運びしやすい重さです頭部

大阪市　小野　雅美
同じ気温春暖かく秋寒い

唐津市　仁部　四郎
痛風はテロの一種で不意に来る

黒石市　石澤はる子
一人ではやっぱりきついホールピザ

米子市　成田　雨奇
危険でも熱いお風呂はやめられぬ

鳥取市　前田　楓花
いい亭主演じきるため耐え忍ぶ

大阪市　高杉　力
何をとっても女性が上に見えてきた

大阪市　岩崎　公誠
うっかりと席を譲って怒られる

鳥取市　福西　茶子
取り扱い注意五歳児八十歳

大阪市　谷口　義
計算は苦手妄想なら上手

松江市　石橋　芳山
コロナ禍に揉まれ優しくなっていく

ピーポーに延命拒否書抱いて乗る
MRI駄作を練って耐えている
瘦せナスビ朝餉の友となりおおせ
ジョギング終えてポテトチップス一袋
肩書もないし口下手でもあるし
サッチモのレコードだけは捨てられぬ
おもしろい事を探して生きている
横断歩道渡った猫が礼を言う
修学旅行以来議事堂縁がない
東京都以外みんなが地方です
通帳が天寿全う無理という
窓ぎわで外は明るい社は暗い
型落ちも色落ちもしてよく笑う
嘘はまだ続いて善人を通す

大変でんな声聞こえそう豆秋忌　堺市　澤井　敏治

カレンダーぎっしり埋めてまだやる気　鳥取市　倉益　一瑤

誌上句会無観客にも似て寒い　奈良市　大久保眞澄

揉みほぐす春の言葉を選っている　三田市　北野　哲男

恥ずかしさ半分隠すペンネーム　防府市　坂本　加代

登りたい登れない川柳の壁　安来市　原　徳利

壁のない川柳界を飛び歩く　池田市　上山　堅坊

晴耕雨読口がむずむずしてきます　犬山市　金子美千代

うらめしいコロナに春を取られそう　奈良市　山本　昌代

コロナ禍で恋も咲かない暗い春　枚方市　谷　英也

リビングの隅で世界とテレワーク　大阪市　宇都満知子

神様はコロナ収束会議中　沖縄県　禱　モモト

マニュキュアを夫に見せて自粛中　上尾市　中村　伸子

千歩計有れば足ります自粛の身　三田市　多田　雅尚

手洗いにうがい出るときマスクして　大阪市　坂　裕之

マスクが好き男前になれるから　大阪市　江島谷勝弘

マスクでもランチの時は紅を引く　神戸市　能勢　利子

ずるマスク直しながらも立ち話　倉吉市　大羽　雄大

ワクチン注射やっぱり主治医願いたい　堺市　今井万紗子

映像で見ると痛そうあの注射　大阪市　磯島福貴子

マスクから注射器までも輸入する　塩竈市　木田比呂朗

生活がよりシンプルにコロナの世　和歌山県　森下よりこ

ステイホームで忍耐力を付けている　松山市　柳田かおる

ステイホーム妻のお酌で我慢です　府中市　岸田　武

自粛して五体ますます軋みだす　三木市　山口ヨシエ

自粛中体重増える介助犬　神戸市　近藤　勝正

巣ごもりに慣れてる猫に癒される　札幌市　三浦　強一

人恋し「さざんかの宿」人恋し　宝塚市　丸山　孔一

ウーバーイーツ家で楽しむ食べ歩き　高槻市　原　洋志

お出かけが無いのでＩＣＯＣＡ淋しそう　貝塚市　石田ひろ子

辿り着いたら峠の茶屋は自粛中　大阪市　井丸　昌紀

自分史にコロナ乗り超え一行を　神戸市　興水　弘

美容師と鏡の中で目を合わす　羽曳野市　黒木ひとみ

役に立つことも教えるコマーシャル　鳥取市　岸本　宏章

むらさきに煙るわたしの前頭葉　岡山県　田中　恵

上機嫌ガラガラポンで米五キロ　河内長野市　村上　直樹

ひな祭りちらし寿司よりテイクピザ　香芝市　山下　純子

春らしくざわついてきた足の指　黒石市　北山まみどり

ふわふわと少女になって飛ぶ綿毛　鳥取市　山野すみれ

マイカーを手放し電チャリを買った　高槻市　初代　正彦

あちこち痒いどの薬かの副作用　京都市　都倉　求芽

お前もかアハハと頻尿の話　藤井寺市　鈴木いさお

大阪市　岡田　恵子
春が来た一升瓶をぶら下げて

和歌山市　北原　昭枝
会えぬ友サクラサクラと家で呑む

三田市　村田　博
ワンカップ持参でひとり花見酒

大阪市　若本　安代
ひとり花見スマホお供にカップ酒

富田林市　山野　寿之
黙食はスマホ片手のワンカップ

豊中市　齋藤奈津子
花冷えに熱燗つけて独り鍋

尼崎市　永田　紀惠
もどれないあの日と遊ぶひとり酒

羽曳野市　吉村久仁雄
やるべき事ほったらかして酒にする

大阪市　大沢のり子
ぶり大根粉山椒で進む酒

三田市　福田　好文
僕だって断りません飲み会は

弘前市　稲見　則彦
十七時暖簾がさがる台所

八幡市　武田　悦寛
気になった古くぎ抜いて二人酒

豊橋市　小松くみ子
焼酎も酒の好みも似て夫婦

富士見市　中島　通則
下戸の妻大吟醸は飲むと言う

藤井寺市　太田扶美代
飲み過ぎ食べ過ぎそして幸せすぎ

三原市　笹重　耕三
納得という幕引きへ落ちる酒

横浜市　菊地　政勝
ただ酒に潜んでいます下心

松山市　大内せつ子
バッカスに今宵の眠り浅くされ

高槻市　松岡　篤
休肝日決心固い午前中

鳥取市　岸本　孝子
来年は桜の下で飲みたいな

岡山市　永見　心咲
記念樹も孫も三歳よく喋る

豊中市　池田　純子
ぴょんと飛ぶ孫を横目に遠まわり

京都市　清水　英旺
ポリープを養ってたとは腹立たし

岡山県　藤澤　照代
生きてます知らせるために子にＬＩＮＥ

名古屋市　冨田　末男
苦の時代辛抱強さ身に付けた

東大阪市　北村　賢子
くすむ心に活気をくれる青い天

大阪市　今村　和男
玄関のトイレスリッパ春が来た

鳥取市　田賀八千代
口チャックしているけれどよく壊れ

松山市　郷田　みや
合格の知らせ土筆を見つけた日

広島市　岸本　清
僕がボケ妻がツッコミああ夫婦

大阪市　内田志津子
リハビリに赤いマフラーハンティング

鳥取市　山下　凱柳
医者よりも妻の一言グサリくる

大阪市　柴本ばっは
記憶力抜群なんていやな人

東京都　川本真理子
日本に四季あるうちはスクワット

大阪市　石田　孝純
ポケットのコンプレックス温める

鳥取県　門村　幸子
ドキドキすたかがおみくじ開くとき

岡山市　大石　洋子
スマホ脳ＩＱ低くなるのかな

三田市　大西　重男
一日が終わって今日は何をした

羽曳野市　徳山みつこ
いつまでも齢をとらんと思ってた

芦屋市　竹山千賀子
しきたりが合わぬとみたか猫家出

丹波篠山市　酒井　健二
出直しとするか腕立て伏せをする

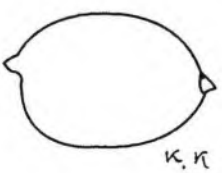
大阪市　山本加お里
はよ寝えやこぶしどうしでまたあした

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句332名）



「弾く」　石橋芳山選

ロカビリー僕の背伸びと同時代　高槻市　松岡　篤
フジコ弾くしじまに響くカンパネラ　広島市　田桑　恵子
客よりも絶対強いパチンコ屋　堺市　坂上　淳司
娘のピアノ社宅に入り売りました　八尾市　田邊　浩三
菜の花のツンツン弾きたい黄色　奈良市　大久保眞澄
だから嫌はっきりしない男って　三田市　上田ひとみ
アメージング静かに弾いている祈り　松山市　栗田　忠士
瞑想をしているように弾くビオラ　豊中市　貝塚　正子
百歳が左手で弾くブラームス　今治市　永井　松柏
ときめきが老いを弾いてレモンティー　河内長野市　辻村　ヒロ
湯を弾く肌にウフフフまだ若い　貝塚市　石田ひろ子
転換期いつも弾いてるダダダダン　箕面市　広島　巴子
自爆して夢が飛び散る鳳仙花　三田市　谷口　修平
弾かれた人に寄り添う強い人　大阪市　樋口　眞

「弾く」　古今堂蕉子選

屈折の心出された手を弾く　鳥取県　門村　幸子
三味線を弾いて相手を油断さす　河内長野市　黒岩　靖博
そろばんが弾く残高と余命　大阪市　津村志華子
ウクレレもギターもすぐに諦めた　米子市　成田　雨奇
細胞がパチパチ弾く孫元気　河内長野市　梶原　弘光
新コロナ弾き飛ばしてさあ五輪　三田市　大西　重男
マル禁の性に弾丸シュートする　笠岡市　藤井　智史
ラ・カンパネラ意地でマスター海苔漁師　大阪市　宮本千恵子
置き去りの里の納戸のバイオリン　三田市　足立つな子
ギター弾く路上哀歌に時預け　和歌山市　倉橋　悦子
爪弾きしたいが金を持っている　米子市　竹村紀の治
自爆して夢が飛び散る鳳仙花　三田市　谷口　修平
ピアノ弾く同じ所で又ずれる　高槻市　富田　保子
ああ昭和木村好夫のギター聴く　宝塚市　丸山　孔一

一発で仕留めたらしい銃の音　阿南市　小畑　定弘
ピアノ弾く指が宇宙を醸しだす　弘前市　福士　慕情
「ポッポッポ」蝌蚪を頼り弾く　大阪市　東　敏郎
気が弾むやはり聞きたい触れ太鼓　奈良県　長谷川崇明
この指はショパンを弾いたことがない　上尾市　中村　伸子
備長炭極上の音で弾ける　鳥取市　前田　楓花
ウイルスを弾くマスクが欲しいんだ　八尾市　村上ミツ子
ハイジャンプ地球にバネがある如く　南あわじ市　萩原　弘一
ギタリスト足の組みかた少し気障　堺　市　奥　時雄
ストレスの弾ける音か耳が鳴る　美作市　岡本　余光
二枚舌弾く言葉が泡になる　和歌山市　まつもともとこ
滴ぽたぽた愛の讃歌を弾き終えて　岡山市　永見　心咲
上弦の月が爪弾くセレナーデ　岐阜県　喜多村正儀
様子まで見えて来そうな琴の音　唐津市　坂本　蜂朗
たんぽぽの綿毛弾けるいい日和　和歌山県　森下よりこ
青春のトレモロ弾くマンドリン　豊中市　松尾美智代
あんなにも激しい曲に細い指　犬山市　関本かつ子
太棹に乗る近松の情死行　札幌市　三浦　強一
気に食わぬ同士が弾くSとN　明石市　糀谷　和郎
恍惚の顔で弾いてるバイオリン　尼崎市　藤井　宏造
押し競饅頭弾かれたまま宇宙ゴミ　鳥取市　福西　茶子
セロ弾きのゴーシュが弾いたアンダンテ　鳥取県　竹信　照彦

蓮の花弾けるような音で咲き　唐津市　山口　高明
損得のそろばん弾く癖がある　三原市　鴨田　昭紀
駅ピアノコロナは回り道をする　倉吉市　牧野　芳光
民主化へストレスの種弾け飛ぶ　河内長野市　中島　一彌
裏話弾けて進む芋焼酎　神戸市　槇田　次郎
弓を弾く姿勢に喜びの袴　京都市　都倉　求芽
お弾きを語って老いのサンルーム　富田林市　山野　寿之
弾かれた小石まもなく光りだす　宮崎県　黒木　栄子
弾かれて平気野菜の規格外　海南市　小谷　小雪
ビオロンになったあなたのふところで　橿原市　居谷真理子
ビー玉を弾き昭和にワープする　浜松市　中田　尚
断らぬ女を弾く週刊誌　横浜市　加藤　佳子
三線を弾けばハブをも踊らせる　三田市　村田　博
ストレスの弾ける音か耳が鳴る　美作市　岡本　余光
盲目のピアノ辻井は神の技　大阪市　岩崎　公誠
できる奴たちまち弾く村社会　東大阪市　秀爷
駅ピアノあしたの夢を乗せて弾く　羽曳野市　吉村久仁雄
弾く人の周り和ます駅ピアノ　奈良県　長谷川崇明
弾く人の来し方滲む駅ピアノ　堺　市　柿花　和夫
爪弾きの古賀メロディーに溶かされる　丹波篠山市　酒井　健二
さっさと弾こう金バッジの不良品　羽曳野市　徳山みつこ
パチンコの釘堂々と邪魔をする　三原市　笹重　耕三

ひとり部屋ショパンを弾いている自粛　寝屋川市　伊達　郁夫
爪弾けばつい口遊む赤とんぼ　東大阪市　佐々木満作
地獄の入り口で弾くピンボール　安来市　原　徳利
ジャパネット声量弾くコマーシャル　三田市　幸田　厚子
飽きもせずブルース・コード弾いている　弘前市　髙瀬　霜石
弾かれて闘志もやしたニラの花　大阪市　折田あきこ
聞き分ける弾ける音に餃子待つ　芦屋市　新阜　義明
春疾風売れぬ更地の弾き語り　大阪府　髙木　道子
弾かれるあたりにいつも居るわたし　香芝市　大内　朝子
ビオロンになったあなたのふところで　橿原市　居谷真理子
ビー玉を弾き昭和にワープする　浜松市　中田　尚
情熱のギターカルメンの乱舞　奈良県　中原比呂志
連弾のとなりに君はもういない　黒石市　北山まみどり
この世からあの川辺まで琵琶を弾く　生駒市　餐庭　風鈴
三味線を弾いて相手を油断さす　河内長野市　黒岩　靖博
寂しさを紛らす為に弾くギター　三田市　多田　雅尚
プライドを弾かれ土俵から落ちる　枚方市　栃尾　奏子
何弾こかなレパートリーは五曲だけ　長岡京市　山田　葉子
ポップコーン弾け輝く聖五月　堺　市　澤井　敏治
悲しい酒爪弾くだけで泣けてくる　尾道市　小川　道子
弾かれた種の無念を聞いてやる　弘前市　稲見　則彦
昔むかし郁恵にしのぶ弾けてた　大阪市　江島谷勝弘
弾かれないようにしがみついている　藤井寺市　太田扶美代

ユニホーム健闘たたえ汗が飛ぶ　河内長野市　坂野　澄子
好きな人と心の弦を弾く夜長　豊中市　藤井　則彦
偏差値で弾かれてゆく塾の椅子　横浜市　川島　良子
爺ちゃんのお経のような弾き語り　河内長野市　藤塚　克三
核禁止被爆ピアノが訴える　川西市　大坪　一徳
乙女の祈り弾けてピアノは止めました　松山市　宮尾みのり
被災地にエールを送る弾き語り　東大阪市　佐々木満作
固いこと言うのでいつもつま弾き　堺　市　村上　玄也
弾かれて反骨磨く鯉のぼり　大阪市　内田志津子
濁流に弾けた力人助け　大阪市　榎本　舞夢
一発で仕留めたらしい銃の音　阿南市　小畑　定弘
カタカナ語弾き出された疎外感　豊橋市　西郷紀美代
ソロバンを弾くふりしてから値引き　豊中市　水野　黒兎
エアーギター弾いてる人が弾けてる　富士見市　中島　通則
連弾のとなりに君はもういない　黒石市　北山まみどり
決断の後は聴けない娘のピアノ　西宮市　福島　弘子
少数を弾き飛ばして即可決　犬山市　関本かつ子
プライドを弾かれ土俵から落ちる　枚方市　栃尾　奏子
出来ちゃった!!絵文字弾ける娘のメール　三田市　稲角　優子
いいご時世ピアノ弾く孫飢え知らず　大阪市　宮﨑シマ子
ソソソミーと弾けば運命落ちてくる　鳥取県　斉尾くにこ
弾かれて闘志もやしたニラの花　大阪市　折田あきこ
爪弾きされてもボスにしがみつく　鳥取市　吉田　弘子

指パッチン鳴らしてやる気あるらしい　鳥取市　倉益　一瑤
スプリングコート弾ける皮下脂肪　大阪市　津守　柳伸
口三味線チントンシャンと弾く音色　香南市　桑名　孝雄
弾くよりも鍵盤叩く腹の虫　池田市　奥園　敏昭
油ではないが水でもない二人　佐賀県　真島久美子
出来ちゃった!!絵文字弾ける娘のメール　三田市　稲角　優子
夕焼けが弾くサンド・オブ・サイレンス　鳥取県　斉尾くにこ
三味線を弾いては煙に巻く桂馬　高槻市　初代　正彦
若い妻もらい弾ける元夫　豊中市　きとうみつこ
ウクレレの夕日とコラボフラダンス　沖縄県　宮　すみれ
農休日お琴を弾いてお公家様　加西市　山端なつみ
禁じられた遊び弾きたくギター買う　京都市　清水　英旺
鍛えていますデコピンのパンチ力　米子市　竹村紀の治
弾かれた正論宙であかんべえ　大阪市　石田　孝純
偏差値で弾かれてゆく塾の椅子　横浜市　川島　良子
パチンコの釘堂々と邪魔をする　三原市　笹重　耕三
ウクレレもギターもすぐに諦めた　米子市　成田　雨奇
ダダダダーン腹の底まで聴いている　和歌山市　柏原　夕胡

秀　句

弦のないギター爪弾く反戦歌　大阪市　平井美智子
バイオリン弾けたら金持ちに見える　枚方市　藤田　武人
音大出の指でパートのパンを捏ね　松山市　宮尾みのり

瞑想をしているように弾くビオラ　豊中市　貝塚　正子
頑張って作句しいつも弾かれる　東大阪市　北村　賢子
吾が妻が女にもどる琴を弾く　大阪市　大治　重信
バイオリン弾けたら金持ちに見える　枚方市　藤田　武人
トレモロに魅せられギター弾きだした　三田市　九村　義徳
受話器からほかほかパパの弾む声　奈良市　高橋　敬子
孫と遊ぶ弾けるような妻の声　大阪市　平賀　国和
弾かれるこれもこの世の御縁かと　土佐清水市　辻内　次根
御弾きにあやとり腕にダッコちゃん　鳥取市　加藤　茶人
弾かれて甘く変身苺ジャム　河内長野市　落葉　ふみ
空しさを弾き飛ばした青い空　奈良県　渡辺　富子
鍵盤で十指が弾む無我の境　明石市　瀬島流れ星
油ではないが水でもない二人　佐賀県　真島久美子
弾かれてホントの孤独知りました　松江市　相見　柳歩
心の糸弾けて知った人の情　米子市　伊塚美枝子
麦の芽が弾けて春が迸る　大阪市　平井美智子
音外すピアノ肴に酌むお酒　唐津市　前田　廣幸
菜の花のツンツン弾きたい黄色　奈良市　大久保真澄

秀　句

諍いを諭す竪琴ビルマから　神戸市　山﨑　武彦
打開策見付け陽気なピチカート　奈良県　中原比呂志
吹き抜けた風呼び戻す駅ピアノ　岐阜県　喜多村正儀

「まるい」

（投句　２３２名）

栗田忠士選

まるい背立派に五人育て上げ　池田市　奥園　敏昭
「ありがとう」のひと言心丸くする　寝屋川市　川本　信子
杉玉を吊って新酒の出来上がり　倉吉市　牧野　芳光
円満の秘訣聞かれて苦笑い　河内長野市　藤塚　克三
まんまるいお世辞シャックリ止まらない　富田林市　片岡智恵子
まんまるくなって見ぬふり聞かぬふり　橿原市　居谷真理子
四角形ただ今丸くなる途中　岡山県　藤澤　照代
お互いさまその一言で座が丸い　黒石市　石澤はる子
日の丸が歪になった過去がある　大阪市　平賀　国和
丸めればボクの一生コンマ以下　富山市　伴　よしお
円卓の会議が遠いディスタンス　横浜市　加藤　佳子
消しゴムがまるくなっても出ぬ答え　大阪市　小野　雅美
忖度が過ぎて歪な丸になる　河内長野市　穂口　正子
スクープは書けぬペン先の丸さ　黒石市　北山まみどり
丸い石だけでは城を築けない　今治市　永井　松柏
丸洗いしたいコロナもわたくしも　神戸市　山崎　武彦
ビー玉が転がりだした安普請　弘前市　福士　慕情
我慢する人がいるから輪がまるい　越谷市　久保田千代
閉じ籠もるカレンダーには丸が無い　豊中市　松尾美智代
棘のある言葉ジョークで丸くする　貝塚市　石田ひろ子
嘘少し混ぜて話をまるくする　大阪市　柴本ばっは
ニンゲンは新参者である地球　弘前市　高瀬　霜石
過去のこと今は問わない丸い石　明石市　糀谷　和郎
今日のこと丸めてポイと洗濯機　八幡市　武田　悦寛
納得のゆくまで地球儀を回す　西予市　黒田　茂代
ふるさとはいつでも僕にまんまるい　寝屋川市　廣田　和織
丸呑みの言葉戻している夜更け　羽曳野市　藤原　大子
夫と居て大阪弁がまんまるい　藤井寺市　太田扶美代
ばあちゃんは花丸くれるデイが好き　神戸市　能勢　利子
分身の影の背中も丸くなる　松山市　柳田かおる
真円へ円周率の旅無限　明石市　瀬島流れ星
あの人が丸くなったらもう終り　上尾市　中村　伸子

佳句

なにもかも丸くて嘘っぽい手紙　佐賀県　真島久美子
だんごむしこわがらなくていいんだよ　岡山市　丹下　凱夫
わきまえて丸く暮らした休火山　河内長野市　落葉　ふみ
ささくれた心にまるいおかあの手　河内長野市　板野　澄子
そっと手を触れてやさしくなる檸檬　土佐清水市　辻内　次根

人

これ以上まるくなったら壊れます　富田林市　中村　恵

地

ＯＫは出ても戻れぬ悪夢の地　犬山市　金子美千代

天

皆許す水平線に日が沈む　犬山市　関本かつ子

軸

まん丸の夢は捨てない楕円形

「髪」

（投句　236名）

松尾　美智代　選

冬はニット夏はパナマで隠す髪　河内長野市　中島　一彌
結い上げて大和撫子匂い立つ　海南市　小谷　小雪
髪染めてわたしを変えるひとり旅　貝塚市　石田ひろ子
ひしひしとヒタイが広くなってきた　大阪市　江島谷勝弘
芳しい妻のさらさら洗い髪　神戸市　松倉　正美
髪一本下さいと言う科捜研　大阪市　石田　孝純
少しだけ淑女になれた美容室　大阪市　小野　雅美
髪が伸び染めて隠した歳覗く　奈良市　宇賀　史郎
シャンプーの香りオンナの核兵器　佐賀県　真島久美子
気をつけて残り少ない髪を梳く　藤井寺市　鈴木いさお
春が来て白髪の決意また揺らぐ　米子市　後藤美恵子
黒髪のウイッグ飛ばす春あらし　堺　市　澤井　敏治
白髪染め止め本物の齢になる　大阪市　古今堂蕉子
まだ少し女でいたい乱れ髪　羽曳野市　徳山みつこ
仲間みな微妙に違うハゲ具合　弘前市　高瀬　霜石
ぬばたまの艶に若き日の黒髪　熊本市　杉野　羅天
春ですねポニーテールがよく弾む　神戸市　山崎　武彦
桃割れに結った思い出一度だけ　大阪市　宮崎シマ子
産声の髪の先までＤＮＡ　津山市　髙橋由紀女
巣ごもりに与謝野晶子のみだれ髪　西宮市　高橋千賀子

ぽやぽやの赤子の髪に春の風　生駒市　饗庭　風鈴
髪の量を目で比べ合うクラス会　豊中市　藤井　則彦
いたずらな風がゆさぶるヘアピース　芦屋市　竹山千賀子
ビートルズ真似て伸ばした過去がある　弘前市　稲見　則彦
卒寿まだ胸熱く読む「みだれ髪」　札幌市　三浦　強一
髪白くなって気持ちも素に戻る　豊中市　池田　純子
髪と爪伸びて元気のバロメーター　河内長野市　木見谷孝代
髪切った私に誰も気づかない　堺　市　今井万紗子
ポリシーは髪を染めないだけのこと　大阪市　岩崎　玲子
ウィッグでゆく決めて心が軽くなり　西宮市　緒方美津子
揺れる髪ちょっと見せたいイヤリング　高槻市　島田千鶴子
言い勝った悔いと一緒に洗う髪　大阪市　平井美智子

佳　句

ショートカット近づく春をお出迎え　藤井寺市　太田扶美代
さらさらの黒髪キラリ天使の輪　大阪市　宇都満知子
細い細い髪の毛なれどいとしくて　大阪市　笠嶋　恵美
さよならへ止めようもない木の葉髪　香芝市　大内　朝子
散髪で今日一日の男前　弘前市　福士　慕情

人

髪取り乱し生きてきた終戦後　枚方市　谷　英也

地

ヘアドネーション誰かの役に立って欲し　大阪市　磯島福貴子

天

労りの言葉が増えた共白髪　三田市　谷口　修平

軸

髪染めて今年も逢いに行くさくら

初しぐれ教室

題 ― 芸

高瀬霜石

これを書いているのが、2月の下旬。ワクチンの接種が始まったが、さて、全国民にいき渡るのは？ 老害（自分で言った）の森会長が辞任して、森の操り人形女性2体が要職に就いた。五輪の行方は、さて？

①いつものように、まずは上と下を入れ替えてみる。入れ替えた方が、よりドラマチックになり、落ちも付くから。

（▼は原句。▽は参考句）

▼年男牛を演じた寝正月　通則
　僕も年男。だから、ここは、下五に年男。
▽寝正月牛を演じた年男
▼玉三郎芸の域をこえた舞　マユミ
▽芸の域越えた玉三郎の舞
▼マニキュアの毛糸編みする細い指　一平
▽毛糸編みするマニキュアの細い指
▼まだ踊る八十爺は芸達者　嘉昭
　入れ替えた方が、よりドラマチックに。
▽芸達者八十爺はまだ踊る
▼芸能会週刊誌とは縁切れず　風露
　ここからの3句は、上が重くなっても…
▽週刊誌とは縁の切れない芸能界
▼今年こそ家庭菜園やってみる　崇史
　これでいいのだが、今は時節柄。
▽家庭菜園挑戦します今年こそ
▼玉すだれさばき損ねも芸のうち　(澤)良子
▽さばき損ねも芸のうちです玉すだれ

②不要な言葉を（ダブっている語も）カットして、シンプルに。さすれば、より伝達力が増す（と、僕は思う）。

▼芸はないけれどかわいいエクボある　くみ子
　エクボは可愛いに決まっているじゃんか。
▽芸はないけれどエクボがふたつある
▼気をつかいお世辞笑わせ疲れ切る　弘
　なんともお気の毒。整理しましょう。
▽笑わせてお世辞も言って疲れきる
▼見飽きても上司の十八番よいしょする　胡坐
　面白いけど、なんともリズムがねえ。
▽見飽きてもよいしょ　上司の十八番
▼歌ひとつ唄えぬ無芸出世せず　光雄
　光雄さんの意にそわないだろうが、ここはあえて大袈裟にしてみよう。
▽無芸大食出世に遠い道にいる
▼マイライフ「無芸大食」役立たず　のりひろ
　いくらなんでも「役立たず」は言い過ぎ。
▽無芸大食貫き通すマイライフ
▼歌舞伎役者のあの顔芸は文化財　一弥
▼画面ドアップ耐える顔芸あっぱれだ　一弥
　半沢直樹ですね。僕も楽しく観ましたよ。
　ここは、あえて2句をミックスしてみたい。
▽画面ドアップ歌舞伎役者の顔の芸
▼ほめられて自信の腕が芸の神　ミヨノ
▽褒められて自信がついて芸の域
▼どじょうすくい十八番の得意芸　えい子
　「十八番」と「得意芸」は、言葉のダブリ。
　それはそうと、えい子さんの芸見てみたい。
▽十八番のどじょうすくいをお見せする
▼生き甲斐の川柳詠んで芸磨く　ひでお
　ひでおさん、ゴメン。もっとシンプルに。
▽川柳を詠んではわたくしを磨く
▼年金で険しく生きる芸を持ち　千賀子
　これはこれでOKだけど、あとひとひねり。
▽年金で険しく生きる　これも芸

▼言い訳も議員にとれば芸の内　(樫)良　子
自民党を離党せざるをえなくなった、あの銀座の3馬鹿トリオなど、腹立つよなあ。だから、ここは、もっとたたみかけたい。
▽言い訳も芸のうちです議員です

③もっと適切な言葉はないのか。助詞の1字、ほんの1単語を入れ替えるだけで、句のおもむきがガラリと変わる（と、僕は思う）。
▼腹芸の見事さすがに年の功　(二)千　代
これはこれでOKだが、でも、1字変えるだけで、「年の功」が見事に光り出すのだ。
▽腹芸は見事さすがに年の功
▼八十路でも踊り忘れぬこま回し　勝　正
ここは、句の中に自分をしっかり入れたい。
▽八十路でも踊り忘れぬぼくは独楽
▼咲く花も枯れる紅葉も芸術家　(森)廣　子
きれいな句。「咲く」の対比は「枯れる」もいいが、やっぱり「散る」を使いたい。
▽咲く花も散る病葉も芸術家
▼芸に泣き芸を磨いて芸を売る　照　枝
柳界広しと言えど、高瀬はそう居ない。照枝さんの名字は高瀬。というわけで、これからもよろしく。この句、これはこれで事実だろうけれども、「芸を売る」よりは、
▽芸に泣き芸を磨いて芸を知る
孔子様の言葉だったか「それを知る者はそれを好む者に如かず、それを好む者はそれを楽しむ者に如かず」。だから、まずは「知る」が、その道の第一歩なのだろう。

（○は佳句。◎は優秀句）

○芸名を変えた途端にヒットする　眞智子
なるほど。五木ひろしのことですね。
○年金の暮らしもいつか芸となり　不二夫
○お手だけで拍手喝采 パパとママ　双　葉
○大袈裟にとぼける振りも芸のうち　(川)信　子
○学芸会主役を張った頃が華　令位子
○芸のないタレントばかりテレビ切る　秀　爺
「消す」でもよかったろうに、それよりもっと強い言葉にしたところが、作者の憤り。
○若かった尻尾も振った芸もした　次　郎
◎上司より先にカラオケ歌えない　尚
◎お遊戯会突っ立っている孫がいる　厚　江
沢山の孫の句を代表しての1句。
今月の卒業者は、今までの最多の3人。まずは、大阪市の近藤風羅さん。風羅さんの魅力は、ユーモア句。是非、この道を貫いて行って欲しいものだ。
○見えそうで見えないそこが芸の胆　風　羅
一読、ストリップのことかと。朱夏編集長、風羅さん、ごめんなさい。この手の芸人、いるいる。下手すると下品な句になりかねないところを、その一歩手前で辛うじて止めた。これも風羅さんの芸。
○すねている上目遣いも芸のうち　風　羅
○芸人と芸術家との境どこ　風　羅
次も大阪市の岡田恵子さん。恵子さんは字がきれい。このこと、11号月に書いたのでご再見下さい。恵子さんはフツーのことをフツーに書く。これって、実は結構まとめ方が難しいのだが、そこがとてもお上手。
○老人会我も我もと芸達者　恵　子
○大食も芸のうちよと美女の口　恵　子
○美容院で仕入れたタレントの不倫　恵　子
3人目は、豊中市の貝塚正子さん。視点が面白い。3句目などはその真骨頂。
△右左お手だけですがポチの芸　(貝)正　子
この句は平凡だが、次の2句で盛り返した。
◎派手な衣装張りこみましたかくし芸　(貝)正　子
◎鉛筆を芸術的に削ります　(貝)正　子
どんな削り方なのか。是非見てみたい。

川柳塔鑑賞

同人吟　木田比呂朗
―4月号から

新しい常識としてグータッチ
斉尾くにこ

感染症拡大の防止から、相手へ親しみを込めた握手をはじめとしたボディタッチは、ほぼ出来なくなりました。今後は拳と拳のかるいグータッチなどによる新しい生活様式に変えなければ。

八十を消化試合にするまいぞ
山田耕治

現在はもう人生は一〇〇年時代になります。これからの二十年間をプロ野球の順位確定後に行う消化試合のようなどとは、全くの論外。趣味川柳もあり、まだまだ有意義でなければなりません。

レジ袋買わず大根持たされる
内藤憲彦

レジ袋有料化のしわ寄せが、思わぬ所で顔を出しました。しかし、奥様へのサービスとプラごみ対策への貢献？を考えれば、我慢できます。

ワルツからチークへ浮かれだすお酒
笹重耕三

お酒の席でのダンスなら奥様以外のお相手かと。あまり雰囲気に流されないようブレーキも必要ですね。

かみ合わぬ話楽しむ老夫婦
吉村久仁雄

時として意見の違いも生じます。そこは長年連れ添った夫婦、阿吽の呼吸で後には引きません。穏やかな日常生活は長寿の秘訣かも。

普段着の顔はあなたにしか見せぬ
鴨田昭紀

他人と接する時には余所行きの顔になりますが、着飾らない普段着の顔を見せるのは、ご主人一人でいいのでは。

まだあった女性蔑視と言う根っこ
大内朝子

世間を騒がせた例の発言。不要な根っこは早く取り去らなければ。

コーヒーはブラック酎はストレート
早川遡行

コーヒーのブラック、焼酎のストレートでそれぞれ本来の味が楽しめます。しかし、カフェイン、アルコールも摂取量が多くなると、身体には有害。適量の管理も生じます。

春ですね球児の元気また観れる
川端一歩

「春はセンバツから」のキャッチフレーズで行われる春の甲子園大会。二年ぶりに開催された高校野球。球児の溌剌としたプレーから、元気を貰えました。

予備校の広告塔は合格者
太田省三

予備校の生徒募集の広告をみると必ず、有名校合格者の写真入りの名前が並んでいます。広告塔にされた合格者は誇らしくもある反面、少し恥ずかしさもありそうです。

ファッションの一部となりしマスクかな
安田忠子

街を行くマスクにも、手作りのとてもお洒落なものも見かけ、ファッションとして溶け込んでいると感心します。

スーパーで現金ですかと念押され

吉田　喜代子

カード決済が大勢の昨今、レジでの現金決済の手数を考えると、このようになるのかも。現金では中八になりますが、キャッシュだと片仮名つづきになるので敢えて漢字にして読み方は任せたとも、受け取れます。

自粛中で上がる電気と電話代

出口　セツ子

長時間のテレビや照明、暖房器具の使用、長電話など自粛による家計費も嵩みます。でも、もう少しの辛抱。

あと一歩足りぬと笑う万歩計

上田　和宏

帰宅して歩数計を確認すると目標値に僅かに届いていない、大概はそのままで追加はしません。でも、そのことが頭から離れず何か一日中やり残しがあるようで、落ち着きませんね。

ウイルスもモデルチェンジで強くなる

斎藤　隆沼

普通行われるモデルチェンジは旧型よりも改良・改善されますが、ウイルスの新型だけは御免被ります。

カップ麺にカニ缶付ける妻の留守

山﨑　武彦

簡単に済ますはずの留守番どきの食事ですが、カニ缶がでたのでは、もしかしてお口汚し程度の液体もあったことは、容易に想像つきます。

夫よりもペットと話よく弾む

福田　好文

ペットと、仲睦まじく過ごされている奥様の様子が気に掛かるようですが、どうでしょう、負けずにプッシュされては。

床屋さんの腕試される薄い髪

大久保　眞澄

頭髪が薄くなると誰でも気になります。その状態を如何にカバーするか、床屋さんも大変です。

断捨離の山から拾う赤い服

奥田　由美

まだ処分しなくてよかったですね。これからもきっと赤い勝負服の出番は来る筈ですから。

郵便箱磨き合格待つ親子

田賀　八千代

ホコリをきれいに払われて、結果を待ってる郵便受け。きっと合格です。

生酔いのまま居酒屋の午後八時

竹村　紀の治

お勤め帰りのサラリーマン諸氏にとっては中途半端な時間。ただこれからのコロナとのつき合い方によっては、以前のような状態には戻らないことも考えられます。

美容整形先祖の顔が消えていく

山下　節子

美しくもなりたい、自分らしさも失いたくない、となれば両立は大変むずかしくなります。

わたくしの涙は読めぬバーコード

工藤　千代子

流通過程で商品の情報管理等で活用されているバーコード。もし、喜怒哀楽など人間の感情もデータ化されて、簡単に読み取れるようになったら怖いですね。

国会を今日も動かす週刊誌

小沢　淳

安倍内閣から引きつづき週刊誌の話題の記事が発端となって、国会の審議が行われることも多く、文春砲などと囃されています。しかし、記事が問題提起しているのも紛れもない事実です。

水煙抄鑑賞

―4月号から

川﨑　ひかり

かすがいになるし喧嘩の種になる

岩口　のぞみ

子供の教育育児等意見の相違で夫婦喧嘩勃発。それもこれも子供への慈愛親心です。老いた今思うに子供第一のあの頃が人生の華の時期でした。

ちょっとしたゆとりをくれる年金日

藤原　久直

ちょっとしたゆとりではありません。生活全てを年金に握られています。若い頃は年金なんて頭に無かった。もし年金が止まったら…恐怖です。

さておいて人間とはと考える

尾畑　なを江

お答え出ましたか？　人間が問う永遠の謎です。まさに？　です。十人十色の考え方、どれが正しくてまた間違っているのか誰にも解らない謎です。

昨日とは何かが違う老いの日々

石澤　はる子

日々新たなり。昨日とは違うと思う日々を感じてるはる子さんは、きっと前向きに生きていらっしゃる人でしょうね。

骨太の指がすべてを語る人

喜多村　正儀

骨太の人の指って何か信頼出来ます。自分の手で人生を切り開き、骨身に刻んできた人って説得力があります。

救急車呼ぶときのため身綺麗に

みぎわ　はな

同感です。老いの身、何時何ん時のためにと部屋を片づけ、清潔な物を身につける事に気を配っている昨今です。

キュンと来る事もないけど日々楽し

山根　邦代

楽しく生きていたらきっと胸キュンに出合えます。心の楽しさは若さと長寿の秘訣ですって。

やさしさはマスクしてても目でわかる

永見　安子

マスクでクローズアップされる目。「♪君の瞳は一万ボルト」。目は口ほどに否それ以上にものを言いますよ。

そう言えば補充してない化粧品

田桑　恵子

去年からのマスク生活。マスクさえしていれば外出可。化粧品一向に減りません。コロナで生活が一変しましたね。

返上が新車にするか迷う喜寿

小松　くみ子

七十七歳免許証返上するには若いし、新車買い十年乗って八十七歳…微妙。

墓じまいどこに行きます仏さま

太田　としお

私の住む田舎でも墓じまい無縁墓が多くなっています。ご先祖様は何処へ行かれるのでしょう。千の風に乗って世界を流浪されるのでしょうか？

一個買う自分の為のチョコレート

高橋　千賀子

私も何か買う時はご褒美にと自分用のを買う事にしています。

あれも駄目これも駄目なら大掃除

倉橋　悦子

自粛生活の日々。隅から隅まで磨き上げた大掃除。気分爽快！

茶柱に嫉妬しているティーバッグ

郷田　みや

茶柱に嫉妬の表現がステキ!!

125 お酒いろいろ（3）

昭和43年にリリースされた山谷ブルース（作詞・作曲　岡林信康）の出だしは「♪今日の仕事はつらかった～　あとは焼酎あおるだけ～」というものです。このように50年ほど前の焼酎は、労働者があおる安酒というイメージでした。

しかし、現在では「缶酎ハイ」など、自販機でも購入出来て手軽に飲める飲料として若者にもモテています。

久しぶり芋焼酎に酔い痴れる　塩満　敏
古稀過ぎて芋焼酎の味を知る　宇都宮ちづる
焼酎は芋派　泣かない木綿針　平井美智子
焼酎はイモソバコメの順に好き　植竹　団扇
唐芋の出世頭に森伊蔵　松本　清展
とりあえず芋焼酎はお湯で割る　長谷川博子
焼酎のお湯割り文化遺産だよ　寺川　弘一
焼酎が飲めるありがた～い時間　丹下　凱夫

ひと昔前の芋焼酎は独特の臭いがきつくて親しみにくいものでしたが、最近のは湯割りにすると馥郁とした香りで、飲みやすくなり女性のファンも多くなりました。

焼酎の原料は芋・麦・米・蕎麦などですが、売れ筋は芋焼酎。中でも「森伊蔵」は鹿児島が誇るブランドで通販などでは2万～3万円（一升）のプレミアムがついています。

百歳を目指す男の麦焼酎　橋本　整
「いいちこ」の意味も知らずに飲んでいる　北田ただよし
笑ってるお湯割りは梅大五郎　むらのひとり
焼酎と饅頭囲む老人会　田邊　浩三
健康茶焼酎割りで飲んでいる　森中　博一
鍋奉行焼酎奉行兼務する　太秦　三猿
焼酎で殺菌しても風邪はひく　山口　光久

麦焼酎の代表と言えば大分の「いいちこ」です。その「いいちこ」は大分県の方言で「良い」「いいです」とのこと。意味など知らずに愛飲している人も多いことでしょう。

また、糖質・プリンタ体ゼロが売りの「大五郎」は、クセのない味わいで果実酒や薬用酒などにも使われています。

焼酎のオンザロックで国防論　仁部　四郎
真冬日も真夏も焼酎はロック　平尾　正人
人吉のロック花舞う人躍る　隠岐耕四郎
逆転も晩成もなく缶チューハイ　渡辺　富子
十五夜へ缶酎ハイを分け合って　鈴木　厚子
酎ハイで女もほぐす肩の凝り　太田紀伊子
缶チューハイ二個でいつもの癖が出る　武本　碧
路地の奥チューハイを飲むシンデレラ　加島　由一

河島英五の「野風僧」では「♪お前が二十歳になったら～酒場で二人で飲みたいものだ　ぶっかき氷に焼酎入れて～」と歌われていますが、これが焼酎のオンザロック。

熊本の「人吉」は米焼酎のブランドですが、そのボトルには「ロックか炭酸割りがオススメです」と記されています。

このように、好みに合わせて様々な飲み方が出来るのが焼酎の強みですが、大まかに言えば、湯割りは高齢者、ロックや酎ハイなどは若者や女性に支持されているようです。

第九回　春の川柳塔まつり誌上大会

第９回春の川柳塔まつり誌上大会は新型コロナ感染症拡大の中で開催の運びとなりました。北は北海道、南は沖縄まで全国から666名ものご参加を戴きました。まことに有り難うございました。

貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご支援、ご紹介くださいました皆さまのご厚情に心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま６人の選者に送付し、選句をお願い致しました。お忙しい中をご選句戴きました選者の皆さまに深く感謝申し上げます

入選作品は各題とも平抜　１１０句、秀句　１０句、特選　２句、計　122句です。なお各題特選にはささやかですが　賞品をお送りいたしました。

各　題　特　選　句

波

野沢省悟　選

一尋の波を褥として生きる　大阪　平井美智子

波打ち際に朱いポストが立っている　北海道　嶺岸　柳舟

平井美智子　選

一の波二の波父と母である　奈良　太田のりこ

波風を立てずに生きて顔がない　福井　西谷　公造

飾る

弘兼秀子　選

春の絵で飾るおひとりさまの壁　和歌山　木本　朱夏

幸せな振りをしている飾り窓　大阪　田中　俊子

竹治ちかし　選

林住期見栄も虚飾もない暮らし　大阪　雪本　珠子

修飾語とるとのっぺらぼうのボク　愛媛　永井　松柏

自由吟

芳賀博子　選

干し大根祈りになってゆく途中　京都　河村　啓子

おみくじは中吉ワクチンの順を待つ　大阪　山本希久子

小島蘭幸　選

海が凪ぐ君が笑っただけなのに　兵庫　糀谷　和郎

転がっていった淋しい音だった　奈良　居谷真理子

波

野沢省悟選

津波の町にはや10回目春がくる　大阪　きとうこみつ
震災10年波音聞けば涙また　大阪　川端　一歩
あの黒い波が脳裏を離れない　兵庫　藤原　紘一
見たくない感染グラフ見るニュース　福島　安藤　敏彦
医者通いコロナの波を掻き分けて　島根　奥田　勝子
自粛中傷つけあって起こす波　大阪　神田　良子
内側の波の激しき白マスク　奈良　阪本きりり
波風の立たぬ夫婦のディスタンス　兵庫　米田理惠子
医療従事者激しい波と日々苦闘　大阪　水野　黒兎
コロナ禍が格差の波を際立たす　大阪　上山　堅坊
ワクチンの順番待ちに波が立つ　奈良　菱木　誠
国産のワクチンを待つ波の音　大阪　鶴田　寿子
波風を立てて五輪がやって来る　茨城　大森みち子
プラゴミにリズムが狂う波の音　広島　新庄　芳春
プラごみを運ぶ波には罪は無い　大阪　柿花　和夫
クラゲではないぞ波間のレジ袋　兵庫　山田　耕治
椰子の実に代わりプラゴミ流れ寄る　大阪　中島　一彌
広重の波を泣かせるプラのごみ　兵庫　緒方美津子
波だけが知るプラゴミの最終地　埼玉　根岸　方子
砂浜が狭くなったと嘆く波　三重　橋倉久美子
栄螺焼く一人キャンプの波の音　兵庫　江尻　房子
青空に数えきれない電波飛ぶ　大阪　太田　省三
年金の暮し波打ち際に居る　島根　荒木ひとみ
ガラケー派新語の波に溺れそう　鳥取　森山　盛桜
さざ波を大波にした週刊誌　愛媛　黒田　茂代
さざ波を津波に変えるツイッター　兵庫　梅澤　盛夫
一に自助川や池にも波が立つ　大阪　樋口　眞
同調の圧力受けている波形　京都　西山　竹里
電磁波はノー七輪で調理する　島根　田中　堂太
履歴書の性別消した時の波　大阪　原田　正士
共謀も謀反もあった波の底　愛媛　高市すみこ
ジェンダーの波に昭和が叩かれる　静岡　水品　団石
団塊の波が終章へと向かう　熊本　阪本ちえこ
顔認証さざ波連れていざ前へ　奈良　山崎夫美子
拉致された夜を忘れない波の音　奈良　米田　恭昌
民主化の波を恐れたクーデター　大阪　植野　繁子
海外のデモを茶の間で見る電波　大阪　上西　啓仁
国境はいつも波風立てている　兵庫　太田としお
散骨の未練を砕く波頭　兵庫　岸田　万彩

SNSの波に溺れている令和　大阪　鈴木　栄子
波しずかうさぎと亀が走りだす　兵庫　吉村めぐみ
スイッチオン朝の脳波に新聞紙　和歌山　石田　隆彦
マニュアルにあるさざ波の造り方　大阪　井上　一筒
まな板が干され波風立たない日　滋賀　宇野　弘子
帰宅して漸く秋波だと気づく　宮城　木田比呂朗
さざ波の内にごめんと先に言う　愛知　金子美千代
じいちゃんの吐息で動く波動砲　石川　岡本　聡
素足でした波打ち際の恋でした　愛媛　郷田　みや
変人と何故か波長が一致する　兵庫　清水久美子
縄のれんくぐると波打ち際だった　大阪　井丸　昌紀
さざ波で済んでくれよと再検査　鳥取　門村　幸子
言い勝った茶碗の底の波しぶき　大阪　中村　惠
波風が立たねば淀む池の水　兵庫　谷内　利昭
追伸の一行にある大津波　大阪　石田　孝純
うっとりと潮騒を聴く午後の猫　大阪　岸井ふさゑ
波の音知らずに老いる深海魚　大阪　金川　宣子
大波が長須鯨にプロポーズ　兵庫　生田　頼夫
波風を立てずに生きた金魚の死　兵庫　谷口　修平
さざ波を立てるレシピを知っている　愛媛　松木　慎吾
言い訳をすればする程波被る　大阪　古今堂蕉子
言い訳はしない寄せては返す波　和歌山　木本　朱夏

受け取って下さい私からの波　京都　河村　啓子
風紋に正体晒す蟻地獄　青森　辻口風来坊
波の来ぬ位置で酸素を補給する　大阪　西出　楓楽
楽しもう所詮この世に絶えぬ波　愛知　彦坂　石転
置き去りにされたのですか波に問う　大阪　坂本　星雨
春の波紋おひとり様の水溜り　北海道　阿部　桜子
なんとなく波に乗ってる引きこもり　大阪　田中　俊子
つぶやきも揃えばうねる波になる　島根　伊藤　寿美
遺産などなくてわが家の波静か　大阪　上田　陽子
波除けになれぬ男は昼の月　和歌山　西川　千鶴
菜の花の波にいっとき身を委ね　奈良　徳重美恵子
半鐘を打った女が流される　兵庫　吉田　利秋
まあまあと収めて波に攫われる　大阪　弘津秋の子
波をもつ人から離れひとり旅　三重　小河　柳女
飛び超えた波を静かに振り返る　兵庫　野口　修
日課として波打ち際に置く一輪　青森　佐藤　雅秀
まだ恋にさざ波くらい立つかしら　兵庫　西　美和子
北斎の構図を台風が真似る　千葉　江畑　哲男
今だからのたりとしたい春の海　大阪　近藤　北舟
鯖缶を開けば波の音がする　大阪　穐山　常男
まだ青春血圧高し波高し　青森　高瀬　霜石
手の砂も浜辺の恋も洗う波　栃木　鈴木三穂子

つもりではない呟きがうねり出す　静岡　佐藤　灯人
偽りの住所氏名と潮騒と　愛媛　鎌倉　俊一
潮騒のショパン奏でる大落暉　奈良　生駒さとし
カーテンを菜の花色に染めて朝　高知　浦田　裕充
わたくしの波長支えたビートルズ　愛媛　柳田かおる
波に乗りいよよ卑弥呼になってくる　奈良　小林すみえ
拳骨に見えたあの日の波頭　青森　福士　慕情
旅人になって聞いてる波の音　兵庫　敏森　廣光
立ち泳ぎしつつ旅立つ波を読む　大阪　渡辺たかき
子には子の波音があるハンバーグ　大阪　原　洋志
心電図美し今日は豆ごはん　大阪　川田由紀子
山芹を洗う手波をゆるがして　北海道　井上　サヨ
日陰などないから波も騒ぎ出す　新潟　相田　柳峰
波が着く線香花火落ちてから　長野　西沢　葉火
果てのない格差の波が繰り返す　鳥取　木天　麦青
使命ならテトラポッドになりましょう　大阪　栃尾　奏子
人間の涙でできた海だろう　大阪　中薗　清
つま先に波打ち寄せて印象派　愛知　青砥　和子
波を乗り切る一錠の痛み止め　鳥取　吉田　陽子
やわらかな波たててからワイン飲む　大阪　谷口　東風
理不尽へわざわざ寄せる白い波　兵庫　井口と志女
大波小波打ち寄せながらする介護　広島　鴨田　昭紀

しっとりと寄る年波も心地良い　大阪　藤井　則彦
体調の波に任せて暮らす日日　鳥取　山本ふみ子
さざ波も静かな破壊くり返す　兵庫　吉田　和子
来し方のどこを切っても波の音　大阪　浅井　ゆず
にんげんが去ると静まる波の音　茨城　樫村　日華

秀　句

波風を治めてくれたのは諭吉　大阪　前原　正美
大丈夫コロナの波も過去になる　東京　齊藤由紀子
ええねんこれで波打際で脇役で　大阪　久保田清美
ふらっと来てふらっと帰って行った波　大阪　谷口　義
ああこの天使もいつかは被る波　島根　藤井　寿代
波がさらったサンダル今も探してる　千葉　日下部敦世
さざなみのまま菜の花になりました　大阪　赤松ますみ
お隣の部屋から波の音がする　神奈川　相原あやめ
無垢だったあの日よ春の小波よ　大阪　森　茜
大根ゴロリ原発ゴロリ波しぶき　青森　滋野　さち

特　選

波打ち際に朱いポストが立っている　北海道　嶺岸　柳舟
一尋の波を褥として生きる　大阪　平井美智子

軸　吟

思い出し笑いが波になって春

波

平井　美智子　選

受け取って下さい私からの波　京都　河村　啓子
寝たきりの鏡に映す波の音　広島　田中　敬子
さざ波の音の聞こえる遠い耳　兵庫　野口　修
波瀾万丈生きた証の処方箋　茨城　岡　さくら
波蹴って蹴って人生まだ半ば　埼玉　久保田千代
しあわせも不幸も沖のうねりから　大阪　桑原すゞ代
踏ん張っていると良い波きっと来る　大阪　内藤　憲彦
負けん気の波が私を叱咤する　島根　尾原　米佑
菜の花の波にいっとき身を委ね　奈良　徳重美恵子
波は越えよう呑まれてはなりません　兵庫　西　美和子
取りあえず電波のとどく距離に住む　兵庫　小山　紀乃
逆らっては成らぬ波枕の亀裂　兵庫　青木　公輔
喜びの細波海構のうねり　兵庫　松下　則子
戦争の愚かと生きた父の波　大阪　高田美代子
波光る澪に散華の父眠る　宮城　菅野　實
散骨の未練を砕く波頭　兵庫　岸田　万彩
波風を覚悟で旗を振っている　和歌山　三宅　保州

決断を逆撫でするかポロロッカ　愛媛　大内せつ子
場当りの隙間を突かれ被る余波　大阪　西沢　司郎
マニュアルにあるさざ波の造り方　大阪　井上　一筒
さざ波を立てるレシピを知っている　愛媛　松木　慎吾
自己過信だんだん波が高くなる　静岡　佐藤　灯人
笑ってはおれぬいつかはかぶる波　宮城　太田　良喜
さざ波も静かな破壊くり返す　兵庫　吉田　和子
水面下波は無口なエラ呼吸　島根　加本　精一
内にいて広がる波紋気が付かず　兵庫　槇田　次郎
不整脈きょうの波形はルンバです　青森　古木　ひろ
ももいろの猫のみつめていた波だ　大阪　秋田あかり
波静かぼくががまんをしてるから　兵庫　久保木　剛
鯖缶を開けば波の音がする　大阪　穐山　常男
芋焼酎波長合わせる縄のれん　大阪　原　洋志
縄のれんくぐると波打ち際だった　大阪　井丸　昌紀
この波を越えればきっと新世界　大阪　池田　純子
夕凪が何かをそっと予見する　兵庫　生田　頼夫
内側の波の激しき白マスク　奈良　阪本きりり
正解を浚って行った君の波　兵庫　マッニーノ
トビウオの飛翔波乱はどこへやら　兵庫　冨永　恭子
波風を治めてくれたのは諭吉　大阪　前原　正美
青空を波立たせてる水たまり　愛知　三好　光明

引き返す波は未練を残さない　三重　青砥たかこ
観衆のウエーブ　立てぬまま独り　大阪　島田　明美
さざ波を枕の下に入れておく　青森　北山まみどり
病室の波が静かに引いていく　大阪　三倉　準
さざ波に抱かれる真夜中の孤独　石川　藤村　容子
廃船に寄り添う波の子守唄　岡山　工藤千代子
さざ波を聴くためだけの貝になる　愛媛　田中　なお
チャルサーと聴こえる夜の波の音　奈良　饗庭　風鈴
海凪いでためる怒涛のエネルギー　奈良　山田　順啓
お隣の部屋から波の音がする　神奈川　相原あやめ
言い勝った茶碗の底の波しぶき　大阪　中村　惠
行間に忍ばせている波の音　大阪　小原　由佳
手にのこる悪夢三角波のせい　大阪　宮井いずみ
拉致された夜を忘れない波の音　奈良　米田　恭昌
喪の帯を解いてさわさわ波になる　大阪　中川千都子
さざ波を畳んで女紅を引く　奈良　小林すみえ
半鐘を打った女が流される　兵庫　吉田　利秋
履歴書の性別消した時の波　大阪　原田　正士
春の波紋おひとり様の水溜り　北海道　阿部　桜子
忘れてた過去からの波押し寄せる　鳥取　山野すみれ
置き去りにされたのですか波に問う　大阪　坂本　星雨
西へ漕ぐ金波銀波のただ中を　奈良　居谷真理子

義理の仲波風立てず立ち泳ぎ　大阪　木見谷孝代
年老いた母の手紙の波模様　愛媛　尾崎　静山
波のない海で溺れている過保護　茨城　村野あかり
波音はマザーマザーと呼んでいる　鳥取　斉尾くにこ
母と妻三角波の中に僕　奈良　山田　恭正
大波を迎え撃ついちご大福　千葉　日下部敦世
帰宅して漸く秋波だと気づく　宮城　木田比呂朗
くされ縁波打ち際に置いてみる　兵庫　今津　美幸
乗る覚悟乗らぬ決断波しぶく　大阪　山岡冨美子
栄螺焼く一人キャンプの波の音　兵庫　江尻　房子
手の砂も浜辺の恋も洗う波　栃木　鈴木三穂子
周波数合わなくたって好きは好き　大阪　澤井　敏治
海原へいざなう石庭の砂紋　和歌山　小原　敏照
荒波をくぐりやさしい風に合う　広島　中野　妙子
さざ波が春の詩人の手帖から　和歌山　木本　朱夏
波打ち際に朱いポストが立っている　北海道　嶺岸　柳舟
波の音聞こえる母からの葉書　奈良　高田まさじ
波の下泳ぐ雑魚にもある気概　兵庫　敏森　廣光
逆転を波打ち際で狙う風　兵庫　糀谷　和郎
波に乗り沖へ漕ぎ出すでかい夢　奈良　渡辺　富子
カラフルな波押し寄せる春の海　兵庫　中岡千代美
四季の駅人間の波靴の波　大阪　山野　寿之

黄信号あたふた渡る人の波　大阪　竹原　春江
人波で泳ぎ疲れるカタカナ語　青森　福士　慕情
引くことも大事と波に教えられ　三重　戴　けいこ
故里に忘れた波が積んである　広島　岩本　笑子
農を継ぐ心を決めた青田波　新潟　塩田　悦子
ええねんこれで波打際で脇役で　大阪　久保田清美
年波を恐れず媚びず侮らず　兵庫　大矢　伸
波かぶる覚悟で筋だけは通す　大阪　荻野　浩子
荒波の隙間に潜む意地がある　大阪　大沢のり子
口先で大きな波に乗っている　大阪　川端日出夫
心は自由でいようね波浪注意報　兵庫　島村美津子
年金の暮し波打ち際に居る　島根　荒木ひとみ
さざ波を立てて元気な高齢者　鳥取　平尾　正人
まだ傘寿長寿の波にまたがろう　島根　井上　松美
大波をいくつも越えた笑い皺　広島　石原　淑子
抗いはさざ波ほどの水中花　大阪　小野　雅美
つぶやきも揃えばうねる波になる　島根　伊藤　寿美
さざ波を津波に変えるツイッター　兵庫　梅澤　盛夫
打ち寄せる音無きコロナ菌の波　広島　小川　道子
波瀾万丈五輪の船も浮き沈み　鳥取　岸本　孝子
波立てて騒いでみても池の中　兵庫　藤井　宏造
情報の波に溺れて座礁する　大阪　佐々木満作

果てのない格差の波が繰り返す　鳥取　木天　麦青
集まって下さい波を作ろうよ　和歌山　小谷　小雪
顔認証さざ波連れていざ前へ　奈良　山崎夫美子
心電図美し今日は豆ごはん　大阪　川田由紀子
ありがとう波は静かになれました　岡山　永見　心咲

秀　句

ひらひらとちょうちょ　細波立てている　大阪　夕　凪子
来し方のどこを切っても波の音　大阪　浅井　ゆず
大根ゴロリ原発ゴロリ波しぶき　青森　滋野　さち
大波に乗ると天まで欲しくなる　奈良　笹倉　良一
共謀も謀反もあった波の底　愛媛　高市すみこ
追伸の一行にある大津波　大阪　石田　孝純
ひと波を被ってからの櫓のしなり　岐阜　喜多村正儀
波を乗り切る一錠の痛み止め　鳥取　吉田　陽子
非力だが波状攻撃なら出来る　広島　山本　恵子
長寿バンザイ松竹梅の波がくる　大阪　山本希久子

特　選

波風を立てずに生きて顔がない　福井　西谷　公造
一の波二の波父と母である　奈良　太田のりこ

軸　吟

抱き合うて互いの波を探りあう

飾る

弘兼秀子選

地方紙を飾る善意の届けもの　新潟　塩田　悦子
きらきらの言葉で選挙カーが行く　兵庫　米田利惠子
飾りではないと人形まで謀叛　大阪　油谷　克己
飾らない言葉の奥にある矜持　大阪　竹中キーキー
上半身はネクタイ締めてテレワーク　岡山　小林　茂子
飾るのは心誰にも見えません　埼玉　中村　伸子
着飾ってみても手放せないマスク　東京　川本真理子
アマビエをマスクに飾り鬼退治　鳥取　新家　完司
思いっきり派手に飾ってエピローグ　大阪　石田ひろ子
終章に天晴れ一句爺飾る　宮城　太田　良喜
天も地も飾ろう自粛蹴散らせて　兵庫　野口　修
楽しげに老いた二人のひな飾り　大阪　金川　宣子
アルバムに逃げた男を飾ってる　奈良　小林　和之
想い出に陽差しを足して飾り付け　大阪　小原　由佳
虚飾みな落した冬の山が好き　島根　伊藤　寿美
金モール握って脚立から落ちた　鳥取　成田　雨奇
後悔で飾る人生にはしない　兵庫　平松　直樹

注目を浴びるダイヤが飾る指　鳥取　奥田　由美
本心が透けて見えてる修飾語　富山　伴　よしお
自粛空間にちりばめてゆく音符　大阪　赤松ますみ
見栄張りの虚飾の仮面疲れてる　大阪　荻野　浩子
電飾が自粛している夜の街　徳島　小畑　定弘
菜の花の春を飾って散らし鮨　鳥取　斉尾くにこ
着飾ってみたが落ち着かない案山子　広島　鴨田　昭紀
飾らない言葉はぐっと胸を打つ　大阪　二宮　章子
飾りなど要らぬ白地の赤い丸　島根　竹治ちかし
絶縁の墓が造花で飾られる　熊本　村上　和巳
電飾を灯しワタシを光らせる　岡山　藤井　智史
俺お前今更飾ることも無い　奈良　米田　恭昌
飾られてはほほえみ返す遺影です　鳥取　山下　節子
金屏風背負って飾りものになる　三重　橋倉久美子
身だしなみ妻の検査を受けて出る　大阪　両澤行兵衛
着飾ってアバンチュールな舞踏会　愛媛　山内　房子
この国に生れた矜持胸に持つ　大阪　水野　黒兎
盛大に飾り美談にしてしまう　兵庫　黒川佳津子
四代の暮しみてきた雛飾る　大阪　内田志津子
日常をマスクが飾る世界観　大阪　中井　佳子
着飾った孫を見せたい人は逝き　兵庫　大西　重男
全集を並べた書架の大欠伸　北海道　東　考矢

白銀の髪は老いへの飾りかも　奈良　安土　理恵
花道を飾ることなく定年日　和歌山　上田　紀子
初歩きした子が飾る一ページ　大阪　伏見　雅明
電飾が距離を稼いだ万歩計　長野　宮尾　柳泉
自分史に脚色の跡ここかしこ　北海道　三浦　強一
美しく飾る言の葉透けて見え　広島　中野　妙子
着飾ったイミテーションがよく喋る　大阪　神田　良子
過疎だけど夜空を飾る星がある　愛媛　西田美恵子
額縁はなくても春は爛漫で　京都　河村　啓子
裸木を飾りはじめた芽が動く　和歌山　北原　昭枝
思い出をいっぱい飾るわが山河　兵庫　山口ヨシエ
何げないポイント刺繍にお人柄　奈良　安福　和夫
修飾語取れば中味のない祝辞　愛知　沢田　正司
修飾語聞き飽きました胡蝶蘭　広島　村上　和子
特典と飾る言葉に嵌められる　広島　松尾　信彦
内面を磨き屈強にも勝てる　山口　中村　雀鳴
成人式飾りマスクも晴れ舞台　京都　武田　悦寛
ホームの日々を笑顔で飾る母卒寿　三重　小川はつこ
キラキラで縁取る言いにくい話　大阪　中川千都子
トロフィーのテープが褪せた飾り棚　大阪　宇都宮ちづる
飾るだけ飾った過去は万華鏡　奈良　大西　將文
参観日いつものママと違うママ　大阪　千田　祥三

釣り書きを飾る千家と未生流　大阪　正信寺尚邦
赤で飾って独りの老いをいとおしむ　奈良　居谷真理子
ご来賓まずは褒めことばで飾る　兵庫　上野多恵子
春は少女のスパンコールの胸あたり　高知　辻内　次根
花鳥風月窓辺に飾る現住所　茨城　岡　さくら
いい日だったと空いちめんの春茜　大阪　宇都満知子
積み上がる花で着飾る亡母の顔　奈良　生駒さとし
着飾った青春畳む古箪笥　岡山　高橋由紀女
数々の嘘で飾った歴史秘話　兵庫　梅澤　盛夫
山野草入れて私の焼いた壺　大阪　平松かすみ
寂しいのそんなに虚飾張っちゃって　茨城　佐瀬　貴子
凍てついた夜空を飾る北斗星　大阪　松尾美智代
着飾ってみればステキと言う鏡　島根　小林多美子
自分史を飾る言葉が見つからぬ　兵庫　谷口　修平
多色刷りのことばで熱く飾る恋　奈良　渡辺　富子
夢ひとつ飾って生きる花の束　福岡　石田　酎
いそいそと妻は蘇生のラメの服　兵庫　久保木　剛
飾り皆はずせば頼りない私　広島　山本　恵子
床の間に飾ると言われ嫁にきた　大阪　雪本　珠子
花火師の丹精の華闇飾る　北海道　井上　サヨ
簪の揺れてもてなす京舞妓　大阪　佐々木満作
チョコレート三日飾っておきました　兵庫　山田　耕治

手作りのもてなし微笑みで飾る　青森　北山まみどり
飾っても知られています素の私　兵庫　近兼　敦子
新緑のオーケストラで送る野辺　広島　田辺与志魚
花一輪置いてひとりのバースデー　大阪　松本あや子
鯖の背に飾り包丁粋に入れ　青森　古木　ひろ
自叙伝を今更飾ることは無い　大阪　太田　昭
鑑定に出して扱い変わる壺　三重　青砥たかこ
着飾って妬心の的に晒される　新潟　相田　柳峰
サイドボードに飾ったままの銘柄酒　島根　奥田　勝子
口先を飾る一語が身を崩す　岡山　杉山　静
モンローのポスターを貼る古希の部屋　青森　髙瀬　霜石
モノクロを飾る昭和の明と暗　広島　村田　幸夫
飛んでみる私を飾る羽根つけて　大阪　今井万紗子
謹呈のお礼に飾る感嘆符　愛知　三好　光明
りぼんシュルシュル私へのプレゼント　千葉　日下部敦世
メルヘンの世界になった子供部屋　静岡　中田　尚
真善美心を飾る本を読む　大阪　山野　寿之
娘らも居ず雛と独り語り合う　兵庫　みぎわはな
背伸びして飾る毎日肩が凝る　島根　増田のぼる
出色のできで飾ったデビュー作　愛知　本多　雅子
胸飾る王冠バッジ昭和っ子　大阪　中島　一彌
エンディングノート飾るリボンを買いに行く　愛媛　岡山フジエ

一面を飾る世紀の大誤報　奈良　木嶋　盛隆
目一杯飾り昔に逢いにゆく　大阪　小山惠美子
教会の十字架の上オリオン座　大阪　近藤　北舟
空しさは飾り言葉の端々に　和歌山　喜田　准一
故郷の棚田縁取る曼珠沙華　愛媛　古手川　光

秀　句

着飾って清楚な白に負けている　岐阜　武藤　敏子
四季の花飾って亡妻と会話する　大阪　上山　堅坊
見栄ひとつ纏って人間を飾る　広島　笹重　耕三
祭壇を飾る写真を選る別れ　奈良　山田　順啓
勾玉で飾る歴女は卑弥呼めく　愛媛　越智　学哲
鎮魂を込めて電飾ルミナリエ　大阪　川本　信子
師の句碑は桜吹雪の中にある　広島　小島　蘭幸
ここまでのいのちへ飾る褒め言葉　和歌山　三枝眞智子
防災グッズ飾りですまぬ日の予感　大阪　吉村久仁雄
シャンペンタワーかりそめの恋飾る夜　大阪　長尾　千賀

特　選

幸せな振りをしている飾り窓　大阪　田中　俊子
春の絵で飾るおひとりさまの壁　和歌山　木本　朱夏

軸　吟

控え目に飾る寄り添う妻として

飾る

竹治　ちかし　選

穏やかな老後でしたという見出し　大阪　竹原　春江
招き猫飾られたまま店仕舞い　大阪　久世　高鷲
お茶汲みもお飾りだっていた昭和　富山　伴　よしお
家事は拒否ネイルアートの指が言う　愛媛　花岡　順子
ベランダに満艦飾の子沢山　奈良　宇賀　史郎
着飾ってまた脱がされる色直し　福井　西谷　公造
飾らない言葉が染みる人情味　大阪　島田千鶴子
素直さに負けてしまった修飾語　北海道　東　考矢
何げないポイント刺繍にお人柄　奈良　安福　和夫
思い出を少し飾って湧くパワー　大阪　出口セツ子
薄暮の部屋花一輪のある和み　大阪　藤村　亜成
飾り気のない素朴さがすばらしい　大阪　岩崎　公誠
ふる里へ飾る錦がまだ織れぬ　大阪　正信寺尚邦
着飾って女心が風になる　沖縄　多良間典男
飾りたい時も必死の子育て期　和歌山　長谷川葉子
参観日いつものママと違うママ　大阪　千田　祥三
しばらくは動かないでと飾られる　兵庫　島村美津子

着飾って外見だけは立派です　島根　増田のぼる
床の間で花嫁人形色褪る　島根　井上　松美
お洒落して外出したいほどの春　石川　寺井　一也
居るだけで部屋が華やぐ三姉妹　和歌山　上田　紀子
百歳を飾るみんなのおめでとう　大阪　片岡　加代
思い出をいっぱい飾るわが山河　兵庫　山口ヨシヱ
イミテーションの夢を飾っている都会　大阪　坂本　星雨
過疎だけど夜空を飾る星がある　愛媛　西田美恵子
全山紅葉自然のすごさ見せつける　山口　赤川　和子
プライドを目立たぬように飾りつけ　奈良　東　さだお
飾ることなかった母の割烹着　福島　安藤　敏彦
悪役のまま有終の美を飾る　大阪　渡辺たかき
青春を飾った品が今もある　兵庫　住吉美和子
野の花を飾る器は空の色　大阪　岡本　悠
幼な子に戻りし母と雛飾る　大阪　山野　双葉
飾らないことばの持っている強さ　大阪　三好　専平
飾らないお国言葉が温かい　青森　福士　慕情
コロナ禍で今日も虚飾のミーティング　兵庫　出羽千代子
幸せな振りをしている飾り窓　大阪　田中　俊子
俺お前今更飾ることも無い　奈良　米田　恭昌
見えぬ目へ希望に充ちる絵を飾る　大阪　吉田　禮子
飾られてほっとしている雛人形　鳥取　平尾　正人

まだ女ルージュ欠かさぬ母白寿　兵庫　福田　好文
春風が飾ってくれた里の山　鳥取　木天　麦青
飾らない人柄少し物足りず　滋賀　宇野　弘子
控え目な飾りに滲み出るセンス　大阪　藤井　則彦
飾り気も無いが心も澄んでいる　鳥取　中村　金祥
飾るもの無い赤ちゃんのいい笑顔　愛知　山田　初男
わたくしを飾る苦労を知る笑顔　奈良　大内　朝子
ささやかな誇りでわたくしを飾る　大阪　太田扶美代
想い出がこぼれ落ちそう飾り棚　大阪　江見　見清
手料理で心も飾り家ごもり　島根　戸谷てる美
良い育ち飾り気ないが気も利かず　大阪　樋口　眞
片恋を飾り話せる八十路坂　鳥取　大前　安子
飾らないタンクトップの君が好き　島根　加本　精一
飾らない言葉に友の心読む　兵庫　藤井美智子
飾らずにすべて本音で生きていく　和歌山　石田　隆彦
飾り気の無い人だから愛される　兵庫　山口　光久
真心で自分を飾り生きている　大阪　上山　堅坊
飾らない田舎の風に逢いに行く　大阪　穐山　常男
飾りではないと人形まで謀叛　大阪　油谷　克己
飾り捨て耐えて春待つ冬木立　大阪　大浦　福子
初歩きした子が飾る一ページ　大阪　伏見　雅明
飾らない素材のままの君が好き　大阪　内田志津子

育ちだな飾らないのに品の良さ　奈良　長谷川崇明
着飾ってみても本音が打開する　宮崎　惠利　菊江
散り際をきれいに飾る風である　栃木　鈴木三穂子
美化されたわたしを剥いでいるところ　和歌山　たむらあきこ
数々の嘘で飾った歴史秘話　兵庫　梅澤　盛夫
自分史にちょっぴり夢を足してみる　兵庫　九村　義徳
終章を飾る二人を模索中　広島　石原　淑子
飾らずに素直に生きてきた自信　愛知　沢田　正司
飾り気がないから君に決めました　兵庫　今津　美幸
美しい人だなんにも飾らない　静岡　水品　団石
飾らないあなたが好きで一つ屋根　香川　大高　正和
控え目な化粧で素顔引き立てる　鳥取　岸本　孝子
飾らない笑顔で愛が攻めてくる　大阪　柿花　和夫
飾り気のないひと言がありがたい　岡山　宮本　信吉
美しく飾ることばが歩き出す　鳥取　西浦　小鹿
さりげなくあなたを飾る紺絣　大阪　森　茜
記念日を気付いてほしいバラの花　岡山　岩崎　幸子
花一輪飾れば君の来る予感　島根　吉川らんまん
お飾りの来賓たちがよくしゃべる　兵庫　藤原　紘一
着飾ってみても所詮は蛙の子　大阪　鈴木いさお
肩書の飾りを取ればタダの人　広島　新庄　芳春
生きるためヘンな飾りもつけている　青森　石澤はる子

飾るたびどんどん老けていく私　埼玉　久保田千代
わたくしを飾る　小さな句碑ひとつ　広島　小島　蘭幸
花道を飾るセリフがみつからぬ　島根　伊藤　玲峰
人生をロマンチックに飾る恋　兵庫　田本　古鈴
飾り気も愛想もないが温かい　島根　中島　貢
わたくしの心を飾るおもてなし　大阪　秋田あかり
飛んでみる私を飾る羽根つけて　大阪　今井万紗子
飾るものなくて裸で立っている　高知　辻内　次根
こころまで飾る言葉が見つからぬ　静岡　佐藤　灯人
外面を飾ると心寒くなる　奈良　澤山よう子
飾り物着けてごまかす淋しい日　大阪　伊藤　惠子
修飾語変えて上手に世を渡る　大阪　前原　正美
修飾語聞き飽きました胡蝶蘭　広島　村上　和子
ゴチャゴチャと飾る貧しさ見せぬよう　岡山　永見　心咲
飾り物だったんだろう通過点　兵庫　山内　迪
着飾ったイミテーションがよく喋る　大阪　神田　良子
自分史を飾る言葉が見つからぬ　兵庫　谷口　修平
顔よりも心を飾る紅を引く　三重　奥田　悦生
飾るのはやめた私を楽にする　大阪　岩佐ダン吉
飾り立て自分の顔を見失う　兵庫　奥澤洋次郎
主役より目立たぬように飾る花　京都　西山　竹里
着飾って清楚な白に負けている　岐阜　武藤　敏子

飾り気のない人と飲む旨い酒　島根　中筋　弘充
思い切り飾り大空飛んでみる　島根　多久和敬子
飾ること止めた時から楽になる　愛知　冨田　末男
春夏秋冬日本を飾る色がある　愛知　位田　仁美
自画像を飾る最後の色が無い　鳥取　田賀八千代

秀　句

飾るものいらないふたり華になる　愛知　竹内そのみ
散り際を飾るチャンスを見失う　愛媛　岡山フジヱ
わたくしを飾ると私が消える　兵庫　中岡千代美
飾らない人にいつでも負けている　大阪　西出　楓楽
飛ぶために飾りはみんな捨てました　大阪　浅井　ゆず
祭壇を飾る写真を選る別れ　奈良　山田　順啓
自分史を飾る余白が埋まらない　大阪　藤塚　克三
耐え抜いた人生飾る四コマ目　島根　田中　堂太
花束に成れぬ花でも野を飾る　島根　山根　雪代
飾りもの外し人間らしくなる　鳥取　竹村紀の治

特　選

修飾語とるとのっぺらぼうのボク　愛媛　永井　松柏
林住期見栄も虚飾もない暮らし　大阪　雪本　珠子

軸　吟

飾らない菊の御紋に見る誇り

自由吟

芳賀博子選

マチュピチュの地図を眺めて自粛中　鳥取　新家　完司
会いたい喋りたい笑いたい達磨　大阪　弘津秋の子
柔らかな語尾を忘れて冬木立　埼玉　久保田千代
不純物捏ねるとボクができあがる　青森　髙瀬　霜石
大地萌えそれでも誤解まだとけぬ　愛知　梶田　隆男
立志式祝う琴の音ボランティア　山口　赤川　和子
母の伏せ字は私だけが読める　広島　田中　敬子
早春は迷いの季節とんぼ玉　大阪　宮井いずみ
飛びついてみたいな妻に似てる雲　富山　伴　よしお
そうだ約束だった　ムスカリ芽吹く　奈良　太田のりこ
あれもこれも小さい活字読める間に　大阪　樋口　眞
写真にも子守る母の羽の影　奈良　髙橋　敬子
価値観が違ったままのシンデレラ　熊本　村上　和巳
ストライクゾーンの広い人楽し　兵庫　井本　忠
極楽にいけるお寺の檀家です　島根　大福　利彦
絵手紙にざくろわたしを爆ぜさせる　和歌山　たむらあきこ
エンディングノート見直し貼り薬　佐賀　坂本　蜂朗

嫁が来て本家明るく立ち直る　山口　中村　雀鳴
順風に慣れてひ弱い糸切り歯　奈良　笹倉　良一
充電しよう三日月が冷えている　愛媛　正岡　鏡花
富士山はデンと座っていればいい　大阪　髙田美代子
デジタル化便利が前を走り過ぎ　兵庫　九村　義徳
計画の甘さドミノが止まる場所　兵庫　黒川佳津子
旅の人と呼ばれる転勤族でした　埼玉　中村　伸子
結び目を解いた言の葉の温し　兵庫　井口と志女
春浅し訃報コトリと胸底に　愛知　佐藤ちなみ
フェイクニュース声の大きな方が勝つ　千葉　江畑　哲男
マンネリの凪へ平和とルビをふる　東京　齊藤由紀子
体操5分お経10分して元気　大阪　谷口　東風
米を研ぐ指のかたちを逃げ切れず　北海道　嶺岸　柳舟
霜柱ザクリと踏んで亡兄を抱く　福島　野地　洋子
並列で助け合ってる乾電池　兵庫　堀　正和
猫よりも長生きせねばスクワット　大阪　鈴木　栄子
ひこにゃんになる花婿の色直し　大阪　井上　一筒
紅梅がきりりと眉を上げて春　神奈川　加藤　佳子
ぼくの名がないか見ている訃報欄　福島　安藤　敏彦
パンジーの視線が責める親不孝　大阪　島田　明美
百回は入っています美人の湯　兵庫　羽奈　和子
踏んできたものの重さか足が痙る　大阪　岸井ふさゑ

ゆうべ見た夢から盗ってきた男　大阪　小原　由佳
さわれない手を振り面会が終わる　奈良　徳重美恵子
孫帰る余韻を残すパンの耳　愛知　西郷紀美代
平均の寿命に挑む雪だるま　大阪　岩崎　公誠
あれ以来亀の話はせぬ兎　島根　中筋　弘充
受け売りの夫が名医に見えてきた　大阪　大沢のり子
残された道まっすぐに雨あがる　大阪　神田　良子
口止めをされて甘みを増す果実　大阪　中川千都子
もう趣味は母さんだけと笑う父　福井　伊藤　良一
のんびりの掛り付け医と性が合う　広島　村上　和子
エアコンの温度で妻と隙間風　大阪　片山かずお
平和への遠さに悩む千羽鶴　和歌山　小原　敏照
亡母の歳数え迎えるお正月　大阪　きとうこみつ
日に一度嘘っぱちでも大笑い　兵庫　小山　紀乃
こころ旅会いたい人が居るのです　徳島　小畑　定弘
皆既月蝕なぜかお腹がすいてくる　佐賀　真島久美子
愛犬の元気について行く八十路　茨城　齋藤　松雄
笑い泣き泣き笑いして二人乗り　青森　佐藤　雅秀
ステイホームそれはごめんと鯉のぼり　奈良　山下　純子
初物の独活の五品は祖母の腕　兵庫　幸田　厚子
伏兵は眠らせておく春の宵　奈良　山崎夫美子
うんうんと頷く母を騙せない　愛媛　西田美恵子

少女の日は棒キャンディの色で溶け　大阪　長尾　千賀
海が凪ぐ君が笑っただけなのに　兵庫　糀谷　和郎
嫁ぐ子へ待ち針しつけ糸外す　大阪　正信寺尚邦
手相見てやさしい言われ不眠症　兵庫　小倉　修一
こっていも干支七周目角みがく　兵庫　久保木　剛
ゼロからのスタートマスク外せたら　兵庫　長島　敏子
金魚鉢の中で核兵器のはなし　鳥取　福西　茶子
お茶漬けを喜ぶ人と添うている　大阪　齋藤さくら
もののけを集めコロナに挑みます　奈良　阪本きりり
吹雪の中であいだみつをの手に触れる　青森　野沢　省悟
ゴソゴソと眺めるだけの一張羅　奈良　東　さだお
記念日を思い出させて夫婦箸　広島　半田　知弘
何にせよ金に関係ある話　大阪　内藤　憲彦
落日を歩けば影にけつまずき　鳥取　倉益　一瑤
黒塗りの会話すっぽり埋める雪　愛知　青砥　和子
コロナ禍に魂はまだやわらかい　兵庫　島村美津子
桜見る為に生きてるようなもの　香川　大高　正和
ワクチンが五輪大使になるらしい　兵庫　平松　直樹
よくたべて年金分は歩かねば　静岡　中田　尚
だとしても私はここに根を下ろす　大阪　大浦　福子
中退ができる聡太が羨まし　大阪　堂本　秀爷
お灯明死者と暮らしている温さ　奈良　居谷真理子

日々是好日湯を沸かす音　大阪　木見谷孝代
ふる里へ一人で帰り子に還る　岡山　市田　鶴邨
悪友と呼ばれ遺影も満足気　愛知　高浜　広川
妻のグチ二時間聞いたさぁビール　大阪　福山　理花
警察に僕の指紋はないはずだ　兵庫　藤井　宏造
補聴器メガネマスクの座る場所がない　兵庫　福田　好文
花の名を問われ思い出す初恋　愛媛　鎌倉　俊一
全盛の昔をかたる社長印　鳥取　田中　重忠
行きたいね屋台居酒屋立ち飲み屋　兵庫　村田　博
一列の練行衆も白マスク　奈良　花田　文聡
巣ごもりか呼んでも来ない鯉に餌　兵庫　田中　雅子
悲しむにも怒るにも要るエネルギー　鳥取　平尾　正人
反骨の心育ててくれた鄙　京都　西山　竹里
病む人へひとさじ思い出のすうぷ　愛媛　高市すみこ
懐にひよこのような幸を抱く　奈良　大西　將文
合掌の指やわらかに花祭　大阪　坂本　星雨
なつメロをお伴に深夜便に乗る　鳥取　山本ふみ子
福寿草戸口に出して春を待つ　島根　井上　松美
自然体になると瘡蓋とれました　愛媛　柳田かおる
金運を冬タンポポの黄に賭ける　大阪　荻野　浩子
旅立ちは藤色小紋春立つ日　大阪　山野　双葉
草餅にお臍つけたの誰ですか　鳥取　斉尾くにこ
反芻をしてます無添加の助言　岐阜　武藤　敏子
春一番そわそわしだす耕運機　石川　寺井　一也
ひとり飯やさしく沁みる花菜漬　大阪　小山惠美子
家系図の天辺にある七ヶ条　愛媛　松木　慎吾
起きなあかん生きなあかんと声に出す　兵庫　まきのあん

秀句

家出したタマはもともと山頭火　大阪　貝塚　正子
深入りを諭してくれた冬の雷　和歌山　西川　千鶴
それにしても景色も人も良い左遷　和歌山　三宅　保州
くどくどと過去は語らぬ食虫花　兵庫　槇田　次郎
危なげな立っちが出来て初節句　大阪　池田　純子
おもしろい事はまだあるイヌフグリ　大阪　川田由紀子
春を待つかたちに吊るすワンピース　和歌山　木本　朱夏
プライドをちょいと削ってもらう歯科　広島　田辺与志魚
ややこしい話はさくら咲いてから　愛媛　田中　なお
巣ごもりも自助なりごった煮の夕餉　大阪　初代　正彦

特選

おみくじは中吉ワクチンの順を待つ　大阪　山本希久子
干し大根祈りになってゆく途中　京都　河村　啓子

軸吟

矢面をくすぐりにくる紋黄蝶

自由吟

小島蘭幸選

二日分浮いた二月の生活費　鳥取　岸本　宏章
コロナ後を見据えて磨く趣味の道　兵庫　村田　博
愛犬の元気について行く八十路　茨城　齋藤　松雄
愛のカバーでぬくぬくと眠っている　三重　小河　柳女
コロナコロナも粛々と春は来る　大阪　井丸　昌紀
遺すのは葬儀の費用だけにする　兵庫　淡井惠美子
ナビいらぬいつでも好きな道を行く　大阪　大浦　初音
寂しいと言えば寂しい二合瓶　愛媛　鎌倉　俊一
待合室はからっぽ雨のせいにする　大阪　大沢のり子
しんどいけど上を向いたら春がいた　兵庫　敏森　廣光
甲斐性は無いが愛ならたんとある　新潟　相田　柳峰
雑踏でまた私を見失う　青森　石澤はる子
ワクチンは日本製でと無理を言う　大阪　益山　登
おさな児のように描けたら天国か　奈良　小林すみえ
ここからは神の領域逆上り　北海道　阿部　桜子
擬宝珠をつんつんしてる恋ごころ　大阪　桒原　道夫
放言失言修正液が無い　鳥取　竹村紀の治

キープしたボトルそのまま店仕舞い　兵庫　竹山千賀子
ハートのない詫び状余白まで薄い　愛媛　山内もとこ
転んだらゆっくり起きてまた一歩　大阪　山岡冨美子
たっぷりとおいしい水がある日本　岡山　戸田まさこ
創造の翼広げて翔べ子らよ　北海道　蓑口　一鶴
自分の殻脱いで明るい殻を着る　兵庫　井本　忠
蓬摘む亡母に習った草だんご　岡山　市田　鶴郁
ボスの一声正論は潰された　兵庫　上野多恵子
鍋料理密を避けると味気ない　大阪　助川　和美
紙飛行機戦なき空子に渡す　愛知　佐藤ちなみ
もののけを集めコロナに挑みます　奈良　阪本きりり
暗証番号時々変えろ言われても　大阪　前原　正美
ややこしい話はさくら咲いてから　愛媛　田中　なお
花便り始発電車で会いに行く　兵庫　北山ほくら
懐かしい昭和の匂いする夕陽　奈良　大内　朝子
春は来ている　ふわりふわりと蝶よ　広島　岩本　笑子
川柳をマスクに刺繍する勇気　島根　大福　利彦
嘘だけはつかずに生きようと思う　和歌山　柏原　夕胡
月の砂漠幾つ越えたら逢えますか　島根　原　徳利
欲得も涸れると安らかな老後　大阪　藤井　則彦
文春のデッドボールがよく弾む　大阪　廣田　和織
それにしても景色も人も良い左遷　和歌山　三宅　保州

逢いたい人と会いたい人がいる浮世　大阪　西出　楓楽
モノクロがカラーになっていく快癒　愛知　位田　仁美
エアコンの温度で妻と隙間風　大阪　片山かずお
転んだらハードル下げて生きてきた　岡山　岩崎　幸子
触れられず触れず寂しい手を洗う　東京　齊藤由紀子
ぶらりぶらり山頭火かも蓑虫は　大阪　森　茜
雑念が貨物列車でやってくる　大阪　横山　里子
さくらさくら千の想いで君と逢う　奈良　渡辺　富子
巣ごもりで老老介護する稽古　大阪　碓氷　祥昭
東京五輪コロナ抜きでは語れない　大阪　原田すみ子
時間がかかってすみません女です　兵庫　西　美和子
好奇心だけで女は艶を増す　三重　青砥たかこ
君の手形がくっきり残っているハート　兵庫　中岡千代美
年上の女を好きになった古希　奈良　山田　恭正
吊り橋でふっと寿命が虹になる　京都　武田　悦寛
福島余震東京五輪が揺れている　兵庫　奥澤洋次郎
旅の人と呼ばれる転勤族でした　埼玉　中村　伸子
許せない事を許して鳥になる　茨城　佐瀬　貴子
静かといえばしずかに穴があいている　和歌山　たむらあきこ
経年変化おだやかに黄昏れる　大阪　宇都満知子
邪念ぽこぽこ抱いたままで眠れない　大阪　小野　雅美
ホワイトアウトわたしはだあれここはどこ　青森　稲見　則彦

筋肉が欲しいぼそっとひとり言　大阪　二宮　章子
虹を見るために私は雨を恋う　神奈川　相原あやめ
寂しさが増すひとり飾独り酒　大阪　入江　晴菜
嫁が来て本家明るく立ち直る　山口　中村　雀鳴
コロナ後の明日を皆で語ろうよ　大阪　川端　一歩
桜見る為に生きてるようなもの　香川　大高　正和
すぐ金をさし出す外交下手のニホン　大阪　徳山みつこ
お茶漬けを喜ぶ人と添うている　大阪　齋藤さくら
しあわせの今を大事に竹を踏む　大阪　岡本　勲
夕食が決まらぬうちに日が暮れる　埼玉　根岸　方子
おもしろきこともなき世に五輪来る　兵庫　田本　古鈴
黄泉の旅亡母の脚では辛かろう　大阪　鈴木いさお
皆既月蝕なぜかお腹がすいてくる　佐賀　真島久美子
それなりに楽しいお結びが二つ　愛知　関本かつ子
ゆっくりと枯れよう小さい音たてて　大阪　片岡　加代
死生観変わった巣籠りのなかで　大阪　荻野　浩子
干し大根祈りになってゆく途中　京都　河村　啓子
梅一輪きっと笑える日はくるさ　愛知　金子美千代
公園のブランコ僕を忘れたか　奈良　大西　將文
陸海空鳥には鳥のテリトリー　三重　橋倉久美子
その先が怖くてマスクはずせない　大阪　富田里芋姫
プロポーズ二つ返事を少し悔い　岐阜　喜多村正儀

おせっかいなおばちゃんがいて今夫婦　岡山　小林　茂子
警察に僕の指紋はないはずだ　兵庫　藤井　宏造
ダイヤ婚スローライフの歩が揃う　岐阜　武藤　敏子
プライドをちょいと削ってもらう歯科　広島　田辺与志魚
のんびりの掛り付け医と性が合う　広島　村上　和子
合掌の指やわらかに花祭　大阪　坂本　星雨
国会が済んで私もホッとする　佐賀　真島美智子
体操5分お経10分して元気　大阪　谷口　東風
転び方だんだん上手くなる余生　大阪　原　洋志
巣ごもりも自助なりごった煮の夕餉　大阪　初代　正彦
年齢に関係はない片想い　青森　高瀬　霜石
母子手帳今も大事に持っている　鳥取　田賀八千代
霜柱ザクリと踏んで亡兄を抱く　福島　野地　洋子
柚子ひとつやっと実った樹木葬　大阪　桑原すゞ代
グータッチこつんとひとつあったかい　兵庫　芳賀　博子
魔が差したように長生きしてしまい　大阪　谷口　義
歳月や今は許せることばかり　奈良　笹倉　良一
コロナがくれた団欒という時間　兵庫　山田美春日
故里の水コンビニで買っている　大阪　田中　俊子
反骨の心育ててくれた鄙　京都　西山　竹里
自然体になると瘡蓋とれました　愛媛　柳田かおる
別れて知るあなたは青い鳥だった　宮崎　黒木せつよ

女であることを確かめる鏡　熊本　阪本ちえこ
訳もなくリンゴをむいた独りの夜　鳥取　前田　楓花
お風呂の手摺り働き者になってきた　奈良　大久保眞澄
春を待つかたちに吊るすワンピース　和歌山　木本　朱夏
独り言です届かなくてもいいのです　愛媛　黒田　茂代

秀　句

古書店で探す四つ葉のクローバー　熊本　村上　和巳
こころ旅会いたい人が居るのです　徳島　小畑　定弘
ふりかえるたびに愛しくなってゆく　大阪　赤松ますみ
春だねと君の声から春来たる　千葉　日下部敦世
弟が逝く白木蓮が咲いている　岡山　工藤千代子
会いたい喋りたい笑いたい達磨　大阪　弘津秋の子
マスクしてムーミンになるおじいさん　青森　野沢　省悟
頑張って父の三十三回忌　大阪　樋口　眞
どの扉開けても誰ももう居ない　高知　辻内　次根
浮き雲へあなたの宛名書きました　鳥取　斉尾くにこ

特　選

転がっていった淋しい音だった　奈良　居谷真理子
海が凪ぐ君が笑っただけなのに　兵庫　糀谷　和郎

軸　吟

昼はひとり　今日は長女のお弁当

川柳塔まつり誌上大会投句者

総数 666名
（順不同・敬称略）

【北海道】青柳　忠　東　考矢　高橋くるみ　山田こいし　北田のりこ　橋倉久美子
阿部桜子　井上サヨ　松田竹生　三浦強一
嶺岸柳舟　簑口一鶴　高橋みっちょ

【青　森】稲見則彦　小野澄子　石澤はる子
佐藤　武　佐藤雅秀　滋野さち　小林行々子
高瀬霜石　野沢省悟　福士慕情　辻口風来坊
古木ひろ　吉田吹喜　北山まみどり
さいとうみき

【宮　城】太田良喜　菅野　實　木田比呂朗

【福　島】安藤敏彦　柳沼幸三　野地洋子

【茨　城】岡さくら　樫村日華　大森みち子
小原正路　齋藤松雄　佐瀬貴子　石川二三男
鈴の森　村野あかり

【栃　木】鈴木三穂子

【埼　玉】中島道則　中村伸子　久保田千代
根岸方子　前田洋子　宮本彩太郎

【千　葉】江畑哲男　勝又康之　日下部敦世
堺　忠弘　山崎　智

【東　京】柿沼昌芳　伊藤三十六
井上つよし　川本真理子　齊藤由紀子

【神奈川】加藤佳子　相原あやめ

【長　野】島田洋審　西沢葉火　宮尾柳泉

【新　潟】相田柳峰　小栗正和　倉田文夫
塩田悦子　中野美恵

【富　山】伴よしお　古川政章　松岡紀子

【石　川】岡本　聡　寺井一也　藤村容子

【福　井】伊藤良一　西谷公造　羽生悦郎

【岐　阜】武藤敏子　板山まみ子
喜多村正儀

【静　岡】佐藤灯人　中田　尚　水品団石

【愛　知】青砥和子　位田仁美　金子美千代
梶田隆男　小出順子　小林祥司　北原おさ虫
沢田正司　高浜広川　冨田末男　小松くみ子
彦坂石転　本多雅子　三好光明　西郷紀美代
山田初男　佐藤ちなみ　関本かつ子
竹内そのみ　米山由美子　山本三樹夫
八甲田さゆり

【三　重】小河柳女　奥田悦生　青砥たかこ
戴けいこ　竹島　晃　小川はつこ

【滋　賀】宇野弘子

【京　都】河村啓子　清水英旺　藤田磯竹生
武田悦寛　西山竹里　山崎三毛　渡邉真由美
山田葉子　吉本　圭

【大　阪】油谷克己　穐山常男　赤松ますみ
浅井ゆず　東　敏郎　阿部俊八　秋田あかり
池田和子　池田純子　井澤壽峰　石田ひろ子
石田孝純　石橋直子　伊藤恵子　井上たかこ
井上一筒　今村和男　今井亜紀　今井万紗子
井丸昌紀　入江晴菜　入江秀雄　岩佐ダン吉
岩崎公誠　上田陽子　上西啓仁　内田志津子
上出　修　植野繁子　上山堅坊　宇都満知子
碓氷祥昭　榎本舞夢　江見見清　江島谷勝弘
大浦初音　大浦福子　大隅克博　太田扶美代
太田　昭　太田省三　岡野　圭　大沢のり子
岡本　勲　岡本　悠　岡本遊凪　大島ともこ
荻野浩子　奥村五月　小野雅美　小川賀世子
貝塚正子　柿花和夫　霜田寿子　奥野健一郎
片岡加代　金川宣子　川端一歩　折田あきこ

川本信子　神田良子　北村賢子　片岡智恵子　藤原大子　穂口正子　前川善之　徳山みつこ
久世高鷲　黒岩靖博　桒原道夫　片山かずお　前原正美　牧田成子　益山　登　冨田里芋姫
小原由佳　近藤北舟　酒井紀華　川田由紀子　松岡　篤　松尾時子　松谷由夏　中川千都子
坂上淳司　坂　裕之　坂本星雨　川端日出夫　三倉　準　水野黒兎　三好専平　西川ひろし
阪本秀子　佐野正邦　澤井敏治　岸井ふさゑ　村上玄也　森　茜　森田旅人　原田すみ子
澤田悦子　島田明美　初代正彦　木見谷孝代　森　廣子　矢倉五月　安田忠子　原田真理子
助川和美　鈴木栄子　清井浩二　久保田清美　山衛守孝　山崎達彦　山崎多美　平井美智子
関よしみ　千田祥三　高杉　力　桑原すゞ代　山崎文子　山野寿之　山野双葉　平松かすみ
高橋美江　竹原春江　竹村隠夫　桑原ひさ子　夕　凪子　雪本珠子　横山里子　弘津秋の子
立蔵信子　田中俊子　谷口東風　古今堂蕉子　吉田禮子　藤島たかこ　船見船乗り
谷口　義　玉山智子　辻　肇　小山惠美子　松尾美智代　松島きよみ　松田蟻日路
丹後屋肇　土田欣之　津守柳伸　齋藤さくら　松本あや子　宮井いずみ　宮崎シマ子
寺井弘子　堂本秀爷　栃尾奏子　齋藤奈津子　両澤行兵衛　山内規予子　山岡冨美子
内藤憲彦　中井　萠　中井佳子　佐々木満作　山口弘委智　山本希久子　吉田喜代子
長尾千賀　中島一彌　中薗　清　柴本ばっは　吉村久仁雄　渡辺たかき　宇都宮ちづる
長髙俊雄　中林佳子　中村　惠　島田千鶴子　きとうこみつ　竹中キーキー　美馬りゅうこ
中山春代　西沢司郎　西出楓楽　正信寺尚邦
西村哲夫　二宮章子　原　幸子　杉山フジ子　【兵　庫】　青木公輔　荒牧孝子　淡井惠美子
原　洋志　原田正士　林満智子　鈴木いさお　池野英坊　生田頼夫　井上高島　生田えい子
東尾由子　樋口　眞　平賀国和　高木世紀子　伊藤壽彦　稲角優子　今津美幸　井口と志女
廣田和織　福山理花　藤井則彦　高田美代子　井本　忠　上田和宏　上原　翔　上田ひとみ
藤井康信　藤田武人　藤田治雄　田中ゆみ子　梅澤盛夫　江尻房子　大上几代　上野多恵子
藤塚克三　伏見雅明　藤村亜成　出口セツ子　大西重男　大矢　伸　小倉修一　太田としお
奥田尚子　尾崎一子　岸田万彩　緒方美津子

北澤稠民　北野哲男　城戸誓子　奥澤洋次郎
久保木剛　幸田厚子　澤　良子　谷口修平　敏森廣光　長島敏子　新阜義明　野口　修　萩原　正　稗島照代　福田正彦　藤田雪菜　堀　正和　槇田次郎　村田　博　山口光久　吉田和子　松本ゆかり　山田美春日
九村義徳　奥水　弘　櫻井崇史　梶元世津　櫻井崇史　田中雅子　谷田和之　田本古鈴　冨永恭子　永田紀惠　二階幸子　能勢利子　芳賀博子　羽奈和子　福田好文　藤井宏造　藤岡りこ　藤原紘一　前川　淳　松下則子　森　菊江　山田厚江　吉田笑太　みぎわはな　山口ヨシエ　山端なつみ　吉村めぐみ
北野哲男　城戸誓子　奥澤洋次郎
糀谷和郎　北山ほくら　熊谷つとむ　米田利惠子　黒川佳津子　小脇ゆう子　清水久美子　島村美津子　白川智惠子　住吉美和子　瀬島流れ星　竹山千賀子　谷田多喜榮　出羽千代子　中岡千代美　野口真桜子　東内美智子　藤井美智子　まきのあん　マツニーノ
小山紀乃　澤　良兼　鈴木新録　谷内利昭　近兼敦子　中川暁子　長野峰明　西美和子　芳賀博子　谷田和之　谷田多喜榮　福田好文　古谷春美　松倉正美　宮本　緑　村田　博　山田耕治　吉田利秋　山口ヨシエ　山端なつみ　吉村めぐみ
【奈　良】　饗庭風鈴　安土理恵　生駒さとし

東さだお　安福和夫　宇賀史郎　居谷真理子
大内朝子　大西將文　木嶋盛隆　大久保眞澄
小林和之　五味尚子　阪本高士　太田のりこ
笹倉良一　髙橋敬子　谷川　憲　加藤江里子
中堀　優　中森勝代　花田文聡　小金澤貫一
菱木　誠　古川洋子　堀内　稔　小林すみえ
毛利元子　山下純子　山田順啓　阪本きりり
山田恭正　山本昌代　米田恭昌　澤山よう子
渡辺富子　島岡美智子　髙田まさじ
徳重美恵子　飛永ふりこ　長谷川崇明
山崎夫美子　山下怜依子

【和歌山】
柏原夕胡　石田隆彦　上田紀子　長谷川葉子
木本朱夏　喜田准一　北原昭枝　三枝眞智子
佐藤まき　小谷小雪　小原敏照　倉橋悦子
村中悦男　澄田康則　西川千鶴　三宅保州
たむらあきこ

【鳥　取】
池田美穂　飯野菖子　池澤大鯰　伊塚美枝子
奥田由美　生田博子　大前安子　後藤美恵子
岸本孝子　門村幸子　岸本宏章　斉尾くにこ
狭武紫陽　木天麦青　倉益一瑤　田賀八千代
中井虎尾　新家完司　田中重忠　竹村紀の治
成田雨奇　中原章子　中村金祥　山野すみれ
西浦小鹿　平尾正人　山本ふみ子

福西茶子　前田楓花　宮田風露　森山盛桜
山下凱柳　山下節子　山本　惠　吉田弘子
吉田陽子

【島　根】
伊藤玲峰　石橋芳山　伊藤寿美
井上松美　奥田勝子　熱田熊四郎
加本精一　高田治朗　遠藤有希子
尾原米估　田中堂太　中島　貢　荒木ひとみ
大福利彦　原　徳利　藤井寿代　鎌田たけお
中筋弘充　山根雪代　柳楽孔明　小白金房子
松本文子　佐藤あけ美　多久和敬子　竹治ちかし
戸谷てる美　永田ハルミ　増田のぼる
松本富紫美　柳楽たえこ　吉川らんまん

【岡　山】
大石洋子　市田鶴邨　岩崎幸子　赤本富美子
折鶴　翔　大杉敏夫　岡本余光　工藤千代子
永見心咲　小林茂子　杉山　静　椎葉つとむ
藤澤照代　原　脩二　藤井智史　髙橋由紀女
八木規子　松岡紀子　宮本信吉　戸田まさこ

【広　島】
岩本笑子　石原淑子　稲垣靖子　吉川美佐子
北村善昭　小川道子　鴨田昭紀　瀬戸れい子
笹重耕三　小島蘭幸　小畑宣之　田辺与志魚
田中敬子　若年幸子　新庄芳春　田桑恵子
中野妙子　半田知弘　松尾信彦

村上和子　村田幸夫　山本恵子
【山　口】
赤川和子　上村夢香　大田孝子
中村雀鳴　丸本昌代　山本　一

【徳　島】
小畑定弘

【香　川】
大高正和

【愛　媛】
尾崎静山　越智学哲　安野かか志
黒田茂代　郷田みや　大内せつ子
田中なお　永井松柏　岡山フジエ
浜本光子　正岡鏡花　川上ますみ
山内房子　高市すみこ
西田美恵子　宮尾みのり　柳田かおる
山内もとこ

【高　知】
浦田裕充　辻内次根

【福　岡】
石田　酎　一木輝子

【佐　賀】
坂本蜂朗　仁部四郎　真島久美子
真島美智子

【熊　本】
岩切康子　杉野羅天　阪本ちえこ
村上和巳

【宮　崎】
惠利菊江　黒木栄子　黒木せつよ
河野　正

【鹿児島】
平瀬芙蓉

【沖　縄】
多良間典男

（投句196名）

例年より早く咲いた桜も散ってしまったけど、そんな桜を求めて自粛生活に飽き飽きした人たちが一気に動き出したように見えました。

そのせいばかりでは無いでしょうが、変異株なんてのが現れ、特に大阪はこのところ感染者が大幅に増えています。

身近な所で、再開しようかと思っていた句会もまた遠のいてしまいましたが、負けられません、の気持ちで一杯です。

では、ナビを。

鳥取県　竹信　照彦

障子開けガラス窓開け網戸開け

（評）換気換気でどこも開けっ放し、冬は寒いし、暑くなればクーラーの効き目はダウン。ああ、どこまで続くのやら。

八王子市　川名　洋子

自尊心つつく老舗の包装紙

（評）同じ品物でも包み紙でこうも違いがあるのですから、そういえば人間も馬子にも衣裳、なんて申しますわね。

大阪市　岩崎　玲子

時時は涙が少し溜ります

（評）（溜ります）が何と奥ゆかしいことでしょう。でも、時には涙をザアッと流した方が精神衛生上よろしいかと。

唐津市　仁部　四郎

花びらを積むロケットもあるだろう

（評）ロケットに花びらを満載するなんて、そぐわない感じがするからこそよけいにロマンティックです。

奈良市　髙橋　敬子

正解は人の数だけあるらしい

（評）百人寄れば百の考えがあって当然なのでしょうが、往往にして自分と違う意見は敵視しがち、気を付けまーす。

笠岡市　藤井　智史

人間の脆いところを悪が突く

（評）魔が差す、とはこのことでしょうね。でも、今の世の中、こんなことが溢れていそう。コワイ、コワイ。

尼崎市　近兼　敦子

淡淡としているようで熱い人

（評）熱血漢かと思いきや、そうでもない人よりは、こんな人の方が人間味がありそう。人は見かけによらないのです。

米子市　後藤　宏之

大丈夫私が付いて居てあげる

（評）こんなことを言われたら、メロメロでーす。支えがあると思えるだけで、どんどん強くなれそうな気、します。

大洲市　花岡　順子

なすすべはないけど空はきれいです

（評）人事を尽くして天命を待つ、の心境でしょうか。大きなものに委ねてしまえば意外と道が見えて来たりして。

大阪市　石田　孝純

だってだって万葉集も恋の歌

（評）千年以上経っても人が人を恋う気持ちは変わらないもの。そう思えば人間って何と愛おしい存在！

藤井寺市　鴨谷瑠美子

良いことは風があと押ししてくれる　横浜市　菊地　政勝

斜めから見ると実体見えてくる　弘前市　福士　慕情

子へ譲る時が来たかと力抜く　橿原市　居谷真理子

あっあっあっ恋ってジェットコースター　大阪市　江島谷勝弘

あぶないぞ潜水艦が浮上する　土佐清水市　辻内　次根

マンモスの利権を崩す余地がない　米子市　八木　千代

雨になろうと今日咲く花は今日に咲く　大阪市　平井美智子

次の世もやっぱり君と添う覚悟　神戸市　松倉　正美

花筏蝶一匹を道連れに

東大阪市　佐々木満作
人間の表と裏にある死角

尼崎市　清水久美子
婦唱夫随になってから験がいい

松山市　郷田　みや
祈るだけです開かないパラシュート

枚方市　栃尾　奏子
サラバさらばあなたは美しいままに

香芝市　大内　朝子
散り際の美学を見せているモデル

弘前市　高瀬　霜石
ぼくだけがハゲてしまったクラス会

西宮市　亀岡　哲子
天国を覗きに来いと誘われる

高槻市　初代　正彦
キミとならスリルのジェットコースター

倉吉市　牧野　芳光
後を追う者がいるから休めない

奈良市　山本　昌代
何でやねん何でやねんと五十年

枚方市　藤田　武人
ダイバーへ告白迫る人魚姫

箕面市　酒井　紀華
近未来ふたりで行こう宇宙まで

寝屋川市　平松かすみ
温い手を添えて上げたい丸い背

東京都　川本真理子
地に足がついていないと影が言う

神戸市　奥澤洋次郎
春一番明日は彼女に逢いにゆく

豊中市　水野　黒兎
闇に飛ぶ小癪な忍者杉花粉

尼崎市　藤田　雪菜
時どきは脱線もする人間味

松江市　石橋　芳山
流れだす記憶にゆらゆらゆらゆら

佐賀県　真島久美子
点線に沿ってサヨナラすればいい

大阪府　大浦　福子
泣き止まぬわたしに兄がくれた蝶

札幌市　三浦　強一
欲望のゴールだんだん遠くなる

宝塚市　岸田　万彩
ジェンダーフリーのガチンコ勝負だぜ

松山市　柳田かおる
本当のわたしが見える向かい風

防府市　坂本　加代
春一番梅の花散り実は不作

熊本市　杉野　羅天
同行二人目で見ることは出来ないが

河内長野市　木見谷孝代
体幹を鍛えいい波待っている

明石市　糀谷　和郎
影武者の方がイケメンでは目立つ

岡山市　永見　心咲
望むなら斜めに咲いてみせましょう

大阪市　小野　雅美
大丈夫笑えるようになったから

三田市　北野　哲男
伴走の私も夢を抱いている

犬山市　金子美千代
流されて来た人生も悪くない

羽曳野市　徳山みつこ
ナスカの地上絵をパソコンで巡る

豊中市　きとうこみつ
恋をして私は桜色になる

尾道市　小川　道子
何てこと虫も殺さぬ顔をして

朝霞市　前田　洋子
せーのーで岩場すべった遠い日よ

鳥取市　永原　昌鼓
強風の中自転車を漕いでいる

寝屋川市　川本　信子
ワクチンを打っても化粧眉毛だけ

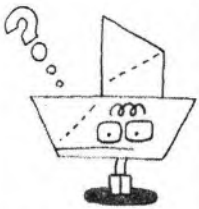
大阪市　坂　裕之
二番では駄目と先頭目指す子等

三原市　笹重　耕三
さて何をしようか春の陽が温い

大阪市　高杉　力
本命は別にいましたとも言えず

松山市　栗田　忠士
もう少しゆっくり行こう花筏

7月号発表
(5月15日締切)



(平本　霧石人　画)
柳筐に2句

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔すみよし（大阪）古今堂蕉子報

濁点を打ったら騒ぐかきくけこ　昌紀
欠点の変なところが几帳面　まつお
名作は何度読んでも「点と線」　いさお
空模様太陽黒点目に残る　小枝子
新しい社会へ点が集まろう　美世子
点滅の脳と仲良く歩いてく　大子
点滴ぽとり母がだんだん遠くなる　万沙子
6Bが脳に点火の第二章　ひろ子
一点を無視し全体に歪みだす　裕之
弱点で美点人間にすぐ惚れる　久仁雄
初詣手水代わりのアルコール　眞澄
裏の裏見えて来るまで眼を洗う　萠
ダイヤ婚目指し共助の老い二人　福貴子
洗っても心の塵はすぐ積もる　ふりこ
熊野古道心を洗う杉並木　晴雄
抜けるなよ祈りながらに髪洗う　篤
苛立ちを胸に納めて揉み洗い　雅美
リハビリに挑む術後の老いの脚　民子
当面は元気で傘寿めざそうか　勝弘
裸一貫なんでもやれたやったなあ　ばっは
銅を銀銀を金にとアスリート　克博
集大成南アルプス挑む夢　志津子
セーターに挑む百歳までに編上げる　シマ子
全員マスク気迫いや増す受験場　(矢)五月
私よりだいぶ賢いうちの犬　こみつ
傘寿まで身体にメスの跡がない　満作
空襲の恐怖語れる戦中派　鉄心
手を洗ういとしいものを抱くために　舞夢
好きだった笑窪が今や皺となり　重信
ウエストはここ二十年同サイズ　公誠
骨太の指天職の鍬に鎌　寿之
生涯を親分なしの子分なし　俊雄
悲しみを打ち消すように髪洗う　さくら
プライドも見栄も洗ってデスマスク　ゆみ子
逆上がり何度も挑む孫の顔　郁子
一点を見つめて思い巡らせる　廣子

川柳塔みちのく（青森）稲見則彦報

言葉より数字がきつい事を言う　隆樹
百円の安さに呼ばれ遠い店　初枝
四捨五入ここで私は霧の中　則彦
人生百年二度咲きも厭わない　のぶよし
四捨五入するとヒントが見えてくる　黙人
今という未来の端を生きている　真由美
甘えなら嫁に来る時捨ててきた　柳子
百点のテスト背負って弾む靴　ふさゑ
黒豆をつまむいのちの糧つまむ　劦
校庭の子等を励ます鯉幟　きよし
今晩何食う考えもう時間　澄子
煩悩の二つ三つを壁にかけ　花峯
明日がある信じて予定先伸ばし　孝子
人間は今も昔も神じゃない　京子
今日一日の締めの晩酌堪らない　重虎
英会話より大切な仁・義・礼　霜石
日が昇るほんのり甘い春の風　洋子
詐欺の鬼甘い言葉に惑わせる　一呑
精いっぱい生きてやっぱりいまが好き　風来坊
早く早く会いたい人が消えていく　和香子
先代の苦労を知らぬ七光り　慕情
淋しくて甘い言葉と握手する　美鈴
スマホデビューちゃんと時流に乗りました　規子
塩分も甘さも控え生き延びる　ひとし
とりあえず息をしましょう生きましょう　吹喜
時は今いざ本陣を攻めようか　龍馬
隠し味砂糖ばらさぬ匙加減　ひろ
生き甲斐を見届けながら生きて行く　呑舟
千円CUT安くて済むがもっと襟　友二
一年生両手の指で数かぞえ　久美子
あまーいとひとつ覚えの食レポさん　英子
音痴だが恋に落としたラブソング　ちづ子

和歌山三幸川柳会　西川千鶴報

真夜中の鍋焼きうどんからエール　起世子

割れ鍋にとじ蓋どちらとも言えず　准一
登り坂牛歩ながらも前へゆく　一雄
手鍋すら持たぬ難民溢れてる　保州
鍋奉行むすこに譲り父静か　敏照
芽吹く日へ胎動はもう始まった　理恵
火に耐えて家族を守る鍋の底　昭枝
戦友といつまで続く年賀状　昇
新年の始発の駅に立つ賀状　八重子
巡礼の列もソーシャルディスタンス　日出男
密避けて三日遅れの年賀状　宏枝
年賀状耽る思い出筆止める　まき
願わくば惜しまれて散る花筏　純子
七草粥ほっこり春が匂い立つ　幹子
こびりついた憂さ掻き落とす鍋磨く　当代
合掌の指に綺麗な血が通う　富香
五十年鍋光らせてつつがなし　智三
年賀状ウシ百頭がくるポスト　和子
原点に戻って迷路から抜ける　菜摘
くよくよも忘れるという武器を持つ　ひろ子
まっ白になるまで心の沁み洗う　碧
祈るほど心が軽くかるくなる　美枝子
この鍋で子らを育てた自負がある　明子
添え書きに頑張れコロナ禍の年賀　あき子
自分の身は自分で守る鍋掴み　知香
すばしこい男と鍋をつついてる　ダン吉
平和への祈りを込めて千羽鶴　みつ江
コロナ禍へ年賀届いて安堵する　眞智子
鍋のゆげ至福の笑みの老い二人　悦男
鍋叩き鐘を鳴らしたデモのこと　彦弘
貴方よりゆっくり逝くの祈ります　和美
同じ鍋囲めるうちはまだいける　俊介
お互いに生きていますと年賀状　よしこ
飯ごうで炊いたご飯の美味なこと　康則
抽選の期待を背負う年賀状　千鶴

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

コロナコロナ早く地球を去ってくれ　節夫
「ありがとう」唇んなに言って逝きたいな　輝恵
去る者は疎し賀状も来なくなり　宣之
過去が語る日記輝きを放つ　弘子
一難去りまた一難の人生譜　栄香
急逝の夫さよならは聞かぬまま　幸子
アドレスを変えて静かに旅に出る　夢香
誕生日八十八回過ぎ去った　節生
よく肥えた蛙田んぼの主である　笑子
肥えたやせたと村の雀がさわがしい　蘭幸
肥える子の重みが背へあたたかい　鬼焼
人の血を吸うてコロナがまた肥える　白狐
この先も昭和肥やしにして生きる　慶子
日本人でよかった御薄に和菓子　淑子
孫や子に甘い夫の背がまるい　千代美
緊縮財政孫には甘い財布なり　比呂子
妻の小言は甘ずっぱくて沁みる　敬子
甘く見たコロナに仕返しをされる　昭紀
ポケットに飴玉一つありました　歩美
季は巡り哀しみ宿る雪椿　厚子

堀　正和　選

高い夢でしたピアノは買っただけ　かずお
一から十まで喋ったあとに騙される　瑠美子
玄関に躾きっちり靴並び　邦男
遺産より生前贈与せがまれる　義泰
逆転負け九回迄は笑ってた　としお
根まわしのヨイショヨイショに負けました　理恵
りんご一つ手紙と共に置いてある　笑子
愛妻と書いてみたいな続柄　雨奇
時どきは負けてやらんと客は来ぬ　高志
総理にならなきゃよかったね菅さん　鬼一

佳句地十選　（4月号から）

関本　かつ子　選

雪はまだ秘密隠したままでいる　小鹿
病を得てやっと自分に向き合える　則彦
憲法と米と水とが自慢です　一歩
目力で元気確め合うマスク　一志
連れ添うて火の輪水の輪くぐり抜け　昭枝
交差点脚力の程試される　美鈴
りんご一つ手紙と共に置いてある　笑子
大家族まさか一人になろうとは　初音
三つ編みの似合う少女の居た昭和　みつ子
ガラス並み壊れ易いね民主主義　慎一

青空を見る窓がある三が日　貞子
お別れも出会いも春風に乗って　史子
こころのなかにはみんなおにがいる　五歳　ちか

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

それからと長い話の幕が開き　滋龍枝
一服してそれからかかる大掃除　貴恵
肩に触れじっと話を聞いてくれ　紀子
吉報を信じて待つ子頼もしい　清
じっと見られ頬を赤らめ目を逸らす　久米代
じっと耐え暗い土中で冬ごもり　たけ代
コロナ禍でじっと我慢の日が続く　野蒜
一合で貧乏揺すり止まるのに　照彦
GoToで地獄極楽巡りたい　芳光
てるてる坊主明日の空に吊っている　紀の治
一回でいいですジャンボ宝くじ　悦子
マニキュア塗満艦飾で町カッポ　陽之助
消毒を行く先々でしてる指　重忠
酷使した指にあげたい努力賞　義人
グータッチ指の温もり感じない　富隆
指一本ケガしただけで難儀する　三津子
頑張った指に輝く5カラット　完司
いつだって前向きである足の指　宣子
哀しみの祈りよじっと立ちつくす　美知江
核廃絶日本参加の望み消え　玲坊
とりあえず今日平安に過ごしたい　大鯰
世のため人のため自分のためを忘れてた　みゆき
妻に望むことを言ったら叱られた　節子
その時は豪華船でね閻魔様　紀美恵
まだ女恋の望みは捨てません　重利
野ざらしのままの望みに水をやる　久江
もう一つ望むと駒がにげていく　石花菜
無駄な指一本も無い二十本　美ッ千
指切りの指から風が湧いてくる　くにこ
指切りが重たくなった三分後

富柳会（大阪）　山野寿之報

春色のちょっとおしゃれな風が吹く　恵
求愛のさえずり羽を飾る雄　武人
一切の虚飾落として冬木立　寿之
点滅のハートうっかり消さないで　和子
有終の美飾り散り行く吉野山　高鷲
他意は無い言うて本音にある悪意　壽峰
人生の原点に立つ母の愛　一文
幸せに馴れた触角退化する　澄子
金色の付箋を貼っているその他　かこ
悶悶の角を曲がれば青い海　欣之
今までの他力本願捨てました　清
足踏みの点字ブロック春の音　文重
失敗を笑って背伸びする八十路　きみ子
ジェラシーはない物ねだり深い欲　由夏
日差し受け春だ春だと福寿草　よしみ
胸底に他言無用の石を抱く　あかり
今日は今日明日も巧みに恥を掻く　正治
だまされてもだましはしないまるいかお　常男
万華鏡回せば宇宙探査船　隆充
無人駅券売機だけ話しかけ　正義
揉めた今朝ラインの既読見て安堵　きよみ
ちぐはぐに靴を履く日の母の背　良恵
甘い香り春色シャワー枝垂梅　章子
へそくりを隠した場所が深い謎　圭

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

GoToはコロナ煽っただけの風　秀夫
逆風も帆の張りようで前に行く　律雄
そのうちに風もこちらへ吹くだろう　恭子
蓋しても風の噂は飛散する　保州
風紋の昨日と違う今日を生き　みつ江
風神につれない素振り冬ごもり　万彩
初恋の人は逝ったと風の便り　喜代志
風を読む力不足を悔しがり　隆雄
懐かしい幼き頃の風ぐるま　しげ子
早世を風の便りで聞く悲哀　カズ子
決断を迫る風ですたまに吹く　信子
明朗会計おばちゃんの割り勘　蕉子
朝刊のコラム明るいネタがいい　理恵
シャッター街明るい話して通る　恵子
安請合明るい声に頼まれて　扶美子
前髪を切って明るくなった顔　留美子
天然の妻で茶の間の灯が明かし　輝子
花一輪だけで明るい部屋になる　ふさゑ
一歩二歩地面を踏んだ退院日　昌代
草を踏む素足に春のプレリュード　日出男

愛猫が画鋲を踏んで飛び上がる　珠子
酒呑みの親父と同じ轍を踏む　いさお
踏み込むなそこから先は活断層　香代
愛という錆覚メッキ剥げてくる　穏夫
メッキでは出せぬ金色中尊寺　さくら
あの汗だメッキでもよし手を握る　ダン吉
先生のメッキが剥げる袖の下　義泰
たたき上げメッキが剥げてきた総理　一歩
継ぎはぎの知識で直ぐにボロを出す　玄也
ぼちぼちとメッキが剥げる酒二合　和子
喋ったらイメージダウンメッキ剥げ　和美
お日様にメッキをされた日焼け顔　信二
独り居に灯る明かりが無事しらす　タカ子
電話鳴る弾ける声に救われる　三成
どうメッキしてもわたしはわたしです　ひろ子

ブラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

サプリ止め命有るうち鰻丼上　正子
この本はおまけにひかれ買っただけ　靖子
三十センチ伸びて制服つんつるてん　清乃
早朝のバイトのおまけ超元気　五月
「味見させて」手が伸びて我三切だけ　園子
震度6強ブルーシートに胸痛む　悦夫
幼少の記憶キャラメルよりおまけ　弘光
用意した終活ノートそのまんま　克三
空に向け広がれ伸びろ子らの夢　淳司
九時ですよあと一杯を自販機で　政夫
すれ違い見知らぬ人が礼をする　和代
夕暮れにもうおしまいとカラス鳴く　景子
指図する背筋伸ばせと影法師　一彌

南大阪川柳会　松岡　篤報

えぐいのがミソだよ里のよもぎ餅　志華子
フェイクから始まり終りまでフェイク　東風
遺産分け知らない顔も寄ってくる　あや子
新コロナ感染すれば村八分　国和
渋柿をかじった渋面の子猿　満作
えぐい冗談さらりと流す粋な人　よしみ
百万羽無罪の鶏に屠殺指示　博
いやいやが天職になり継ぐ家業　亜成
酒好きですが僕はビール党です　勝弘
いやいやとやっぱり強い方に付く　ダン吉
いやいやをされて可愛さ増していく　実
いやいやの気持ちを変えた誉め言葉　大子
いやいやにワタシモスキとルビを振る　昌紀
物言うも逢うもいやいや世捨て人　弘委智
でたらめの記事修正液が足りません　弘子
この住所よく届いたなこの手紙　直子
でたらめな言い訳聞いている正座　ひさ乃
家計簿の集計いつも合わないの　シマ子
でたらめを信じる振りも処世術　柳右子
でたらめな記憶しゃきっとさす二合　敏治
どよめきが有る場面だが無観客　篤
皿洗いあのどよめきを思い出す　峰子
決断の速い男だ炎の如し　ばっは
ホッカイロ貼る足腰へ梅見頃　柳伸
不眠症夜のあけるのを只待って　ルイ子
目薬をさしたかどうか考える　通江
蛇口から春の温もり今日は　歌留多
男尊女卑死語になる日がいつか来る　楓楽
ビンつけの匂いナニワに来ない春　克己
美しく死ぬのはとても難しい　いさお

川柳ふうもん吟社（鳥取）山下　凱柳報

虫達もまめに元気で春を呼ぶ　とも湖
便りないのはまめな証拠と思ってる　美恵子
単身赴任まめかまめかとメール打つ　金祥
喧嘩せずまめに暮らせと母の声　八千代
ふるさとの愛を素足でたしかめる　賢悟
裏切りに時効があると思いたい　月満
三欲の二つ忘れ眠る母　紫陽
枯れた花一度はバァーと咲いたのよ　雅苑
ウイルスをハズキルーペで探してる　野蒜
生かされている日々だなと老いて知る　亨
神風でコロナ襲来吹き飛ばせ　勲章
夢に見た現実を知り一人住む　かよ
無知隠し知ったかぶりの無責任　何事
知る由もないへそくりを婆は知る　敏夫
精子提供親知ることができませぬ　茂登子
転ぶたび世間の裏を知るカカト　哲子
ぶつかって愛のふかさを知る絆　かかし
母さんの愛は無償の愛と知る　天翔
国会中もマスクで午睡夢の中　孝二
マスクして語る友だち誰だっけ　大

手縫いのマスクぴったりの優男　一平
妻の口二重マスクにしてやった　振作
いつか来るマスクはずして笑える日　桐子
手作りのマスク並ぶ交差点　昌鼓
悪役のマスク外して父が逝く　天遊
生と死の境界線に置くマスク　蛙鳴
二礼二拍手倍のお願い申します　観洋
倍返しする気が失せて楽になる　恵美子
人生の後半まるで倍速だ　真理子
倍返ししても足りない亡母の恩　回春子
数倍に薄めて法螺を聞いておく　秋月
人よりも倍の努力で得た栄誉　壽峰
ふたりなら嬉しい事も倍である　一瑤
今は我慢コロナ終われば倍遊ぶ　みゆき
知るはずない僕の過去妻暴きだす　凱柳

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

隕石と思い鑑定ただの石　フジ
じゃり道をざくざく踏んで初詣　正義
石段を一気に駆けた若かった　さくら
五十年生きて漬物石となり　瑠美子
耐え続け石の上にて傘寿なり　洋一
躓いた石の数だけ恩のあり　大子
石地蔵も洒落たマスクの昨日今日　シルク
上役を支えるために石になる　一文
石舞台古人の知恵に想い馳せ　ひとみ
この辺で転けたな雨の石畳　まつお
原石がひしめいている甲子園　いさお
墓参り石に蒲団は着せられぬ　久仁子
路傍の石いつもいい汗かいている　久仁雄
金魚にもお土産せせらぎの小石　扶美代
麦踏みの景色知らない我もそう　かつ美
借金踏み倒す前に宝くじ　冬のト
足踏んでそれは駄目よと合図する　千鶴子
五右衛門風呂踏むバランスが難しい　こみつ
踏む岩にはねかえされて登る山　専平
踏まれても踏まれても笑ってる爺　勝弘
踏み込まぬ一線引いて続く仲　ひろこ
若さとは昨日の影を踏んでいる　美代子
踏まないで大地を割って出た新芽　宏造
巣ごもりの健康法に竹を踏む　ちづる
玉砂利を踏んで今年も会いに行く　理恵
春はすぐそこ踏切の向こうから　ゆみ子
場数踏み引際しかと弁える　みつこ
踏みしめたこの地で生きることにする　ダン吉

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

呆けた振り聞こえぬ振りと達者です　多美子
若い娘に交じって選ぶバレンタイン　美穂
マスクしてやっといつもの顔になる　宏之
零下五度深夜水道たしかめる　瑞枝
膝に来る犬と語ってひと日暮れ　日枝子
大寒の鍋を囲んで酔いしれて　菜々
好きなこと出来る今には感謝する　治代
背伸びする少し寒さが和らいで　恵子
寝る前に夫に恩赦を与えます　美緒
コロナ禍も芽吹く準備をしてたんだ　宣子
いまもって亡夫を支点に跳んでいる　令位子
呼んでいる世界の夜明けコロナ明け　汪
いいですね医者の一言元気出る　博子
万歩計正月二日始動する　久直
パソコンの壁を乗り越え三代目　俊久
子の祝言いくら包めばいいのやら　雨奇
ひと言でオリンピックが揺れている　紀の治

川柳あまがさき（兵庫）大浦　初音報

ざわざわと庭木ゆらして春一番　れい香
車中から神社の前で手を合わす　厚江
目の保養ダイヤのティアラ足とめる　照代
乳母車孫と犬のせババ笑顔　正
有馬の湯泊まるホテルは五ツ星　柳明
開演の期待あふれてさわぐ胸　初音
もち三つ食べて決意のダイエット　和子
賑やかな葬式が夢未だ死ねぬ　(入)修平
老いふたり保養の旅も子は止める　五月
ウグイスになった気分の梅花祭　千賀子
頑張ろうねが最後になった年賀状　りこ
性感は枯れても悟りほど遠い　健二
入浴剤変えて温泉巡りする　新録
人生の疲れを癒やす古里の山　純
カレンダー通り休んですこやかに　紀華
接待に見返りないと「んなアホな」　英坊
ざわざわがザワワザワワと聞こえる夜　久仁雄
ステイホーム財布一緒にひと休み　菊江

コロナ禍でおもてなしなどできるんか　勝弘
ラストダンスはテネシーワルツだったよね　宏造
しわくちゃへアイロンかける星条旗　堅坊
お互いに溜息ついて出る家裁　万彩
振るよりは握ってほしい発車ベル　耕治
別れ際強気通した虚栄心　良種
終電車明日がそろりと降りて来る　美籠
いい人生でしたと明かす笑いじわ　かずお
トトロに会いに森へ入って行きましょう　こみつ
根性があればとっくに別れてる　(谷)修平

川柳茶ばしら(愛知)　関本かつ子報

コロナ禍の一年前に逝った兄　雅美
一雨があって花芽が動きだす　遡行
角番を勝って給金少し上げ　三樹夫
不便さも空気のうまさ変え難い　まみ子
嫌われる覚悟があれば楽なのに　美千代
別別の空気吸いたい狭い部屋　かつ子

ほたる川柳同好会(大阪)水野　黒兎報

理か情か名医の態度好みあり　守啓
外科医は三十代大丈夫かな　勝弘
その椅子に座ると歯医者鬼に見え　黒兎
収束をしたらの夢ははしご酒　春代
足よりも口が達者なウォーキング　順子
歩き方注意をされて足が出ぬ　正子
意地張らず杖をお供に歩く日々　郁子
散歩道犬が主を連れ歩く　純子
空仰ぐそぞろ歩きも乙な味　則彦
ケータイが時時ひとり歩きする　宏造
お水取り温かい春をそろそろと　一弥
気持だけ孫からもらうチューリップ　信子

岩美川柳会(鳥取)　山下　節子報

お人形をハグし放さぬ女の子　重忠
ハグはダメ握手もダメにしたコロナ　完司
好きな人ハグして更に好きになり　弘六
砂糖好きとても出世は出来ません　一瑤
神仏への祈りしっかり祖父に仕込まれた　美恵子
祈らずも平穏な日々感謝する　たぬ
夕焼けとハグで約束明日を生き　菖子
百円でなんぼ祈るだ長すぎる　幸安
銃を持ちひたすら祈るアルカイダ　敏子
嘘盛っていますにこにこしています　茶子
追加した砂糖で出来た腹回り　真理子
砂糖と塩上手く使った上司いた　振作
蟻も私も砂糖には首ったけ　雅女
はらはらもドキドキもなく老いていく　彰夫
甘味抑えた何とも言えぬ隠し味　凱柳
老夫婦ハグして肩を揉んでやる　一粋
甘辛の痴話喧嘩にも匙加減　一平
甘いもんに飢え砂糖にサッカリン　蟹郎
さとうきび畑ざわわの歌が好き　節子
北極の氷休まず日々溶ける　次男
何事も休憩したら怠け癖　智恵子
ゆっくりと休む日来たら用無しに　瑞子
息はずみ休み休みと老い歩く　日出子
働き蟻羽根を休めよ明日の日へ　雄大
お悔みもコロナのお陰休みます　隆昌
休日を楽しみにした頃思う　道春
わいわいと騒ぎたくなる長自粛　鬼一
わいわいと騒いでおれば歳とらぬ　紀美恵
金バッジ付けてわいわい騒いどる　石花菜
わいわいと七人家族なつかしい　由紀子
わいわいと口も頭もまだ元気　恵子
わいわいと叱られるほど騒ぎたい　宣子
わいわいと桜が巣立つ青い空　祐子
わいわいと巣ごもり気楽家が良い　完司
ルンルンと行こう地球は遊園地　萩江
戦争を忘れた地球見たいもの　風露
地球大の優しさあれば平和です　野蒜
温暖化地球全員丸坊主　凱柳
住みにくくなったと蟻の嘆き節　明有
地球民資源有限脳使え　茂夫
地球の裏友五十年サンパウロ　龍枝
判子廃止国の歴史も薄れ出す　麦青
ご機嫌な時はポンポン押す判子　けいこ
ひとつ押した判子で人生が変わる　大鯰
割り印を押して文書は成立す　酔芙蓉
判子屋が注文なくて悲鳴あげ　重忠
粗末に出来ぬ栄えた頃の社長印　照彦
わいわいとテレビが騒ぐ再放送

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

直線に届いた声が突き刺さる　亜成
追いかけて欲しくてゆっくりと逃げる　星雨
ありがとうお疲れさまと咲いている　茜
陽光に力貰って生き延びる　祥昭
そろそろと上司の尻尾踏んでみる　和織
捨てがたい物もそろそろシュレッダー　かすみ
曲がってた真っ直ぐ生きて来たつもり　鈍甲
雪道に光る直線魔を誘う　弘委智
直線を走る車は要注意　義広
まっすぐに歩いていても右左　博泉
直線が曲線になる歳の嵩　寿之
曲線と直線混ぜて生きて来た　武彦
直線に歩けば壁が待っている　一文
真っ直ぐが好きだ道路も考えも　かずお
拠点から始め拠点の無限大　壽峰
逃げ道は確保言いたい事は言う　賀世子
逃げ足の速い二月のカレンダー　彰一
核心を突く目ん玉が泳ぎだす　欣之
逃げ切った積りドローンは見逃さぬ　高鷲
逃げません私責任取るつもり　ルイ子
いとおしい路傍にひそと咲くすみれ　堅坊
四季咲きの本音を聞く冬日　あかり
どん底で咲く雑草の花の色　仁
梅咲いて少し悟りの顔になる　薫
年老いてひと花咲かすはずだった　さち子
地獄見た選手に不死鳥が宿る　武人
独り言花瓶の蕾咲きました　麗
会わぬ間に一才歳を取りました　博
タックルを躱してトライ逆転や　晃国
春だから少し話が長くなる　郁夫
会いたくて会えないコロナ禍の絆　賢子
無視してた母の苦言は生きる知恵　信子
ロマンスの華が咲くやも春だもの　朝子
時時は心のガスを抜いてます　弘子
散り際を心得ながら咲いている　弘一

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

花に水人にビタミン俺に酒　廣光
お笑いはビタミンよりも効果あり　野薫
さあチャンス風が吹いたら咲きましょう　ひとみ
恋というビタミン飲んで元気です　堅坊
話の壺メモに安心又忘れ　（福）弘子
その後を問うてから野暮な人とされ　千代
尖ってた蕾も今はおだやかで　敦子
自画像に修正ペンの跡がある　武彦
6Bが残り時間を熱くする　いわゑ
マスクでも伝わる笑顔友と会う　りこ
ぶち切れのお詫びに人が見えてくる　直
二者択一だんだん視野が狭くなる　和宏
世界一の大輪めざす蕾たち　哲子
夢を抱くかたい蕾のいじらしさ　光久
何処からか熱い視線を注がれる　宣子
酒飲みは注いでほしくて酌をする　一徳
核のゴミその後も決めず次世代へ　盛夫
人の輪に生き甲斐できた定年後　洋次郎
弁当にビタミン愛と生野菜　利子
頑張れと別れの一杯注いでやる　正和
馬の足その他の役で出番待ち　野鶴
コロナ消え天下泰平それからは　紀華
風雪に耐えた蕾だ称えよう　千賀子
春まだか梅の蕾はうずうずと　新録
うわさ話油注いで知らんけど　邦男
キレる子のビタミン不足愛不足　俊雄
図書館で知恵のビタミン補給する　昭九朗
ポリープか癌の蕾か内視鏡　哲男
子らたちにかなり注ぐが凡でした　勝弘
粉々に砕け散りたる春うらむ　弘委智
空想を捨てると現実生きてくる　正彦
富岳すご飛沫とび方図で示す　みよし
年寄りのビタミン落語寝る前に　健彦
底抜けの甕に溢れる母の愛　はな

長柳会（大阪）　辻村　ヒロ報

世の動きスピード早く惑う老い　ヒロ
次々と年寄泣かせカタカナ語　洋二
コロナ禍で句会会場あちこちで　規之
杖なしで歩けなくなり老いを知る　ゆき
夫婦仲適当にして丁度いい　由子
元気な日病院行くと決めている　秀子
桃の花ほんのり香るひなまつり　おくみ
腹芸の見事さすがに年の功　千代
出てこない名前ごまかす笑いかな　光弘

命令を要請に換える狡猾さ　邦夫
やられたらやりかえしたらおわらない　正博
無口でもお酒二合で口を割る　孝
晩酌の長いお膳をさっと下げ　由夏
コマーシャルおまけで誘いつい釣られ　幸子
顔のしわ伸ばす薬をさがす義母　隆明
摘まないできれいな花を咲かすから　和子
呆けたかも近頃あまり腹立たぬ　福子
いずれ行くあちら其方もこの僕も　靖博
八十路すぎおまけのように生きている　和代
歴史好き熊野古道の旅に出る　たけし
風誘う竹の葉擦れに遊ぶ耳　三和子
長い旅送る独りのわらべ唄　澄子
コロナ禍に伸び縮みする棒グラフ　隆彦
オマケにしては出来過ぎ余生有難う　ともこ
足音で家族の機嫌はかる朝　ふみ
亡母の歳越えておまけの歳を生き　孝代
善人の私に何故か悪玉菌　正美
トランプ氏さっと消えましょ潔く　純風
釣り上げたバレンタインの鱚の味　直樹
空目掛け広がれ伸びろ子らの夢　淳司

川柳塔なら　大久保眞澄報

小母さんのお喋りスマホより早い　シマ子
故郷の唄うラジオの声に懐かしむ　弘子
私生活ちょっと覗けるオンライン　弘美
指がずれ思わぬ人に秘密漏れ　行久
忖度の配信見せられる庶民　みつこ
記事届くやがて火の粉が舞うページ　ダン吉
あおるだけあおり知らんぷりのテレビ　勝弘
やっとこさの配信すぐに来た返事　大子
スマホより妻振るぬくい手信号　恭昌
ワクチンの配信梅も満開に　ふりこ
情報の無限スマホのネット網　壽峰
配信途切れ国民の声行き詰まる　昭
唇の動きは多分また飲もう　堅坊
ここだけの話はたぶん漏れている　珠子
古傷疼くたぶん明日は雨だろう　いさお
庭先の初蝶きっと亡母だろう　(平)美智子
いただいた多分の笑顔ありがとう　昌代
たぶんからきっとに変わってきた自信　亜成
ご多分にもれず噂の種になり　理恵
アドバイス無ければ匙を投げていた　満作
すんなりと謝罪をしない舌だろう　誠
二階から心配の種落ちてくる　万紗子
まあ座れ春はそのうちやって来る　喜八郎
ここんとこアイツが投句して来んな　憲彦
デジタル化進むおいてけぼりの老い　楓楽
よそゆきの顔して妻が家を出る　恭正
心配事あるから張りのある余生　則彦
万札を持ってお使いする子供　武人
小金出来心配事が増えてくる　俊雄
一人住む母心配の屋根の雪　ひろ子
吐息から吐息へ募り出す不安　寿之
余生暗雲心配事が列をなす　希久子
まん丸が少し歪んできたようだ　恵
溜息の海でおぼれてしまいそう　ひとみ
どうしよう冬に花芽の夏の花　羅天

六甲川柳会(兵庫)　糀谷　和郎報

鮮明に聞こえる双児の産声が　公輔
白内障手術終えたらまぶしくて　克美
鮮明な影も完治のお蔭様　義明
8Kで見るのが怖いサユリスト　博
赤を着て心を少し若うする　美穂
この妻でよかったのだと車椅子を押す　弘
鮮やかなサヨナラ勝ちが歌わせる　崇史
世渡りに昭和修身邪魔をする　ひろし
渡る世間鬼もいるけど福もいる　隆浩
食卓に海を渡って来た野菜　狸月
足らざるを補い合って渡る橋　恭子
句会では古希はまだまだひよこです　利子
大阪の値切るおばちゃんどこまでも　盛夫
まだまだまだもっと年金もらったる　勝弘
詰め放題まだまだまだと欲の皮　美恵子
正論を青い若いと諭される　武彦
又会う日そして忘れぬ指切を　弘華
馴らされてそしてすっかり妻の部下　正美
そして又懲りずに同じ轍を踏む　光久
足元の活断層が揺れ五輪　真桜子
朝ドラに間に合うように起きてくる　正和
そこそこの幸せジャコと缶ビール　和郎
耳遠く怒鳴りあってるクラス会　堅坊
綺麗な字美人に会ったように見る　和宏
ゆっくりと進む遠くに行くために　次郎
待ってます皆で青空出す句会　哲男
ベンチあり一寸と一服明日もある　(鐵)洋一

何でこうなったのか考えている　美津子
数合わせいつも視線が僕に来る　廣　光
三月の海あざやかな赤い船　洋次郎
正面に座った人に教えられ　利恵子
いい風を拾いにちょっと浜辺まで　千賀子
巡り来る季節五感をふるわせて　ひとみ

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

成長の凸凹書いた母子手帳　熊四郎
ピカピカに磨いた窓にコッツンコ　七　七
風呂敷は日本人のエコバッグ　楓　花
桜咲く頃には手帳花盛り　美ッ千
暗号がたくさん書いてある手帳　小　鹿
良い知らせ窓を大きく開けて待つ　ゆたか
ゴージャスなシルクパジャマで寝ています　正　昭
戒名の字数で決めるのがお布施　孝　子
級友のほとんど遠い星にいる　宏　章
すげ替える鼻緒の美人桜花　一　平
窓を背に舟漕ぐ人が管理職　茶　子
幸せと不安書き込む母子手帳　すみれ
ねぎらいの言葉が減ってきた世間　盛　桜
排気ガス０にしないと地球危機　照　彦
あの人に半纏縫った寒の夜　孔美子
一人暮らし気遣い減って我が儘に　慎　一
枕もと常に手帳と添い寝する　弘　六
窓掛けもカラフルにする春うらら　重　忠
柔らかな布で急所を守っている　完　司
崖っ縁粘り今では窓際に　仁
窓を開け閉めずに寝たらコロナ来た　文　道
大切な人がだんだん減る故郷　正　道
警察の手帳葵の御印籠　恒
故郷の思い綴った古手帳　草　文
田んぼ減りブタ草ばかりのさばって　甚　禄
外観は裕福そうな布袋腹　弘　子
仕方ない時に布団かぶってる　かおる
雨蛙減ってきたのか心配だ　英　子
単身を凄い腕に抱きつかれ　蟹　郎
役を終え蔽い親芋一代限り　大　鯰
級長の自覚たしかなランドセル　宣　子
今は無いタイプ検定二級です　睦　子
減る誇り企業戦士の靴の底　ちかし
居酒屋で嬉しい日だと特級酒　瑞　子

あかつき川柳会（大阪）磯島福貴子報

三寒四温春は迷わずやって来る　朝　子
だんだんとその気にさせるコマーシャル　万　作
だんだんと光当らぬ拉致の海　常　男
呑みこんだことばだんだん澱となり　みつ江
医療者に心底感謝ダンダンね　勇
回復に比例して増え欲の数　穏　夫
氷山がとけだし島が沈みだす　ゆりこ
優しさを注ぎ続けて殻を割る　進
だんだんと私が壊れゆくコロナ　里　子
九条の影がしだいに薄れ出す　一　志
ワクチンに世界の狂気浮き沈み　紀　乃
列島は天変地異にこと欠かぬ　(河)正
コロナウイルス不安募らす変異株　ひろ子
盛り上げる為なら変な顔もする　裕　之
歳とともに変化してくる価値感も　(立)信　子
変ですよ笑って住んでる島じゃない　比呂志
ぬるま湯の人生変えた癌告知　征　之
被爆国が核反対をせぬ不思議　美晴日
オリンピック変なカタチになりそうだ　紅　絵
変化ないことが幸せ老いの日々　楓　楽
子育てに折みて加減愛と鞭　(川)信　子
夫は量り私は舌で味加減　風　子
やわらかに生きて命の暮れ加減　(寺)弘　子
人命を握る主治医の匙加減　正　治
核は悪手加減無用絶滅へ　太　郎
政治屋の我関せずの好い加減　壽　峰
好い加減ならＳＭＳは真に受けぬ　(松)敏　子
忖度のさじ加減には裏があり　千鶴子
一面から読むと気分が悪くなる　保　州
モリカケの構図再び親子丼　渓　節
堅琴が哀しい音色響かせる　栄　子
コロナ鬱なおみの笑顔飾りたい　堅　坊
冬陽短しワクチン待ちの群にいる　扶美代
子の変化親も教師も気付けない　(助)和　美
蕗のとう摘んで私に春の恋　(小)恵美子

城北川柳会（大阪）近藤　正報

平均という心地よい場所キープする　洋　志
褒めたあと少し酸っぱいアドバイス　満知子
マスク脱ぐはっきりノーと言うために　郁　夫
腹からの笑い温め合う町だ　克　己
心の隅にずっと焼きつく遠い里　志華子
ツタンカーメン太古の歴史よく喋る　野　鶴

裸木にいのち爆発する新芽　朝子
夜の町議員バッジは平然と　実
平凡な暮らし毎日ありがたい　ルイ子
平均点の人生まさに悔いは無し　福貴子
平穏な午後はヘッセとミルクティー　廣光
なぜかしら酸っぱいものが食べたいな　峰子
ばあちゃんは酸いも甘いも知り尽くす　満作
コロナ禍のマスク季語から外される　かずお
マスクする時は入れ歯を休ませる　久美子
ちょっとずつ溜めこみましたマスクだけ　勝弘
おしゃべりな口でマスクが大嫌い　堅坊
下町はカボチャセレブはパンプキン　黒兎
下町の路地まで書いた老母の地図　宣子
店仕舞い下町の味消えてゆく　正
ご近所のニュースを聞きに行く床屋　利子
化粧され路地の地蔵の無表情　満智子
下町の太陽だった僕の妻　宏造
花ばなに癒され日日の家ごもり　賢子
御洒落でも臑までだしてする足湯　五月
それぞれのスタートライン春四月　和夫
免許返納後悔安堵くりかえす　弘委智
楽観をすぐに見破る新コロナ　正彦
反省の証 黙して手酌酒　博
七万円の食事接待されたいね　一歩
幸せは自分で探すこの足で　万紗子
ワクチンを打つまで春の絵は画けぬ　信子
神仏に頼ることなく生き尽くす　星雨
波たてず知っても知らず見てもみず　俊雄
地球の悲鳴届いていない遠い耳　肇

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

月旅行できたらかぐや姫口説く　徳利
来世あるならまた君を捜す旅　瑞人
コロナ禍がもしなければと悔やまれる　豊仙
もしもとは思うが月に矢を放つ　芳山
余白にはぎっしりもしも並べてる　とも子
もしもから話の弾む友がいる　邦代
歯を磨きやはり決着つけに行く　美智子
酒三合超えたら最後エンドレス　みちを
ダブルありターキーありの主役取る　青帆
ひと寝入り夜長を刻むまだ三時　米估
夜来れば妄想の中君を抱く　久絵
不眠症の妻の寝息に安堵する　あきら
今月も夜の仕事に精を出す　柳歩
月曜の夜はキリンの指定席　雪代
混浴だものドキドキしたいです足湯　弘充
大根足畳の上で育ちます　モナカ
足向けてならぬ大事な人がいる　知恵子
愛情の不足で青い実が落ちる　桂子

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

ワクチンへ喜び満ちる人の列　歌留多
美しいことだけ拾う耳になり　真理子
スカタンで笑い広げる遠い耳　英三
補聴器にマスクめがねの耳多難　健二
空っぽのわたしに幸を見せに来る　きらり
帰郷待てと小包に添う母の文　(伊)武彦
少し残る命のために赤い靴　(永)玲子

喜んで炊いた赤飯丸こげで　公輔
来客へ家内はいつも三つ指で　義明
スタスタと歩く喜び傘寿すぎ　敏昭
耳朶深く亡妹の声母の声　ヨシヱ
イカ徳利わざわざ届く旅だより　野鶴
生真面目に生きる変人かもしれぬ　堅坊
猫踏んじゃった弾くためだけにあるピアノ　利子
黒髪にわざわざ染めた面接日　千鶴子
外食か自炊か迷う独り者　見清
ゆっくりの深呼吸から今日の幸　ふりこ
遠回りわざわざさせる亡母の星　(岩)玲子
生きる喜び増幅させる恋と酒　廣光
菅総理肥大官僚御しがたし　英旺
悔恨の根が繋がっている昭和　肇
貴女さえ居れば喜びアップする　(福)正彦
好奇心何より老いに効く薬　美津子
どんどんと没句が溜まる一万句　勝弘
春一番画鋲だらけの掲示板　洋志
目が徐徐に見えなくなって耳冴える　美智代
不便さへ引越して来た家族連れ　哲男
喜んだ顔は遺影に取ってある　則彦
ちょっぴりと嘘もまじえて喜ばす　扶美代
手を添えてときめき拾う春の耳　(初)正彦
マスク越しに春の匂いの沈丁花　黒兎
座禅組む耳鳴り消えている不思議　千賀子
遥々と来た甲斐あったセレモニー　満作
ライバルは居ない私の平和論　ひとみ
満面に微笑あふれる大漁旗　美籠

川柳さんだ（兵庫）　酒井　健二報

どこまで増やすんやろ国の借金　正和
居酒屋が閉店八時でもうけ増え　雄太郎
施設行き増えて空家が増す日本　加代子
又一軒染みの暖簾消えた路地　厚子
ポッポッと新芽明るい庭に立つ　ヨシエ
お日様を知らぬ野菜が増えていく　稠民
効き過ぎた増毛剤が心臓に　勝士
近い仲知らぬ顔して目で話す　峰明
近道をすればワン公不足顔　耕治
またかいな尿意もよおすもぞもぞと　つな子
目の前で火星軟着テレワーク　昭
駅近で医者とスーパーあれば良し　義徳
ワクチンの接種も近い春うらら　紀乃
被害者へマイク向けるのやめてんか　利尚
児を叱るマナーを知らぬ親ごころ　一之
大切なマナーが出来ず辞任する　正彦
幼児期の育ちが左右するマナー　婦美子
グランドに一礼をして去る球児　雅尚
老人の繰り言嫌な顔もせず　晃
交差点の盲導犬をごらんあれ　美津子
ありがとうごめんが言える二才半　ちあき
古希の旅目指すリュックが踊ってる　恭子
金婚式二人の努力もう少し　廣光
目標はオリンピックと言う園児　哲男
ハイハイの目指す所はママの膝　利子
なんとなくゆっくりふわり生きていく　ひとみ
いつの日か大海目指す岩清水　修平
百めざし一歩半歩と八十路坂　和宏
ひた走る一途が生きた新記録　武彦
孫こぬが爺と婆とで雛まつり　五月
美人妻娶った孫の得意顔　義朗
蛸壺の蛸は自粛をして獲られ　万彩
後期には呪文のようなデジタル語　祐康
今日もまた空気を乗せてバスがゆく　高志
コロナ禍でちょうど良かった家族葬　健二

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

もしもしと貴方ホントに息子なの　清
一夜漬けゆっくりできぬ試験前　和雪
コロナ消息無神論者も神頼み　信子
パニクって貧乏神に神頼み　常男
陽炎消えて恋を深める山の裾　耀一
八月の海神群青が眠る　かこ
ゆっくりと三寒四温春動く　寿之
ゆったりとワイン心の日曜日　あかり
お互いに頼み頼まれ睦み合う　高鶯
ポン菓子の音が弾ける春の辻　欣之
呼ばれるままに春と戯れる　恵
陽炎が肌に染み込む春隣　壽峰
誕生日越える嬉しさ重さ知る　卓郎
陽炎で歪む線路を来る電車　涼子

六甲川柳会（兵庫）　糀谷　和郎報

ストレスのない人生も味気ない　克美
投函をまだかまだかと待つ賀状　義明
マー君の投げる雄姿がまた見れる　道子
投了はまだまだ奇跡信じてる　恭子
人生を投げてはならぬ東尋坊　狸月
何気なく投げた言葉が波紋呼ぶ　美恵子
曲球を上手く捕らえる妻が居る　正美
金の相談なくてやれやれ二人の子　堅坊
やっとこさワクチン投与できそうに　勝弘
にわか雨走りこみます縄のれん　美津子
コロナ禍の自粛一年寒の月　洋次郎
救急車待たせて囃す一気飲み　博
わたくしができあがるまで身を削る　和郎
さあ大変大事な資料削除した　崇史
鉛筆を尖らせていた肥後守　哲男
まだ女お化粧代は削れない　千賀子
義理一つ削れぬままに彼岸花　憲三
美しくより美しくなる命　ひとみ
4Bが削られ走る紙の上　(磯)洋一
てにをはを削って足して五七五　利子
不束な女を削る武器ひとつ　公輔
父も母も笑顔ばかりが残ってる　和宏
乱反射しながら咲いた雪の華　真桜子
春風に背中押されて一万歩　武彦
好奇心枯れないようにペンを研ぐ　弘華
百点と百点がする大喧嘩　利惠子
無精髭剃ったつもりでマスクする　降浩
南南東恵方にあるぞ甲子園　正和
涙の味知って大人になってゆく　廣光
負けた悔しさその悔しさがバネになる　光久
寒風に耐えて美味しい冬野菜　盛夫
深呼吸言葉を丸くしたいから　次郎

庭先で春を示唆する蕗の薹　美穂
車椅子乗り手も馴れて笑み返す　ひろし
ストレスを跳ばす一日一度大笑い　弘

大山滝句座（鳥取）　**新家　完司報**

春うららバスがコースを間違える　風露
あした目が覚めますように願う酒　紀の治
労働歌つらい時には歌が出る　幸子
弱いから肩を組まねば生きられぬ　芳光
悪法も中国流の民主主義　照彦
プライドが崩れぬように腕を組む　芳山
ワクチンが失望を希望に変える　楓花
ふる里の森は光っていて欲しい　八千代
収穫の時を希望にイモの種　富隆
たんぽぽの綿毛四月の大空に　順子
今の世も越後屋さんはご健在　雄大
腕組んで歩いたこともある昔　けいこ
ストレスと手を組むことにした傘寿　余光
三月の希望が四月には消える　正人
色塗って光らせておく悪の道　麦青
はらはらと欲も希望も落ちる老い　由紀子
絶望と希望と夢の綱渡り　石花菜
デジタルへ未消化のまま旅続く　美ッチ
中国と組み波高しインドシナ　仁
汗かかず木陰でゼニを貯める人　隆昌
国会は法に触れなきゃ悪くない　道春
青春の努力と汗で組んだ塔　小鹿
悪知恵が湧くからまんだくたばらぬ　重忠
竹藪に行けばお金が置いてある　久子
先生が銀座夜遊び文春砲　清明
若い頃スクラム組んで労働歌　希楽良
絶望の果てにもきっと生きる道　コスモス
善行は一人悪行は徒党組む　規雄
生き残りゲームいよいよラストラン　完司

川柳塔さかい（大阪）　**内藤　憲彦報**

生真面目をちゃらんぽらんに見せる老い　冨美子
借りものと自分のものがごっちゃ混ぜ　雅明
かじっては捨てかじってはまた捨てる　進
好い加減で誰も気にせず生きている　唯教
ちゃらんぽらんな人は不思議によく眠る　いさお
かたくなな心耕すおもいやり　朝子
四季の土香る父母から来た学費　五月
母は耕す目映いほどの花のため　志津子
脱サラに教え乞われる老農夫　玄也
耕した日日にふっくらする余生　堅坊
水耕のイチゴで活気過疎の村　みつ江
幼な子の脳を耕す読み聞かせ　禮子
都会なのにバス一時間に一本　勝弘
木簡が都の文化喋りだす　憲
大都会地下から人がどっとわく　輝子
ずうっと同じ都こんぶのパッケージ　満知子
母さんの都合で今日は出前館　ゆみ子
都知事さん笑顔で話して下さいな　廣子
ええかげん諦めなはれ都構想　みつこ
都大路コンチキチンと鉾が練る　(綾)清
心機一転都落ちして出世する　舞夢
都の杜森林浴で癒される　佳子
耕した顧客がくれる社の利益　光雄
春耕に雲雀飛び立つ空高く　八千代
耕した土へ尻餅つけておく　扶美代
天地に祈る姿勢で鍬を打つ　時雄
子育ても耕すほどに芽が伸びる　満作
春耕の汗でコロナに立ち向かう　敏治
新顧客汗水たらし掘りあてる　敬子
良き伝統耕す汗は惜しまない　憲彦
預貯金が趣味で笑顔が遺せない　和夫
ヨーイドンしっかり走れ伸び盛り　美津子
嫁はんが知らん顔するのに弱い　さくら
嫁はんが死んでそれから飲助に　としお
寄り添ってしみじみと聞くノクターン　ひろ子

八尾市民川柳会（大阪・前月号）**中薗　清報**

立ちかけて臨時ニュースが座らせる　常男
突然の来訪慌てる風呂上がり　信子
本物がいない議事堂ムダ論議　耀一
袖触れ合い抜き差しならぬ深い仲　高鶩
もしもしと貴方ホントに息子なの　清
芯の有る番クルクル夫婦独楽　壽峰
ほんものになりたいけれどコピー品　和雪
屠蘇に積もる私の削りかす　惠
作り笑顔に深層の闇見る瞬時　涼子
種蒔いて花花花の春を待つ　寿之
スマイルではじめる春は上機嫌　かこ
天国に届けてやれぬ亡母の杖　卓郎
みんな皆磨けば光るほんまもん　あかり
人間を覗けば深い深い井戸　欣之

句会名	日時と題	会場と投句先
あかつき川柳会	14日(金) 14時締切 スマート・角・思案・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２Ｆ） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区３－６　木村ビル２階 あかつき川柳会
岸和田川柳会	15日(土) 14時 駅・眩しい・たんまり・ジャズ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩５分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳塔みちのく	15日(土) 17時締切 厚い・血・乳	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳ねやがわ	投句句会　26日締切 駆け引き・切符・味わう・王様 自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町９－９　高田博泉
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 ジャンケン・風・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時50分締切 直球・並ぶ・ぽんと・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
和歌山三幸川柳会	22日(土) 13時15分締切 歌・心配・仲間 投句締切13日	和歌山商工会議所　4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 鼻・憎い・コース・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	23日(日) 13時から 自由吟・二流・青春・天敵 席題	県民ふれあい会館　4Ｆ　鳥取市扇町２１ 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪川柳会	投句句会　17日締切 サプライズ・空想・割る 温い・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5Ｆ　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901　松岡　篤
川柳塔すみよし	29日(土) 14時締切 術・煮る・無茶苦茶な事	住吉区役所内　住吉公民館　2Ｆ 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
川柳たちばな	21日(金) 13時45分締切 印象吟・駅（互選）・そっと 自由吟	立花北生涯学習プラザ 尼崎市塚口町3-39-7　℡ 06-6422-6741 〒 661-0953 尼崎市東園田町３－49－５　藤井宏造
川柳さんだ	誌上句会 仲間・恋しい・ショック 眺める・自由吟	(投句先) 〒651-1514 神戸市北区鹿の子台南町４－46－５ 冨永恭子

★上記は年初計画です。諸般の事情上、詳細は各柳社にお問い合わせください。

5月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	投句句会　1日(土) 締切 軒・喚く・グラグラ・余談 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳とんだばやし富柳会	1日(土) 14時締切 囮・コチコチ	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8-31　山野寿之
倉吉川柳会	1日(土) 14時締切 俄か・目盛り・好き・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	1日(土) 13時30分締切 影・知る・軽い・たっぷり	投句先 〒690-1233 松江市美穂関町笠浦221－1　相見柳歩
六甲川柳会	6日(木) 締切　誌上句会 大変・破る・わずか・眩しい 自由吟	〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔なら	3月末日投句締め切りました 顔・モノクロ・高らか	〒633-0341 磯城郡田原本町薬王寺150－21　中堀　優
川柳大阪	8日(土) 13時開場 ツバメ・昔・四季	メトロ・長堀鶴見緑地線・京橋駅　研修室 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
川柳塔打吹	8日(土) 13時30分締切 橋・疲れる・ギクシャク・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民川柳会	9日(日) 14時締切 夏山・ここから・救う・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔わかやま吟社	9日(日) 14時10分締切 兼　題＝質問・原・スリル 課題吟＝板	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口川柳会	投句句会　10日(月)締切 一新・手伝う・足跡・しげしげ 自由吟	投句先変更 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 新聞・信じる・関西弁	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	8日(土) 投句締め切り パンチ・育てる・溜息 折句：み・さ・き	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8122　堺市東区丈六77の4　齋藤さくら
川柳あまがさき	11日(火) 14時締切 朗らか・鞄・爛爛・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造

柳界展望

★第7回詩歌文学館館長賞受賞
新家完司川柳集（7）『令和元年』

★「井上剣花坊生誕150周年記念誌上大会」、参加者136名。同人成績。

特　選　永見　心咲
昼弁の独りずっと見た柳

特　選　森山　盛桜
方舟になろうと樽は決めている
誤嚥したのは「あ」だったのか「ん」だったのか

★「第47回河北川柳投句者大会（誌上大会）」、参加者205名。同人成績。

1位　河北新報社賞
高瀬　霜石
特　選　高瀬　霜石
お隣は空家お向いは売り家

★「第15回ふくやま文学選奨」。同人成績。

川柳部門　最優秀賞
永見　心咲
ソプラノで咲かせる白い花蜜柑（他4句）

秀　逸　坂本　加代
じっくりと思考じわじわ光り出だす（他2句）

★「川柳塔わかやま吟社」

2020年度　葵水賞
藤原ほのか
線引きをされて立ち位置自覚する

★番傘フェスタ2021年誌上大会には908名の投句者があり本社同人成績は次の通り。

フェスタ賞　永見　心咲
ロボットと人間しなやかなハグを
居谷真理子
大笑いしたあと生まれ変わってた
石橋　芳山
ジョバンニの切符握って天の川
沈黙は無限ササリンドウの露
辻内　次根
もやもやは四十二度の湯に浸かる

▽**柳界動向**△

○「川柳塔さかい」役員交代。四月から
会　長　内藤　憲彦氏
副会長　齋藤さくら氏

▽**訂正とお詫び**△

○P1072段目「新誌友紹介」福山市　閑・地耕三→開・地幸三。

○裏表紙「第14回オニザキ『ごま川柳』」。入選句一行目の句。稼ぐ→嫁ぐ

▽**訃　報**△

○吉岡修さん（同人・四條畷市）が3月10日逝去。享年95。

▽**新誌友紹介**△

福山市　**小林　好枝**
広島市　**西村スミエ**
福山市　**日崎　美代**
岡山県　**今田　明男**
紹介者　小島　蘭幸
丹波篠山市　**白川智恵子**
紹介者　北澤　稠民
尼崎市　**宗　和夫**
紹介者　木本　朱夏
山口市　**兼崎　徳子**
紹介者　中前　幸子

秋元てるさん（同人・西宮市）から金一封拝受しました。

誌上大会案内や投句用紙を川柳塔誌と一緒に配布ご希望の方は事務所へお問い合わせください。（有料です）

第64回　井笠川柳会誌上大会
「蘖」ひこばえ

課題と選者（各題2句・共選）

「夜（よる）」	「古い（ふるい）」
紫　しめの	大家　風太
田辺与志魚	矢沢　和女
新家　完司	小島　蘭幸

応募要領　便箋または所定の用紙に各題2句（計4句）を列記し郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社を明記し投句料と共にご送付ください。
投句料　1000円（定額小為替）
締切　**令和3年5月31日（月）消印有効**
投句先　〒714―0081　岡山県笠岡市笠岡2289
井笠川柳会
TEL・FAX　0865－62－6200
賞品　各課題毎に、天位獲得者3名のうちから1名に句碑を贈呈します。
主催　**井笠川柳会**

句会部よりお知らせ

川柳塔本社６月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』５月号に投句用紙を同封します。
（未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。）
投句締切　５月３１日（月）消印有効
入選発表　『川柳塔』令和３年８月号
投 句 料　１０００円（切手不可）

兼題	「泣　く」	冨永　恭子　選	（兵庫県）
兼題	「急　ぐ」	古久保和子　選	（和歌山県）
兼題	「ムード」	竹村紀の治　選	（鳥取県）
兼題	「　泡　」	植竹　団扇　選	（東京都）
兼題	「勇　気」	小島　蘭幸　選	（広島県）

（各題２句出し）

問い合わせ・送り先
〒543－0052　大阪市天王寺区大道１－１４－１７
花野ビル２０１　川柳塔社
TEL 06-6779-3490

2021年度静岡県川柳誌上競吟大会

課　　題　各題２句・未発表作品に限る（表現自由）

「兆　し」	本木　朱夏選
「兆　し」	佐藤　灯人選
「　土　」	荒川　照美選
「　土　」	荒牧やむ茶選
「　巣　」	古谷龍太郎選
「　巣　」	竹平　和枝選
「ゲーム」	今田　久帆選

受　　付　**2021年5月１日(土)～2021年6月30日(水)当日消印有効**
投句料　静岡県川柳協会会員５００円
会員外　１０００円（小為替または現金封筒）
応募方法　所定の用紙（コピー可）住所・氏名・電話番号・所属吟社名を記入の上投句料と共にお送りください。
表　　彰　１位～３０位
投句先　〒426-0087 藤枝市音羽町5-17-11
岩城　干城　宛
TEL・FAX　054-643-0501
主　　催　静岡県川柳協会

番傘わかくさ川柳会
創立７５周年記念全国誌上川柳大会

課題と選者（各題１句）

「　顔　」	赤井　花城　選
「望　み」	江畑　哲男　選
「階　段」	小笠原　望　選
「広がる」	小島　蘭幸　選
「太　陽」	阪本　高志　選
「ときめき」	真島久美子　選
「出会い」	田中　新一　謝選

各　　題　秀句に賞呈
応募料　１０００円（郵便小為替・切手不可）
応募締切　**令和３年７月５日(月)必着**
発　　表　わかくさ誌　９月号
応募先・お問合せ
〒578－0935
東大阪市若江東町４－５－12
竹村　穏夫宛
電話　072-964-3548
主　　催　**やまと番傘川柳社**

編集後記

★人生譜柳は日々の風を見す　薫風

★コロナワクチン接種受付が始まった。各自治体によって受付方法が異なるため、混乱が生じているようだ。インターネットにしても電話にしても、どうせ殺到してつながらないだろうし、そもそもワクチンの絶対数が足りないのだ、と私は最初から諦めている。いずれトリアージ、命の優先順位が始まるだろう。闇の中で取引されることがないことを祈りたい。それにしても医療大国日本で一年たってもワクチンがほとんど開発できていない現実に絶望している。

★本誌に「川柳塔の讃歌」を連載中の木津川先生のNHK「ラジオエッセイ」は今年で41年目に入る長寿番組です。6月からのテーマを「川柳の描く人生」として川柳塔同人の句を中心に、人生の哀歓を語られます。先生の語り口には定評があります。関西エリアの放送ですが毎週水曜日、午後4時32分から42分まで10分間「ラジオで川柳塔の讃歌」にお耳をお貸しください。

★思いがけぬ儲けものだった。何のことかといえば偶然手にした本の話。エイモア・トールズ著『モスクワの伯爵』は1917年に起きたロシア革命によって、はからずもモスクワのホテルに軟禁された伯爵の半生を描いた物語である。スイートから屋根裏部屋へ、軟禁は実に32年間に及ぶ。こう書けば暗く惨めな物語だと思うだろう。そうではない。魅力的な主人公伯爵を中心に、淡々と流れる時間にいつの間にか引き込まれ、620頁を一気に読み終えた。何よりの収穫はロシア革命の光と影を知ることができたこと。良質の本を読んだあとの心地よい余韻に浸っている。

★私たちはコロナウイルスに軟禁され、不自由な日々を余儀なくされていますが、今しばらくお互いに自衛しましょう。

（朱夏）

□大阪の人口は880万人、4月8日現在の感染者数は延べ約5万7千人、154人に1人の割合で感染している。いつ誰が感染しても不思議でない状態になっている。でも防止策は、マスク・手洗いとウガイしかなく、期待しているワクチンも入荷が遅れ、国民の1%しか接種されていないのに、国会議員や役人たちが飲み会を開いている。大阪は、感染者数が「右肩上がり」とか、「通天閣に赤い灯を点す」などと悠長なことを言っている。極端に言えば「ロックダウン」が、今求められている状況ではないのかと私は思う。

□そういう中でも、テレワークを中心に「川柳塔」誌を編集・校正している編集部。本社誌上句会に取り組んでいる句会部・企画部。「川柳塔」誌の発送を担当している発送部が、それぞれの役割を果たしています。エヘン エヘン。

（勝弘）

ひとこと

草テニス

長い年月楽しんでいるものは混声合唱とテニスです。合唱は小学校からで70年以上、テニスも60年以上のキャリアがありますが、大会に出る腕前はない草テニスです。10名の仲間は私以外全員男性で、70歳代の高齢者集団なのに猛暑日も休まず楽しめる元気者ぞろいです。

合唱もテニスも体力が勝負、食事の管理は勿論、毎朝のラジオ体操で関節を動かし、一日4～50分の速歩で心肺機能を高め、ストレッチや簡単な筋トレも欠かさないように心掛けています。

昨春膝を痛め、歩くのも辛い日が3箇月続きましたが、何とか回復してテニスが出来るようになりました。傘寿過ぎの体を労りつつ1日でも長く「お喋りも楽しみのうち草テニス」を続ける予定です。

（板山まみ子）

川柳塔誌新規購読申込書

年　月　日

氏名		住所	〒　－	電話	－　－	紹介者	

年　月から半年　5000円　○
年　月から一年　9800円　○
該当の方に○をつけて下さい

きりとりせん

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話 06－6779－3490）
振替 00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

令和三年 五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一一二八号 川柳塔 五月号
定価 八百円（送料 百円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あなたの思いを
かたちにします

具体的なアイデアがある方はもちろん、「こんな出版物をつくりたい」という漠然とした思いだけでも結構です。まずはあなたの「思い」をお聞かせください。
じっくりと丁寧にお話を伺いながら、それをかたちにするお手伝いをいたします。

美研アート
TEL 06-4800-3018 FAX 06-4800-3028
〒531-0061 大阪市北区長柄西 1-1-10
ホームページ https://www.bikenart.com Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
営業時間 平日 10：00～17：00 定休日：土／日／祝

雑誌 05703-5

お知らせ

6月7日(月)開催予定の本社句会は中止と決定、誌上句会として開催いたします。

詳細は119頁をご参照ください。

変異株が猛威を振るい、終息の見込みには程遠いのが現状のようです。ワクチン接種も始まりましたが、三密を避け、マスク、消毒、換気を忘れず、身の安全を図りましょう。

本社6月句会は誌上句会です

詳細は川柳塔5月号119頁ご参照

投句締切日5月31日、発表8月号

兼題「泣　く」「急　ぐ」「ムード」「　泡　」「勇　気」

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸　選

水煙抄（8句）　西出楓楽　選

愛染帖（2句）　新家完司　選

檸檬抄「微　妙」（2句）　石橋芳山　古今堂蕉子　共選

インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世　選

一路集（2句）「かたち」　岸本宏章　選

「　骨　」　木見谷孝代　選

初歩教室「空　気」（3句）　居谷真理子　担当

初歩教室「空気」は8月号発表

8月号

檸檬抄「縫　う」

一路集「　声　」「引　く」

初歩教室「ボタン」

川柳塔柳箋

3冊　送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

定価　八百円（送料100円）

半年分　五千円（送料共）

一年分　九千八百円（同）

二〇二一年（令和三年）五月一日発行

発行人　小島和幸

編集人　木本朱夏

印刷所　美研アート

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル201号室

発行所　川柳塔社

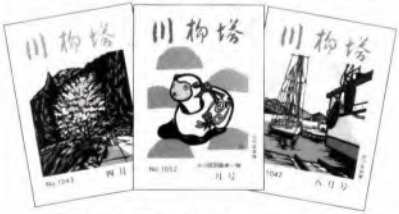
電話（〇六）六七七九―三四九〇番

振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL（06）4800―3018

FAX（06）4800―3028

Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp

ホームページ https://www.bikenart.com